正法眼蔵随聞記の現代語訳

正法眼蔵随聞記第一巻

侍者 懐奘 編

第一章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

「続 高僧伝」の中に、次のように、記されている。

ある禅師の会の下に、ある僧がいた。

その僧は、黄金像の仏像と、仏の遺骨を崇め、用いて衆寮などにいても、常に、焼香して礼拝し、恭しく敬って捧げものを捧げていた。

ある時、その禅師は、次のように、話した。

「あなたが崇めている仏像と仏の遺骨は、後には、あなたのためには、善くないであろう」

その僧は、聞き入れなかった。

その禅師は、次のように、話した。

「仏敵である天魔波旬が為すような所作なのである。早く、その所作を捨てるべきである」

その僧が怒って出て行くと、その禅師は、その僧の背後に、次のように、話しかけた。

「あなた、箱を開いて、仏像と仏の遺骨を見なさい」

その僧が怒りながら、箱を開いて見ると、毒蛇が、とぐろを巻いて潜伏していた。

この話によって、考えると、

仏像と仏の遺骨は、仏が残してくれた像と遺骨なので、恭しく敬うべきであるが、「仏像と仏の遺骨を仰いで敬うだけで、悟りを得よう」と思ってしまうと、かえって逆に、邪悪な見解なのである。

天魔波旬や毒蛇のようなものに支配される原因に成ってしまうのである。

仏が説いてくれた功徳は確定の事なので、（仏像や仏の遺骨への善行が、）人や天人の幸福の分け前と成る事は、生身の仏への善行による幸福と等しいのである。

総じて、仏、仏法、僧という対象を恭しく敬って、捧げものを捧げれば、罪は滅び、功徳を得、地獄などに堕ちてしまう悪業をも消し、人や天人の結果をも感じる事は、真実なのである。

しかし、「仏像や仏の遺骨を敬うだけで、法の悟りを得よう」と思ってしまうのは、邪悪な見解なのである。

仏の子、仏の弟子である僧に成るのは、仏教に従って直に仏の位へ至るためなので、ただ、仏の教えに従って工夫して真理をわきまえるべきなのである。

仏の教えに従う真実の修行とは、今の禅寺が主要としている坐禅に打ち込むのに専念する事なのである。

坐禅に打ち込むのに専念する事を思うべきである。

第二章

道元は、また、次のように、話した。

「戒と、節制と清浄を守るべきである」と言って、強いて、主要であるとして、戒と節制と清浄を修行に見立てて、「戒と節制と清浄だけで、真理を会得しよう」と思ってしまうのも、善くないのである。

ただ、戒と節制と清浄は、僧の日常の所作、仏の子、仏の弟子である僧の家風なので、仏の教えに従って行うのである。

「『戒と節制と清浄は、善い事である』と言われているから」と言って、「主要である」とする事なかれ。

しかし、「戒を破って、自由奔放で邪悪であれ」と言っている訳ではない。もし、「戒を破って、自由奔放で邪悪であれ」と執着してしまえば、邪悪な見解なのである。外道なのである。

戒と節制と清浄は、ただ、仏の家である仏教の所作、寺の家風なので、仏の教えに従っていくだけなのである。

戒と節制と清浄を主要であるとする事は、私、道元が宋の時代の中国の寺院にいた時に、僧達にも見られなかった。

実に、真理を会得するためには、ただ、坐禅して工夫するだけであるのが、仏と祖師達の伝承なのである。

このため、私、道元と同門であり、「葉上僧正」とも呼ばれる故人である栄西の弟子である、五眼房が、唐の時代の中国の禅の寺院で、節制と清浄を

堅く守って、戒の経を終日、読んでいるだけであったのを、私、道元は、教えて説得して、捨てさせて、やめさせたのである。

第三章

懐奘は、次のように、質問した。

禅寺で、仏道を学び修行する時の所作では、百丈懐海による清規を守るべきですか？

そうであれば、「清規」には、「僧は、最初は、戒を受け入れる事と、戒を守る事を優先する」という記述が見られます。

また、今の、伝えられて来ている伝承には、「根本戒を授ける」という記述が見られます。

当門の、口伝の秘訣と、言い表せないものを顔と顔を合わせて授ける事でも、西のインドから来た第二十八祖の達磨が伝えてくれた戒を、未だ学ぶべき物が有る人である僧に授けます。

その戒とは、今の菩薩戒なのです。

それに、今の戒の経には、「日夜、この戒の経を読みなさい」と記されています。

道元は、五眼房に、なぜ、戒の経を読むのを捨てさせて、やめさせたのですか？

懐奘の師である、道元は、次のように、話した。

その通りなのである。

未だ学ぶべき物が有る人である僧は、最優先で、百丈懐海による規則である「清規」を守るべきである。

さて、「清規」の所作とは、戒を受け入れる事、戒を守る事、坐禅などなのである。

「昼夜、戒の経を読み、戒を守る事に専念する」と言うのは、古代の先人の日常の所作に従って、坐禅に打ち込むのに専念する事なのである。

坐禅している時、どの戒も保持する！　どの功徳も来る！

古代の先人が修行しておいてくれた日常の所作は、全て、深い心による物なのである。

私的な心の欲望と願望を無くして、僧達に従って、古代の先人の日常の所作に心身を任せて、修行していくべきなのである。

第四章

道元は、ある時、僧達に示して、次のように、話した。

仏照禅師の会の下に、ある僧がいて、病気の時、肉食したいと思ってしまった。

仏照禅師は、肉食を許して、食べさせた。

仏照禅師は、ある夜、自ら、寺の延寿堂に行って、見てみると、明かりの火を暗くして、その病気の僧が、また、肉を食べていた。

その時、一人の鬼が、その病気の僧の頭の上に載って居て、その肉を食べていた。

その僧は、「肉は自分の口に入っている」と思っていたが、その僧は食べておらず、その僧の頭上の鬼が食べていたのである。

仏照禅師は、それ以降、その病気の僧が肉食を好むのは、鬼に支配されてしまっている、と知ったので、肉食を許した。

この話について、考えると、

許すべきか？　許すべきではないか？　事情の考慮が存在するべきである。

五祖山の法演の会でも、僧が肉食する事が有った。

許すのも、制止するのも、古代の先人の心には、全て、意図が有るのである。

第五章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

人は、「その家に生まれ(変わり)、その道に入ったならば、まず、その家業を修行するべきである」と知るべきなのである。

自分の道ではなく、自分の務めではない事を知ったり、修行するのは、善くないのである。

今も出家者として、仏の家である仏教に入って僧と成ったならば、仏教の善業を習うべきなのである。

「仏教の善業を習い、仏教の所作を守る」と言うのは、自説や自身への執着を捨てて、善知識を持つ人々の教えに従うのである。

善知識を持つ人々の教えに従う、主旨とは、貪欲を無くす事なのである。

「貪欲を無くそう」と思うならば、まず、自説や自身への執着を離れるべきなのである。

自説や自身への執着を離れるには、この世のものは常に変化するのを観察するのが、第一の用心なのである。

世俗の人々は、多くが、「私は、本(もと)より、他人にも『良い』と言われたり、思われたりしよう」と思ってしまうのである。

けれども、「良い」と言われたり、思われたりしないのである。

次第に、自説や自身への執着を捨てて、善知識を持つ人々の言葉に従っていけば、精進する事に成るのである。

真理を心得ているように言って、「それは、そうだが、私は、これを捨てる事ができ得ない」と言って、執着し、好み、修行するのは、ますます、沈没する事に成ってしまうのである。

禅僧が善く成るための第一の用心は、坐禅に打ち込むのに専念する事なのである。

利発か愚鈍か、賢者か愚者かを論じず、坐禅すれば、自然に、善く成るのである。

第六章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

広く学ぶ事、広く見聞きする事は、叶えるべきではない事なのである。

完全に、思い切って、やめるべきである。

ただ、一つの事だけについて、用心、前例をも習い、先人の達人の日常の所作をも尋ねて、一つの修行に専念して励んで、人の師や先人の達人のふりをしない事なのである。

第七章

懐奘は、ある時、次のように、質問した。

「奥底まで因果をくらまさない道理とは、どのような物なのでしょうか？」

懐奘の師である道元は、次のように、話した。

「因果は不動なのである」

懐奘は、次のように、話した。

「どのように、(不動な)因果を脱ぎ落とすのでしょうか？」

懐奘の師である道元は、次のように、話した。

「因果は、歴然と明らかなのである」

懐奘は、次のように、話した。

「そうならば、

原因が、結果を引き起こすのでしょうか？

結果が、原因を引き起こすのでしょうか？」

懐奘の師である道元は、次のように、話した。

「仮に、全て、結果が原因を引き起してしまうならば、南泉普願が子猫を斬ってしまった(ふりをして子猫を遠くに捨てた)、あの話で、僧達は既に何

も言う事ができ得ない事に成ってしまうし、子猫を心の隙として斬り終わってしまった(ふりをして子猫を遠くに捨てた)事に成ってしまう。

後に、真際禅師とも呼ばれる趙州従諗は、頭に履物を戴いて出たが、一段と際立っている所作なのである」

(※「南泉斬猫」という話で、真際禅師とも呼ばれる趙州従諗は、頭を原因に例え、足と履物を結果に例え、頭に履物を載せているのを原因と結果を取り違えているのに例え、子猫を争った僧達の未熟な心が原因であり、子猫は結果に過ぎないのに、南泉普願が子猫を原因として斬ってしまったふりをして子猫を遠くに捨てたので、頭に履物を載せて抗議した。)

道元は、また、次のように、話した。

「私、道元が、もし、仮に、(『南泉斬猫』という話で、)南泉普願であったならば、次のように、話すであろう。

『何か言う事ができ得ても、子猫を心の隙として斬ろう。

何も言う事ができ得なくても、子猫を心の隙として斬ろう。

誰が、子猫を争うのか?

誰が、子猫を救うのか?』

私、道元は、僧達に代わって、次のように、話そう。

『既に、何も言う事ができ得ないので、和尚、南泉普願よ、子猫を心の隙として斬りなさい』(※はったりである。本当に、斬りなさい、と言っている訳ではない。)

しかし、すぐに、私、道元は、僧達に代わって、次のように、話そう。

『和尚、南泉普願は、ただ一刀両断しか知らず、一刀一断を知らない』」

懐奘は、次のように、話した。

「『一刀一断』とは、何ですか？」

懐奘の師である、道元は、次のように、話した。

「(無事なままの)子猫である」

道元は、また、次のように、話した。

「僧達が答えない時、私、道元が、仮に、南泉普願ならば、『僧達は既に何も言う事ができ得ない』と言って子猫を捨てたりしないであろう。古代の先人は、次のように、話している。

『悟りの大いなる作用が現に目の前に存在していて、規則を無視して超法規的である』」

(※「南泉斬猫」という話で、南泉普願は、正しい僧なので生き物を殺すはずが無いので、子猫を斬ってしまったふりをして、子猫を遠くに捨てた、と道元は考えている。)

道元は、また、次のように、話した。

「今の(『南泉斬猫』という話の)『猫を斬ってしまった』という嘘は、仏法の、『悟りの大いなる作用が現に目の前に存在していて、規則を無視して超法規的である』という事なのである。

あるいは、(正しい目的のための嘘も、)心を一転させる言葉なのである。

もし、仮に、(正しい目的のための嘘も、)心を一転させる言葉でなければ、『山や河や大地は、(仏の)妙なる清浄な明るい心による物なのである』と言う事ができなく成ってしまう。

また、『(正しい)心が、仏なのである』とも言う事ができなく成ってしまう。『心を一転させる言葉』という言葉の下で、『子猫は、仏の身なのである』と見なさい。

また、前述の言葉を聴いて、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、すぐに、悟りに入るべきである」

道元は、また、次のように、話した。

「この(『南泉斬猫』という話の)『猫を斬ってしまった』という嘘は、仏の行いなのである。

呼んで、何と、言うべきであろうか?

呼んで、『猫を斬ってしまった、という嘘』と言うべきである」

懐奘は、次のように、話した。

「(正しい目的のための嘘は、一見、)罪に見えるか? 否か?」

道元は、次のように、話した。

「(正しい目的のための嘘は、一見、)罪に見える」

懐奘は、次のように、話した。

「どのようにして、(嘘を)脱ぎ落とすのでしょうか?」

道元は、次のように、話した。

「別々に区別する見解を無くすのである」

懐奘は、次のように、話した。

「『戒を守って別々の悪行から解脱する』とは、このような事を言っているのでしょうか？」

道元は、次のように、話した。

「その通りである」

道元は、また、次のように、話した。

「ただし、このような(、『正しい目的のために嘘をつく』という)考えは、たとえ善い事であっても、しないで済む方(ほう)が善いのである」

第八章

懐奘は、次のように、質問した。

「『犯戒』、『戒を破ってしまった』という言葉は、戒を受け入れて以後に戒を破ってしまったのを言うのでしょうか？

それとも、また、未だ戒を受け入れていない以前の戒を破ってしまったのをも『戒を破ってしまった』と言うのでしょうか？

どうなのでしょうか？」

懐奘の師である道元は、次のように、答えた。

「『戒を破ってしまった』という名称は、戒を受け入れた後に戒を破ってしまったのを言うべきである。

未だ戒を受け入れていない以前の所作のうち罪に見える物を、ただ、『罪に見える物』、『罪業』と言い、『戒を破ってしまった』とは言うべきではないのである」

懐奘は、次のように、質問した。

「『四十八軽戒』の中には、『未だ戒を受け入れていない時に戒を破ってしまったのを、戒を破ってしまった、と名づける』と記されているのが、見られます。

どうでしょうか？」

道元は、次のように、答えた。

「そうではないのである。

ある者が未だ戒を受け入れていない者である場合、『今、戒を受け入れよう』とする時、造ってしまった罪を懺悔すると、今、戒を望めるのであるが、前に十戒などを授かっていた場合に戒を破ってしまったり、後は、『軽戒』を破ってしまったりしたのを『戒を破ってしまった』と言うのである。

戒を受け入れる以前に造ってしまった罪を『戒を破ってしまった』と言う訳ではないのである」

第九章

懐奘は、次のように、質問した。

「『今、戒を受け入れよう』とする時、『前に造ってしまった罪を懺悔するために、未だ戒を受け入れていない者に、十重戒と四十八軽戒を教えて、読ませなさい』と記されているのが、見られます。

しかし、その後の文に、『未だ戒を受け入れていない者を前にして、戒を説くべきではない』とも記されているのが、見られます。

この二箇所の相違は、どうしてでしょうか？」

道元は、次のように、答えた。

「戒を受け入れるのと、戒を読むのは、別なのである。

懺悔のために戒の経を読む事は、経を読む事なのである。

そのため、『未だ戒を受け入れていない者は、戒の経を読もう』とするのである。

未だ戒を受け入れていない者のために、戒の経を説こうとする事には、罪は無い。

『その後の文』では、自身を養う利益への貪欲のために、未だ戒を受け入れていない者を前にして戒の経を説く事を制止しているのである。

今、戒を受け入れている者に、懺悔させるためには、最優先で、戒を教えるべきである」

第十章

懐奘は、次のように、質問した。

「戒を受け入れさせる時は、『七逆罪』を犯してしまった者が戒を受け入れるのを許しません。

しかし、戒の経の中には、『七逆罪を犯してしまった者も、懺悔するべきである』と記されているのが、見られます。

どうしてでしょうか？」

道元は、次のように、答えた。

「実に、懺悔するべきなのである。

戒を受け入れさせる時、（『七逆罪』を犯してしまった者が戒を受け入れるのを）許さないのは、『抑止門』、『悪行を抑止するための、教えの入口』として、悪行を抑止する意味が有るのである。

また、（『七逆罪』を犯してしまった者が戒を受け入れるのを許さない、という）前者の文は、戒を破ってしまっても、かえって逆に、（懺悔して）戒を受け入れ直せば、清浄に成るからなのである。

懺悔すれば、清浄に成るのであり、戒を未だ受け入れていない者とは同じではないのである」

懐奘は、次のように、質問した。

「『七逆罪』を犯してしまった者に、既に、懺悔を許すならば、戒を受け入れ直させる事もするべきなのでしょうか？

どうなのでしょうか？」

道元は、次のように、答えた。

「その通りなのである。

故人である僧正が、自ら確立した、正しい道理なのである。

既に、懺悔を許すならば、戒を受け入れ直させるべきである。

『七逆罪』を犯してしまった者でも、後悔して戒を受け入れ直そうとするならば、戒を授けるべきである。

まして、『菩薩』、『仏の無上の覚を求める修行者』は、たとえ自身が『戒を破ってしまった』という罪を背負っても、他者のために戒を受け入れさせるべきなのである」

第十一章

道元は、「夜話」、「夜に話す修行のための教訓話」として、次のように、話した。

悪口によって、僧を叱ったり、非難したりするなかれ。

たとえ、悪人が正しくなくても、考え無しに、憎悪したり、非難したりするなかれ。

まず、どんなに「悪い」といえども、四人以上が集まっていれば、僧団の体を成していて、国の貴重な宝なのである。

僧団は、最も、帰依して敬礼するべきものなのである。

「住持」や長老であれ、師匠や善知識を持つ人々であれ、弟子が正しくないならば、慈悲心や老婆心によって、教えて、善へ誘導して引き入れるべきなのである。

その時、たとえ、打つべき者を打ったり、叱るべき人を叱ったりしても、非難や悪口の心を起こすべきではないのである。

道元の亡き師である、天童山の如浄 和尚は、「住持」であった時、寺の僧堂で僧達が坐禅していた際、(僧が)眠らないように戒めるために、(眠った僧を)履物で打って非難したが、僧達は皆、打たれるのを喜んで賛嘆した。

如浄は、また、「上堂」のついでに、次のように、話した。

「私、如浄は、既に、老いていて、今は、僧達と共にいるのを辞して、庵（いおり）に住んで、自身の老いを補助しているが、僧達にとっての『善知識を持つ人』として、各々の僧の迷いを破ってあげて真理を授けるために、『住持』を務めている。

このため、あるいは、非難の言葉を発し、竹篦で叩くなどの事を行（おこな）っている。これは、大いに、(悪行である)恐れが有る。

けれども、仏に代わって教化を高める方法なのである。

諸々の兄弟よ、慈悲をもって、これを許してください」

如浄が前述のように話すと、僧達は皆、涙を流した。

このような心を持ってこそ、僧達とも接し、教化の言葉をも述べる事ができるのである。

「住持」や長老だからと言って、妄（みだ）りに、僧達を支配して、自分の物であるかのように思って、非難するのは、善くないのである。

まして、「その人」、「相応（ふさわ）しい人」ではないのに、他人の短所を言ったり、他人の誤りを非難するのは、善くないのである。

よくよく、用心するべきなのである。

他者の誤りを見て「悪い」と思い、「慈悲をもって教化しよう」と思ったならば、相手が腹立たないように、方便によって別の事を言っているかのように見せかけるべきなのである。

第十二章

(道元は、次のように、話した。)

また、物語には、次のように、記されている。

故人である鎌倉の右大将であった、源頼朝が、最初、「兵衛佐」であった時、内裏の辺りに、ある日、晴れの日の会で出仕した際、一人の不法者がいた。

その時の「大納言」が、「その者を制圧しなさい」と話した。

源頼朝は、「『六波羅』にいる者に言ってください。(『六波羅』には)平家の将軍がいます」

「大納言」は、「(源頼朝が、)近々に、とても近いからである」と話した。

源頼朝は、「『その人』、『(不法者の制圧に)相応しい人』ではない」と話した。

これは、美しい言葉なのである。

源頼朝は、この心によって、後には、世を治めたのである。

今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、この心が有るべきである。

相応しい人ではないのに、他人を非難するなかれ。

第十三章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

昔、魯仲連と言う将軍がいた。

魯仲連は、平原君の国にいて、よく朝敵を平定した。

平原君が、ほめて、多数の金銀などを与えようとしたら、魯仲連は、次のように、話して辞退した。

「ただ、将軍の道なので、敵をよく討伐しただけであり、称賛を得て物を得るためではないのです。

あえて、受け取りません」

前述が、魯仲連の、清廉潔白さ、正直さの証としての逸話、「名誉な事である」と言われている逸話である。

在俗者でもなお、賢明である者は、「自分は『その人』、『担当者』である」として、自分の務めである分野の能力を発揮するだけなのである。

「自分の務めを果たす代わりに、何かを得よう」とは思わないのである。

未だ学ぶべき物が有る人である僧の用心も、このようであるべきなのである。

仏道に入門して、仏法のために諸々の事を修行しているのに、「自分の務めを果たす代わりに、何かを得よう」と思うべきではないのである。

仏教内外の諸々の教えでも皆、「無所得でいなさい」、「何ものにも、とらわれるなかれ」と、ばかり勧めるのである。

第十四章

道元は、「法談」、「仏法談義」のついでに、僧達に示して、次のように、話した。

たとえ自分は道理によって言っていても、他人が歪んでいて誤った事を言うのを、道理を攻めて言い勝つのは、悪いのである。

また、自分は、「自分の考えが現に道理である」と思っているが、「自分が誤っている」と(嘘を)言って、(わざと)早く言い負けて、身を引くのも、軽率なのである。

ただ、他人も言い負かさず、「自分が誤っている」事にもせず、何もせず、止めるのが、善いのである。

耳に聴き入れないようにして忘れれば、他人も忘れて怒らない物なのである。

前述は、第一の用心なのである。

第十五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

この世のものの常の変化は迅速なので、生死は一大事なのである。短時間、存命の間に、善業を修行し知恵を学ぶのを好むならば、ただ、仏道を修行し仏法を学ぶべきなのである。

作文、作詩、作曲などは無益な事なので、捨てるべきなのが道理なのである。

仏法を学び仏道を修行するにしても、多種多様な物を並行して学ぶべきではないのである。

まして、禅宗以外の、密教以外や、密教の、経典は、全く優先しないべきなのである。

仏や祖師達の言葉ですら、多種多様な物を好んだり、学んだりするべきではないのである。

一つの事に専念する事すら、能力が愚鈍である、能力が劣っている者には、かなわないであろう。

まして、多数の事を並行に専念しようとして、心の意思の堅固さを調えて、まとめない者には、（一つの事に専念する事すら、）不可能なのである。

第十六章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

昔、智覚禅師とも呼ばれる永明延寿と言う人の、悟りを求める事を思い立って心した事と、出家は、次のようであった。

永明延寿は、最初は、役人であった。

才能に富み、正直な賢者であった。

しかし、「国司」であった時に、役所の金銭を盗んでしまって、布施をした。

周囲の人々は、それを皇帝に報告した。

皇帝は、それを聞いて、大いに驚き、不思議に思った。

諸々の臣下も皆、不思議に思った。

その罪は軽くないので、「死刑にされるべきである」と決定してしまった。

しかし、そこで、皇帝は、相談して、次のように、話した。

「この永明延寿は、才能が有る人であるし、賢者である。

今、わざわざ、このような罪を犯した。

もしかしたら、深い心の意図が有るのかもしれない。

首を斬ろうとする時、悲しみ憂う様子が有れば、速やかに斬ってしまいなさい。

しかし、もし、そのような様子が無ければ、きっと、深い心の意図が有るのであろうし、斬るなかれ」

皇帝の勅使が、永明延寿を連行して、永明延寿の首を斬ろうとする時、(永明延寿には、)少しも憂う様子が無く、かえって逆に、喜ぶ様子が有った。

そして、永明延寿は、自ら、次のように、話した。

「今生の命は、一切、全て、生者達に施す」

皇帝の勅使は、驚き、不思議に思って、皇帝に報告した。

皇帝は、次のように、話した。

「『そうであろう。きっと、深い心の意図が有って、このような事が有ったのであろう』と、かねてから事前に、このように知っていた」

そのため、皇帝は、永明延寿の意図を質問した。

永明延寿は、次のように、話した。

「『役人を辞職して、命を捨てて布施をして、生者達と縁を結び、僧としての(新しい)生を受けて、専念して仏道を修行しよう』と思います」

皇帝は、この言葉に感心して、永明延寿を許して出家させた。

そのため、「延寿」という名前をもらったのである。

殺すべきなのを思い留まったからである。

今の僧も、これほどの心を一度、起こすべきなのである。

「(自身の)命を軽んじ、生者達を思いやる心を深くして、身を仏による制度に任せよう」と思う心を起こすべきである。

もし、前から、このような心が、一念でも有れば、「失わないようにしよう」と思って保持するべきである。

これほどの心を一度も起こさないで仏法を悟る事は、有り得ないのである。

第十七章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

「祖席」、「祖師達の道場」で、禅の話を心得た前例とは、「自分は本から知っている」と思う心を、次第、次第に、善知識を持つ人々の言葉に従って改めて、修行したのである。

たとえ、「仏とは、自分が本から知っている様は、『三十二相 八十種好』と光明が十分に備わっていて法を説いて生者達に利益をもたらす『徳』、『力』、『善行』が有る釈迦牟尼仏や阿弥陀仏などが仏である」と知っていても、善知識を持つ人々が、もし、「仏とは、ヒキガエルや、ミミズである」と言うならば、ヒキガエルや、ミミズを「これらは、仏である」と信じて、常日頃の知識や理解を捨てるべきなのである。

このミミズの上に、仏の「三十二相 八十種好」や光明や種々の仏が備えている「徳」、「力」、「善行」を探し求めてしまうのも、なお、感情や見解が改まっていない事に成ってしまうのである。

ただ、現在、見えているままを「仏である」と知る事なのである。

もし、このように、(善知識を持つ人々の)言葉に従って、感情や見解や本からの執着を改めて行けば、自然と、法に適う所が有るのである。

それなのに、近頃の僧は、自分の感情や見解に執着してしまい、自分の見解を本として「仏とは、このようにこそ存在するであろう」と思ってしまい、また、自分が思っている様と違えば、「そうでは、無いであろう」等と言っ

てしまい、「自分の感情や推量に似ている事が有るであろう」と迷い続けてしまう割に、恐らく、仏道の精進は無いのである。

また、（近頃の僧は、）「身を惜しまずして、百尺の竿の先頭に上って、手足を離して、一歩、進みなさい」と言われた時は、「命が有ってこそ、仏道も学べるであろう」と言ってしまって、真実に、善知識を持つ人々に従わないのである。

よくよく、思いはかるべきなのである。

第十八章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

世間の人も、多数の事を並行して学んでしまって、どれも良くできないよりは、ただ、一つの事だけを良くできるように成って、人前でも、できるほどに学ぶべきなのである。

まして、俗世を出る仏法は、遥かな昔から、くり返し習って修行して身につけていない法なのである。

そのため、今も、良く知らない物なのである。

自分の素質も拙い物なのである。

高く広大な仏法で、多種多様な事を並行して学んでしまえば、一つの事にも成功できないであろう。

一つの事に専念してすら、本（もと）からの性質が愚昧であり、劣っている才能の器である人は、今生で、極め難い。

努力して、未だ学ぶべき物が有る人である僧は、一つの事に専念するべきである。

懐奘は、次のように、質問した。

「もし、そうであるならば、何の事、どのような修行を、仏法で専念して好み修行するべきでしょうか？」

懐奘の師である道元は、次のように、話した。

「『機会に従うべきであるし、才能に従うべきである』といえども、今、祖師達の道場で伝えていて専念する物とは、坐禅なのである。

この坐禅という修行は、多数の機会を兼ね合わせる事ができて、才能が上等でも中程度でも下等でも等しく修行する事ができ得る物なのである。

私、道元は、宋の時代の中国の天童山の、道元の亡き師である如浄の会の下で、このような道理を聞いて後、昼夜、坐禅して『定』に入ったが、諸々の僧達は、『極熱や極寒の時には発病してしまうであろう』と言って、しばらく、(坐禅を)捨ててしまった。

私、道元は、その時、自ら、次のように、思った。

『たとえ、発病して死んでも、なお、ただ、この坐禅を修行するべきである。病気が無くても、修行せず、この身をいたわって用いても、何の役にも立たない！

病気に成って死んでも、本意なのである。

宋の時代の中国の、善知識を持つ人の会の下で、修行して死に、死後、善い僧に扱われたら、優れた縁と成るのである。

日本で死んだら、これほどの人によって、仏法の通りに、仏教の儀式で扱われないであろう。

修行すれば、未だ悟りに適っていない矢先に死んでも、縁を結んだとして僧として生を受けるであろう。

修行しないで、身を長く保持しても、無益なのである。何の役にも立たない！

まして、身を全うして病気を起こさない、と思っても、不覚にも、船が海に沈没する目や、不慮の死に遭ってしまった時は、とても後悔してしまう！』

このように、思案し続けて、思い切って、昼夜、端正に坐禅したが、一切、病気が起こらなかった。

今、各々の僧も、完全に、思い切って、修行してみなさい。

十人が、十人、共、真理を会得できるであろう。

道元の亡き師である、天童山の如浄の勧めとは、このような物であった」

第十九章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

人は、思い切って、命をも捨てて、身の肉や手足をも切る事は、できる物なのである。

世間の事を思って、名声や利益や心の執着のために、多数の人は、このように、思い切るのである。

ただ、去来する時に、折に触れて、物に従って、心の品性を調える事は、難しいのである。

僧は、「身の命を捨てる」と思って、少しの間でも、抑えて静めて、言うべき事についても、行うべき事についても、「道理に従っているか？　従っていないか？」と思案して、道理に従っているのであれば、言ったり、行(おこな)ったりするべきなのである。

第二十章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行している人は、衣服や食糧について心配するなかれ。

ただ、仏による制度を守って、世俗の事を営むなかれ。

仏は、次のように、話している。

「衣服には『糞掃衣』が有るし、食べ物には日常の乞食による物が有る」

いつの世でも、これらの二つの事は尽きない！

この世のものの常の変化は迅速であるのを忘れてしまって、いたずらに無駄に、世俗の事について心配するなかれ。

露（つゆ）のような命が一時的に存在する間に、仏道について思考して、他の事に専念するなかれ。

第二十一章

ある人が、次のように、質問した。

「名声と利益という二つの物は、捨てて離れ難い」といえども、仏道修行への大いなる妨げに成るので、捨てる必要が有ります。

そのため、これらを捨てます。

「衣服と食糧という二つの事は、繋がりは小さい」といえども、修行者には大事なのです。

「糞掃衣」と、日常の乞食は、上等な才能の者が行う事であり、西のインドの風流なのです。

中国の寺には、寺の共有物などが有ります。

このため、それら(、衣服と食糧)への心配は無いのです。

我が国、日本の寺院には、寺院の共有物は無いです。

乞食という所作も、絶えてしまって、伝わってないです。

下等な才能の、忍耐できない未熟な身の者は、どうすれば善いのでしょうか？

そうであれば、自分のような者は、寺の支援者と信者による布施を貪ろうとするも、虚しく受け取ってしまう罪が従って来てしまいます。

農業、商業、公務、工業を営むのは、「邪命食」に成ってしまいます。

ただ、「天の神による運命に任せよう」とすれば、善行による報いに、乏しいのです。

飢えや寒さが来た時、これらを心配して、仏道修行が妨げられるでしょう。

また、ある人が、忠告して、次のように、話しました。

「あなたの、ふるまいは、極端であるし、時機を知らず、機会を顧みないのに似ている。

(人は、)才能が下等であるし、末法の世なのである。

このように修行してしまえば、退転の原因と成ってしまうであろう。

あるいは、一人の寺の支援者とも語らって、あるいは、寺の支援を一つでも約束してもらって、閑静な住居、静かな所で、自身を助けて、衣服や食糧を心配すること無く、静かに、仏道を修行するべきである。

これは、財産や物などを貪る訳ではない。

一時的な生活手段を備えて修行するべきである」

このような言葉を聞きますが、未だ信用した訳ではありません。

このような用心は、どうなのでしょうか?

道元は、次のように、答えた。

ただ、僧の日常の所作、仏や祖師達の家風を学ぶべきである。

「インド、中国、日本の三国は異なる」といえども、真実に仏道を学び修行する者には、未だ、そのような事は無いのである。

ただ、心を世俗の事に執着させるなかれ。

専念して、真理を学ぶべきである。

仏は、次のように、話している。

「『三衣』と器、以外は、少しも、蓄えるなかれ。

乞食の余分は、飢えている生者達に施しなさい」

たとえ、(自分が、)もらって来た(物である)としても、少しも、蓄えるなかれ。

まして、ごちそうのために走りまわるなかれ！

仏教外の経典には、次のように、記されている。

「朝に真理を聞く事ができたならば、夕方に死んでも、善い」

たとえ、飢え死にしたり、凍え死んだりしても、一日でも、一時でも、仏教に従うべきである。

幾万の劫、幾千の生で、何回も生じるであろうし、何度も死ぬであろう。

全て、それ(、輪廻転生)は、この世との繋がり、妄執のせいなのである。

今生、一度、仏による制度に従って、餓死しても、永劫の安楽と成るであろう。

さらに、まして、未だ、大蔵教の中にも、仏教をインドと中国と日本に伝えて来ている仏や祖師達のうち、一人も、飢え死にしたり、凍え死んだりした人が「いる」と記されているのを、聞いた事が無い。

俗世間でも、衣服や食糧などの「四資具」、「仏道修行の必需品」は、生得の、寿命に応じた分け前が有って、求めても来ないし、求めなくても来る。

ただ、運命に任せて、雑念を心に挟み込むなかれ。

「末法の世である」と言って、今生で、悟りを求める心を起こさなければ、どの生でも真理を会得できないであろう！

たとえ、空生とも呼ばれる須菩提や、迦葉のようではなくても、ただ、最善を尽くして、仏道を学び修行するべきなのである。

仏教外の経典には、次のように、記されている。

「美女の『西施』や『毛嬙』ではなくても、色を好む者は、色を好む。

速く走る名馬の『飛兎』や『緑耳』ではなくても、馬を好む者は、馬を好む。

想像上の珍味の『竜の肝臓』や『鳳凰の骨髄』ではなくても、味を好む者は、味を好む」

ただ、最善を尽くして、賢明さを用いるだけなのである。

俗世の人でも、なお、このような所作が有るのである。

仏の家の僧も、また、このようであるべきである。

まして、また、仏は、二十年間分の幸福の分け前を、末法の世の僧達に施してくれている。

このため、天下の寺で、人や天人による捧げものは絶えない。

釈迦牟尼仏は、神に通じる善行による幸福によって、自由自在であっても、馬麦を食べて、夏安居を過ごされた。

末法の世の、仏の弟子である僧は、これを慕う！

第二十二章

懐奘は、次のように、質問した。

戒を破って、虚しく人や天人からの捧げものを受け取り、悟りを求める心が無くて、いたずらに無駄に、仏による幸福の分け前を浪費するよりも、在家信者に従って、在家信者の事を為して、命を永らえて、よく、仏道を学び修行するのは、どうでしょうか？

道元は、次のように、答えた。

誰が話しているのか、「戒を破って、悟りを求める心が無いままでいなさい」と？

ただ、強いて、悟りを求める心を起こして、仏法を修行するべきなのである。

さらに、まして、「戒を守っているか、戒を破っているかを論じず、初心者か、熟練者かを区別せず、等しく、釈迦牟尼仏による幸福の分け前を与える」と記されているのは、見られるが、「戒を破っているならば、還俗するべきであるし、悟りを求める心が無いのであれば、修行するなかれ」と記されているのは、見られない。

どの人も、最初からは悟りを求める心は無い！

ただ、このように起こし難い心を起こして、修行し難い事を修行すれば、自然に、進歩するのである。

人々には皆、仏に成れる性質が有る。

いたずらに無駄に、卑下するなかれ。

また、「文選」には、次のように、記されている。

「一つの国は、一人のために、盛んに成る。

先人の賢者の跡は、後世の愚者のために、廃れてしまう」

前述の言葉の意味は、

「国に賢者が一人でも出て来れば、その国は盛んに成る。

愚者が一人でも出て来れば、先人の賢者の跡は、廃れてしまう」

という事なのである。

この言葉を思考するべきである。

第二十三章

道元は、雑談のついでに、次のように、話した。

世間の人々は、老若男女、多くが、性的な事などを話す。これによって「心が慰められる」としたり、その場を盛り上げるための言葉としたりする事が有る。

「一時的に、心を遊ばせる事ができるし、退屈を慰めるのに似ている」と言うが、僧には、最も禁断にするべき事なのである。

俗世の人でも、なお、善い人、誠実な人が、礼儀をも知っていて、誠実に話す時、(性的な事は)出て来ない事なのである。

ただ、酔い乱れて、自由奔放で邪悪な時に話す事なのである。

まして、僧は、専念して仏道について思うべきである。

雑談は、有り得ない、通常の者とは違う、妄りな僧の話す事なのである。

宋の時代の中国の寺院などでは、全く雑談をしないので、そのような事をも言わないのである。

我が国、日本も、近頃、建仁寺の僧正である栄西が存命の時は、全く、あからさまにも、このような話は、出て来なかった。

栄西の死後でも、栄西が存命の時の弟子などが少々残って留まっていた時は、一切、言わなかった。

近頃、この七、八年以降、新入りの若い人達は、時々、話してしまうのである。

非常識な事態なのである。

仏の教えの中にも、「粗い荒い強い悪業は、(かえって逆に、)人を悟りに目覚めさせる事が有る。利益をもたらさない無益な無駄な言葉は、正しい道を妨げる事ができてしまう」と有って、ただ、その場の勢いで言ってしまった言葉ですら、「利益をもたらさない無益な無駄な言葉」は、仏道を妨げてしまう原因に成ってしまうのである。

まして、このような(性的な)話は、言葉に引かれてしまって、心にも(性欲が)起きてしまうであろう。

最も用心するべきなのである。

特別に「このような事は言わない」としなくても、悪い事と知っていれば、次第に、対峙して治すべきなのである。

第二十四章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

世俗の人々は、多くが、善い事をする時は、「他人に知られたくない」と思ってしまうし、悪い事をする時は、「他人に知られよう」と思ってしまう事によって、このような心は、目に見えない者達の心に合わないので、行った善い事に対しては感応してもらえず、秘密で行った悪事には罰が有るのである。

しかし、このため、かえって逆に、（世俗の人々は、）「善行には、霊験が無い。仏法による利益は少ない」と思ってしまうのである。

これは、邪悪な見解なのである。

最も、改めるべきである。

他人が知らない時でも密かに善い事をするし、悪事を誤って犯した後には罪を隠さず罪を後悔する。

このようにすれば、密かに行った善い事には、感応してもらえる事が有るし、隠さなかった悪事は懺悔された事に成って消滅するので、自然に、現世利益も有るのである。

善行による善い果報は当に決定している事をも、知っているべきである。

第二十五章

その時、ある在家信者が来て、次のように、質問した。

「近頃、在家信者達は、僧達に捧げものを捧げて仏法に帰依して敬礼しているのに、多くの不吉な事が出て来てしまうので、邪悪な見解が起こってしまい、『仏、仏法、僧に帰依しない』と思ってしまっています。どうなのでしょうか？」

道元は、次のように、答えた。

それは、僧達や仏法の落ち度ではなく、在家信者、自らの過誤による物なのである。

その理由とは、人目だけを気にして戒と節制と清浄を守っている僧は尊重して捧げものを捧げるが、戒を破り恥知らずにも飲酒し肉食したりなどする僧は「正しくない」と思ってしまって捧げものを捧げない。

この区別の心は、実は、仏の心に背(そむ)いてしまっている。

そのため、仏法に帰依して敬礼している功徳も虚しく成ってしまっているし、(目に見えない者達による)感応も無いのである。

戒の中でも、所々で、このような心を戒めている。

僧であれば、善行の有無を選ばず、ただ、捧げものを捧げるべきなのである。

特に、その外見によって、内心の美徳の有無を決めつけるなかれ。

末法の世の僧は、外見は尋常ではない長所が見えるように思っても、外見に勝(まさ)ってしまっている悪い心も悪事も有る物なのである。

末法の世では、善い僧と悪い僧を区別して思ってしまう事を無くして、仏の弟子である僧であれば、尊重して、区別しない心で、捧げものを捧げて帰依して敬礼すれば、必ず、仏の心に適(かな)って、利益も広大に成るであろう。

また、

「冥機」、「人目が無い所での言動」や、

「冥応」、「言動に応じて知らない所で報いられる事」や、

「顕機」、「人目が有る所での言動」や、

「顕応」、「言動に応じて分かる形で報いられる事」などの

四つの言葉が有る事を思うべきである。

また、「現生」、「今生」や、「後報」、「第三の生以降で報いが有る事」などの「三時業」、「善行や悪行による報いが有る時機は、今の生か、来世か、第三の生以降という三つの時機である事」も有るのである。

これらの道理を、よくよく、学ぶべきなのである。

第二十六章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

もし、ある人が来て用件を言う中に、あるいは、他人に物を請うたり、あるいは、他人に訴訟などの事を言おうとしたりして、一通の書状を自分に所望する事が出てきた時、「私は、僧であり、世俗から逃れて、修行のために外出しない身なので、在家信者などの他人に自分の務めではない事を言うのは善くないのである」として、眼前の人の所望を叶えなければ、実に、僧の仏法には似ているけれども、その僧の心中を探ると、「私は世俗から逃れている僧であり、自分の務めではない事を他人に言ってしまえば、他人は、きっと、悪く思うであろう」と言う道理を思っていて、願いを聴かないのは、自説や自身への執着や、名声を気にしての物なのである。

ただ、その時に臨んだら、よくよく、思いはかって、眼前の人のために、わずかでも利益と成るであろう事ならば、他人が悪く思うであろう事をも顧みず、為すべきなのである。

「そのような事は、僧の務めではなく、悪い」として、疎遠にされたり、仲違いされたりしても、そのような愚かな知人と仲違いに成る事は、何も苦しくないであろう！

外見は、「自分の務めではない誤った事をする」と他人には見えてしまっても、内心では、自説や自身への執着を破って、名声を捨てるのは、第一の用心なのである。

仏や菩薩は、ある人が来て請う時は、身の肉や、手足をも切る。

まして、ある人が来て、一通の書状を請うたのに、名声を思いはかって、その用件を聞かないのは、自説や自身への執着が深いのである。

「神聖ではない、僧の務めではない事を言う人だなぁ」と、仕方がなく思っても、自分は名声を捨てて、わずかでも他人の利益と成るのであれば、真実に真理に相応しく成るべきなのである。

古代の先人も、「そのような行動が有るなぁ」と見える事が多い。

自分も、その古代の先人の行動を思って、寺の支援者や知人が、少々、「思いがけない事を他人に申し伝えて欲しい」と言う事を、文書を一通あげて、わずかでも利益を作るのは、簡単な事なのである。

懐奘は、次のように、質問した。

「そのような事は、実に、その通りです。

善い事で、他人の利益と成る事を、他人に言い伝えるのは、最もなのです。

しかし、もし、『悪事によって他人の所帯の財産を奪い取ろう』と思ったり、あるいは、『悪口を言おう』と思ったりしているのを、言い伝えるべきでしょうか？

どうでしょうか？」

懐奘の師である道元は、次のように、話した。

「道理である正しい事か、正しくない事か」等の事は、自分が知るべきではない。

ただ、一通の書状を請われれば、与えるけれども、「『道理である正しい事か、正しくない事か』によって裁きが有るかもしれない」という事を、他人にも言うし、書状にも載せるべきである。

請うて受け取って扱うであろう人こそが、「道理である正しい事か、正しくない事か」を明らかにするべきである。

自分の務めではない、このような「道理である正しい事か、正しくない事か」を、道理を曲げて、他人に言う事も、正しくないのである。

また、現に正しくない事であるけれども、自分を大事に思ってくれる人で「この人の言う事は、善悪を間違えない」と思ってくれるほどの知人がいて、寺の支援者の所へ、正しくない事であるのに、自分が納得できない所望をされてしまったら、その人からの所望を一応、聞くけれども、その書状には、「『やめる事は難しい』と言うので、私は伝えているだけなのです。あなたは道理によって扱ってください」と書くべきなのである。

一切、このようにするのであれば、あちらも、こちらも、遺恨が無いであろう。

このような事を、他人に対面したり、事態が出て来たりするにつけて、よくよく、思いはかるべきなのである。

結局は、折りに触れて、名声や、自説や自身への執着を捨てるべきなのである。

第二十七章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

今、世間の人々や、出家者の人々は、多分、善い事をしては、待ち望んで、「他人に知られよう」と思ってしまうし、悪事をしては、「他人に知られたくない」と思ってしまう。

こう思ってしまう事によって、内心でも外見でも、分不相応の事が出て来る。

心構えをして、内心でも外見でも、分相応にし、誤りを後悔し、真実の善行を隠して、外見を飾らず、善行を他人に譲り、悪事を自分のせいにして迎える志が有るべきなのである。

懐奘は、次のように、質問した。

真実の善行を隠し、外見を飾らない事は、実に、その通りです。

ただ、仏や、菩薩は、大いなる慈悲と、利益を生者達にもたらす事を根本としています。

無知な仏道者や俗世の者などは、外見が善くないのを見て、これを非難してしまえば、僧を非難する罪を感じる羽目に成ってしまいます。

(僧の、)真実の善行を知らなくても、外見を見て、尊重して捧げものを捧げれば、わずかでも幸福の分け前と成るでしょう。

このような事情の考慮は、どうなのでしょうか?

道元は、次のように、答えた。

「外見を飾らない」と言って、自由奔放で邪悪であれば、道理を違えている。

「真実の善行を隠す」と言って、在家信者達などの前で悪行をして見せるのも、はなはだしく戒を破っているのである。

希有な、悟りを求める心が有る者が、「悟りを求める心が有る事を他人に知られよう」と思ってしまったり、「自身の過失を他人に知られたくない」と思ってしまったりしても、諸々の天人と善い神霊、および、仏や仏法や僧は、目に見えなくても、知見するのである。

それなのに、恥じないで、「世俗の人々に尊重されよう」と思ってしまう心を戒めているのである。

ただ、時機に臨んだら、折りに触れて、仏法を盛んにするため、利益を生者達にもたらすために、諸々の事で事情を考慮するべきなのである。

「あてはめた後に言い、思考した後に行(おこな)って、軽率や乱暴であるなかれ」という事なのである。

一切の事に臨んで、道理を思案するべきなのである。

時々の思念は止まらないし、日々は移り変わって流れていって、この世のものの常の変化が迅速である事は、眼前の道理なのである。

善知識を持つ人々や、経典の教えを待つまでもない。

ただ、時々の思念で、明日を期待せず、今日、現在だけを思って、「未来は、大いに不定なのであり、知り難いので、ただ、今日だけでも、存命中でも、仏道に従おう」と思うべきなのである。

「仏道に従う」とは、仏法を盛んにするため、利益を生者達にもたらすために、身の命を捨てて、諸々の事を行(おこな)っていくのである。

第二十八章

懐奘は、次のように、質問した。

「仏教の勧めに従うのであれば、乞食などを修行するべきでしょうか？どうでしょうか？」

道元は、次のように、答えた。

その通りである。

ただし、これは、土地の風習に従って事情の考慮が有るべきである。

何にしても、生者達にもたらす利益も広く、自分の修行も進む方（ほう）に付くべきなのである。

これらの作法をするために、道路が清浄ではないのに、袈裟を着て歩けば、汚れてしまうであろう。

また、人々が貧困であれば、乞食をする事も適わないであろうし、仏道修行も後退してしまうであろうし、利益も広くないかもしれない。

ただ、土地の風習を守って、普通に仏道を修行していれば、上と下の全ての人々は、自ら、捧げものを捧げてくれるであろうし、自身のために仏道修行して得た物で他者を教化する事も成就するであろう。

このような事も、時機に臨んだら、折りに触れて、道理を思いはかって、人目を気にせず、自身への利益を忘れて、仏道のため、利益を生者達にもたらすために、善く成るように、はからうべきである。

第二十九章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行している人は、世俗の感情を捨てるべき事について、重々、用心が有るべきである。

世俗を捨て、家を捨て、身を捨て、(悪い)心を捨てるのである。

よくよく、思いはかるべきなのである。

世俗を逃れて、山や林に隠れ住んでも、自分の、代を重ねている代々の家を絶やさない事や、家門や親族の事を思ってしまう者も、いるのである。

また、世俗を逃れ、家を捨てて、親族や、欲望の対象から遠ざかって離れても、自身を思いやってしまって、「苦しいであろう事はしない。病気が起こったら、仏道であっても、修行しない」と思ってしまうのも、未だ身を捨てていないのである。

また、身を惜しまず、修行し難い事を修行して苦行しても、心を仏道に入れないで、「自分の心に違える事は、仏道であっても、しない」と思ってしまう者は、心を捨てていないのである。

正法眼蔵随聞記 第二巻

侍者 懐奘 編

第三十章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

修行者は、まず、心さえ調整して悪を降伏させれば、身を捨てる事も、世俗を捨てる事も、簡単なのである。

ただし、言葉にしろ、振る舞いにしろ、人目を思って、「この事は悪事なので、他人も『悪い』と思うであろう」と考えてしまって、行わず、自分は「何々をする者こそ『仏法者である』と他人は見るであろう」と考えてしまって、折りに触れて、「善行をしよう」としてしまうのも、なお、世俗の感情なのである。

だからと言って、思い通りに、自分の心に身を任せて悪事をするのは、全くの悪人なのである。

結局、悪い心を忘れ、自身の身を忘れて、ただ、全く、仏法のためだけに、(善行を)行うべきなのである。

出来事が向かって来るごとに従って、用心するべきなのである。

初心者の修行者は、まず、世俗の感情であっても、人情であっても、悪事を犯すのを心で制止し、善行を身で行うのが、心身を捨てる事なのである。

第三十一章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

故人である僧正であった栄西が建仁寺にいた時、一人の貧しい人が来て、次のように、話した。

「私の家は貧しくて、(食糧が無くて)料理の火による煙が絶えてしまって、数日間に及んでしまっています。

夫婦と子息、三人共に、餓死しそうなのです。

慈悲で、これを救ってください」

その時、寺の中には、全く、衣服、食糧、財産などが無かった。

栄西は、思いを巡らしたが、良い考えが尽きてしまった。

その時、薬師如来の仏像を造ろうとして、後光の材料として打ち延ばした銅が少し有った。

栄西は、その銅を手に取って、自ら打って折って束ねて丸めて、その貧しい人に与えて、次のように、話した。

「これを食べ物に換えて、飢えを塞ぎなさい」

その(貧しい)俗世の人は、喜んで、退出した。

その時、弟子などは、栄西を非難して、次のように、話した。

「それは、仏像の後光(の材料)です。
それを俗世の人に与えてしまいました。
仏の物を私的に流用してしまった罪に成ってしまいます。
どうなのでしょうか？」

栄西僧正は、次のように、話した。

「まことに、その通りです。
ただし、仏の心について考えると、仏は、身の肉や手足を裂いて生者達に施しました。
現に餓死しそうな生者達には、たとえ、仏の全体を与えても、仏の心に適(かな)うであろう」

栄西は、また、次のように、話した。

「私、栄西は、この罪によって地獄などに堕ちてしまうとしても、ただ、生者達の飢えを救おう」

（道元は、次のように、話した。）

「先人の達人の心の丈(たけ)を、今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、思うべきである。
忘れるなかれ」

第三十二章

また、ある時、栄西 僧正の弟子の僧などが、次のように、話した。

「今の建仁寺は、河原に近いです。
後世に水難が有るかもしれません」

栄西 僧正は、次のように、話した。

「私、栄西は、寺の後世の消失について考えません。
西のインドの祇園精舎も、基礎だけが残留しています。
けれども、寺院を建立した功徳は失われません。
また、当時の、一年間や半年間の仏道修行の功徳は莫大なのです」

（道元は、次のように、話した。）

今、この話について考えると、寺院の建立は、実に、一生の一大事なので、未来の果てをも兼ね合わせて、「難が無いようにしよう」と思うが、そのような心中でも、また、この話のような道理を留めている心の丈（たけ）を実に思うべきである。

第三十三章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

唐の太宗の時、魏徴は、太宗に、次のように、報告した。

「農民などが、太宗の悪口を言う事が有ります」

太宗は、次のように、話した。

「自分に思いやりが有って、他人に悪口を言われたら、心配するべきではない。

思いやりが無くて、他人に、ほめられたら、心配するべきである」

（道元は、次のように、話した。）

俗世の人でもなお、このようなのである。

僧は、最も、このような心が有るべきである。

慈悲が有って、悟りを求める心が有って、愚かな他人に悪口を言われるのは、苦しくないであろう。

悟りを求める心が無くて、他人に「悟りを求める心が有る」と思われようとするのは、よくよく、慎むべきである。

第三十四章

道元は、また、僧達に示して、次のように、話した。

隋の文帝は、次のように、話した。

「密(ひそ)かに、『徳行』、『善行』を修行して、満ち足りるのを待つ」

（道元は、次のように、話した。）

この言葉の意味は、「『道徳』、『善行』を修行して、満ち足りるのを待って、民を慈しむ」という物なのである。

僧が、この心に及ばなければ、最も用心するべきなのである。

ただ、内密に修行すれば、自然に道徳が外に表れて、他人に知られる事を期待せず望まずに、ただ、専念して仏教に従い、祖師達の教えである仏道に従っていけば、他人も自ずと道徳に帰るのである。

ここで、未だ学ぶべき物が有る人である僧の誤りが出て来る様子とは、他人に敬われ、財宝が出て来るのをもって、「道徳が表れている」と自らも思ってしまうし、他人も思ってしまうのである。

しかし、これは、「『天魔波旬』、『仏敵』が憑依している」と心に知って、最も、思いはかるべきである。

仏教の中では、これは、「『魔』、『仏敵』による仕業である」と言うのである。

インド、中国、日本という三国の前例で、「財宝に富み、愚かな人からの帰依と敬礼をもって道徳とするべきである」という事を未だ聞いた事が無い。悟りを求める心が有る者とは、昔から、インド、中国、日本という三国の全てで、貧しくて、(修行で)身を苦しめ、一切の世俗の事を省略して、慈悲が有り、悟りを求める心が有る者を、「真実の修行者」と言うのである。

「徳が表れる」とは、財宝に豊かに成り、捧げものを誇るのを言う訳ではない。

徳が明らかになるのに、三重が有るのである。

まずは、その人が、「自分の務めを修行しているのである」と(他人に)知られるのである。

次に、その人が修行している自分の務めを慕う者が出て来るのである。

最後には、その慕う者が、自分の務めを同じく学び、同じく修行するのである。

これらを「道徳が表れる」と言うのである。

第三十五章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、「世俗の人の感情を捨てる」べきなのである。

「世俗の人の感情を捨てる」とは、仏法に従って修行する事なのである。

世俗の人は、多くが、小乗根性で、善悪をわきまえ、是非を区別して、「是」、「善」を取り、「非」、「悪」を捨てるのは皆、小乗根性なのである。

ただ、まず、世俗の感情を捨てて、仏道に入門するべきである。

仏道に入門するには、自分の心で善悪を区別して「善い」と思ったり「悪い」と思ったりする事を捨てて、「自身は善いであろう」、「自分の心は何々であろう」と思う心を捨てて、善であれ、悪であれ、仏や祖師達の言葉や日常の所作に従っていくのである。

自分が心で「善い」と思ったり、世俗の人が「善い」と思ったりする事は、必ずしも、善くないのである。

であれば、人目も忘れて、自分の心をも捨てて、仏教に従っていくのである。

「身も苦しく、心も心配しても、自分の心身を全く捨てる物なのである」と思って、苦しくても、心配しそうな事でも、仏や祖師達や先人の高徳の僧の日常の所作であれば、行うべきなのである。

「この事は善い事であるし、仏道にも適(かな)うであろう」と思って行いたくても、もし、仏や祖師達の日常の所作に無い事は、行うべきではない。

このような事は、必ず、仏法をも良く心得る時にも有るのである。

自分の心でも、また、本より、習って来ている仏法についての思いはかりを捨てて、ただ、今、見ている所である祖師達の言葉や日常の所作へ、次第に、心を移していくのである。

このようにすれば、智慧も進歩し、悟りも開けるのである。

本より、学んでいる所である禅宗以外の文字の功績も、捨てるべき道理が有れば、捨てて、今の正しい道理によって見るべきなのである。

仏法を学ぶのは、本より、俗世を出て離れて、真理を会得するためなのである。

「自分が学んでいる所の多年の功績を積んでいるのに、どうして、たやすく捨てるであろうか？　いいえ！」と、なお心で深く思う心を「生死に繋ぎ縛る心」と言うのである。

よくよく、思いはかるべきである。

第三十六章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

故人である建仁寺の栄西 僧正の伝記を、顕兼 中納言 入道は書かれたのであるが。

その時、辞退する言葉として、次のように、話した。

「儒学者に書かせるべきです。

なぜなら、儒学者は、本(もと)より、身を忘れて、幼い時から大人に成るまで、学問を根本としています。

そのため、書き出した物に誤りが無いのである。

ただの人は、自身の出仕や、大衆と交わる事を根本として、片手間で、学問をするので、自然と、立派な人がいても、文筆の道でも誤りが出て来るのです」

この話について考えると、昔の人は、仏教外の経典の学問も、身を忘れて学んでいたのである。

第三十七章

道元は、また、次のように、話した。

故人である公胤僧正は、次のように、話した。

「悟りを求める心とは、『一念三千の』、『一瞬の思いに全てのものが備わっている』仏法などを胸の中に学び入れて保持しているのを『悟りを求める心』と言うのである。

何となく、笠を首に懸けて迷い歩くのは、『天狗のような魔、仏敵と繋がっている行い』と言うのである」

第三十八章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

故人である、ある僧正は、

「僧達の各々が用いている所の衣服や食糧などの物を、『私が与えている』と思うなかれ。

皆、これらは、諸々の天人が捧げてくれている所の物なのである。

私は、取り次いで、他人に与えているだけなのである。

また、各々、一生の寿命に応じた分け前を十分に備えているのである。

奔走するなかれ。

私による恩と思うなかれ」と話して、常に、勧めていた。

この言葉は、第一の美しい善い言葉と思われるのである。

第三十九章

また、宋の時代の中国の宏智禅師の会の下である天童山の寺では、寺の共有物は、千人の用途分なのである。

であれば、寺の堂の中は七百人分、寺の堂の外は三百人分で、千人分に見積もっている寺の共有物であるのに、善い長老が住んでいるため、諸方の僧達が雲のように集まって、寺の堂の中は千人に成ったのである。

その他に、五、六百人いたのである。

「知事」を務めている僧である人が、宏智禅師に、次のように、話して訴えた。

「寺の共有物は、千人の分しかありません。

僧達が多く集まって、用途に不足しています。

道理を曲げて、僧を追放しましょう」

宏智禅師は、次のように、話した。

「人々には皆、分け前が有る。

あなたが、あずかり知る事ではない。

なげくなかれ」

（道元は、次のように、話した。）

今、この話について考えると、人々には皆、生まれた時に得ている衣服や食糧の分け前が有るのである。

思っても出て来ないし、求めなくても来るのである。

在俗の人ですらなお、運に任せて、主人への忠実を思い、親孝行を学ぶのである。

まして、どうして、出家者である僧は、全く、仏道以外の世俗の事を管理しようとするであろうか？　いいえ！

釈迦牟尼仏が僧に残して付属してくれている幸福の分け前が有るし、諸々の天人から、捧げものを受けるのに相応しい僧への、衣服や食糧が有るし、また、先天の生まれた時に得ている寿命に応じた分け前が有るのである。

求めず、思わなくても、運に任せても、寿命に応じた分け前が有るのである。

たとえ走り求めて宝を持っても、死が突然に来た時、どうするのか？

そのため、未だ学ぶべき物が有る人である僧は、ただ、仏道以外の世俗の事を心に留めず、専念して仏道を学び修行するべきなのである。

第四十章

また、ある人が、次のように、話した。

「末法の世、辺境の土地で仏法を盛んにするには、静かな場所を構えて、衣服や食糧などの、世俗の人からの支援によって心配が無く、衣服や食糧を十分に備えて仏法を修行すれば、他者への利益も広大に成るであろう」

今、この言葉について考えると、そうではない。

それについては、形有るものに自我が執着している、諸々の人々が集まって学んでも、その中からは、一人も、悟りを求める事を思い立って心する人は出て来ないであろう。

利益を貪る事に執着し、財産への欲望にふけって、たとえ、千万人が集まっても、一人も、悟りを求める事を思い立って心する人がいない事よりもなお、劣るであろう。

地獄などへ堕ちてしまう悪業による原因ばかり自ら積んでしまい、仏法の心の状態が無いからなのである。

もし、清貧で、労苦して、あるいは、乞食し、あるいは、果実などを食べて、常に飢えながら仏道を学んで修行して、これを聞いて、もし、一人でも、来て、仏道を学び修行しようと思う人がいる事こそ、真実の悟りを求める心が有る者であるし、仏法が盛んに成るであろう、と思われる。

労苦や清貧によって一人も後続者がいない事と、衣服と食糧が豊かで諸々の人が集まっても仏法が無い事は、ただ、「八両と半斤」、「似ている」のである。

第四十一章

道元は、また、次のように、話した。

今の世の人は、多くが、像を造ったり、塔を建てたり等する事を仏法が盛んに成っていると思っている。

これも、また、正しくないのである。

たとえ、建物を高く立派にしたり、「大観玉」を磨いたり、黄金を延べたりしても、これらによって真理を会得した者はいないであろう。

ただ、在家信者の財宝を仏の世界に入れて善行を行わせ幸福の分け前と成るのである。

また、小さい原因で大きい結果を感じる事が有っても、僧が、これらの事を営むのは、仏法が盛んに成っている訳ではないのである。

たとえ、草による庵（いおり）や樹の下でも、仏法の一句について思いはかったり、一時、坐禅を行（おこな）ったりする事こそ、真実の、仏法が盛んに成っている事なのである。

今、寺の僧堂を建てようとして、寄付をも募って、随分、営む事は、必ずしも、「仏法が盛んに成っている」とは思わない。

「ただ、当時、仏道を学び修行する人もいなくて、いたずらに無駄に月日を送る時間が、ただ、有るよりは」と思って、「迷っている人達と縁を結ぶ事にも成れ」と思って、また、当時、仏道を学び修行する僧達の坐禅の道場のためなのであり、また、そう思って始めた事が成就しなくても恨まないのである。

ただ、柱を一本でも立てて置いたら、将来も、そのように思って計画したが成就しなかったのを見ても苦しくない、と思うのである。

第四十二章

また、ある人が、次のように、勧めて話した。

「仏法を盛んにするために、関東に向かうべきである」

道元は、次のように、答えた。

正しくない。

もし、仏法への志が有れば、山や川や大河や海を渡っても、来て、学ぶべきである。

そのような志が無い人の所に行って勧めても、聞き入れるかは、不確かなのである。

ただ、自分への支援のために、他人をだますであろうか？　いいえ！

また、財宝を貪るためであろうか？　いいえ！

それらは、身の苦しみと成ってしまうので、「どうでも良い」と思われるのである。

第四十三章

道元は、また、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、禅宗以外の書籍を読んだり、仏教外の経典などを学んだりするべきではない。

見るのであれば、祖師達の語録などを見るべきである。

その他は、しばらく、さし置くべきである。

近代の禅僧は、頌という詩を作り、仏法の言葉を書こうとするために、文筆などを好んでしまう。

これは、善くないのである。

頌という詩を作らなくても、心に思っている事を書き出したり、文筆が整わなくても仏法について書いたりするべきなのである。

これらが悪いと見ないほどの、悟りを求める心が無い人は、良く文筆を整えて、素晴らしい秀でた言葉であっても、ただ、言葉だけを弄（もてあそ）んで、真理を会得できないであろう。

私、道元は、幼少の時から、好んで学んでいた事なので、今も、何かというと、仏教外の経典の美しい善い言葉を思案してしまい、「文選」なども見てしまうのを、「無駄な事である」と知っているので、全く捨てるべきである理由を思うのである。

第四十四章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

私、道元が、宋の時代の中国にいた時、禅院で古代の先人の語録を見ていた際、真理を心得ている者である、西川の、ある僧が、私、道元に、次のように、質問した。

「語録を見て、何の役に立つのか？」

道元は、次のように、答えた。

「古代の先人の日常の所作を知る事ができます」

その僧は、次のように、話した。

「何の役に立つのか？」

道元は、次のように、話した。

「故郷に帰って他人を教化できます」

その僧は、次のように、話した。

「何の役に立つのか？」

道元は、次のように、話した。

「利益を生者達にもたらす事ができます」

その僧は、次のように、話した。

「結局、何の役に立つのか？」

私、道元は、後に、この事の道理を思案すると、語録や、「公案」、「修行者の手がかりとしての仏や祖師達の言動」などを見て、古代の先人の日常の所作を知って、あるいは、迷っている者のために説いて聴かせる事、これらは皆、自身の修行や、他者を教化するためには、結局、何の役にも立たないのである。

坐禅に打ち込むのに専念して一大事をあきらめれば、後には、一文字も知らなくても、他者に(仏の知見を)開示するのに、用い尽くす事ができないほどに成る。

そのため、その僧は「結局、何の役に立つのか？」と話したのである。

私、道元は、これは「真実の道理なのである」と思って、その後、語録などを見る事をやめて、坐禅に打ち込むのに専念して、一大事を明らめる事ができ得た。

第四十五章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

真実の内密の「徳行」、「善行」が無いのに、他人に敬礼されるなかれ。

この国の人々は、真実の内密の善行を知らず、外面によって他人を敬礼するので、悟りを求める心が無い、未だ学ぶべき物が有る人は、地獄などに引き落とされて、「魔」、「仏敵」の眷属と成ってしまうのである。

他人に敬礼されるのは、簡単な事なのである。

身を捨て世俗に背く様子によるのは、外面だけの仮初なのである。

ただ、何となく、世間の人の様にして、内心を整えていくのが、真実の、悟りを求める心が有る者なのである。

そのため、古代の先人は、次のように、話したのである。

「内は空しくして、外は従う」

この言葉の意味は、内心は自我に執着する心を無くして、外面は他に従っていく事なのである。

自身、自分の心と言う事を全く忘れて、仏法に入門して、仏法の掟に任せて修行していけば、内外、共に、善く成るのであるし、今も後も、善く成るのである。

仏法の中に集中できずに身を捨て、「世俗を捨てる」と言って捨てるべきではない事を捨てるのは、善くないのである。

この国土の仏法者のうち、悟りを求める心が有る者を自称する人の中にも、「身を捨てる」と言って、「他人は、どうにでも見ても良い」と思って、理

由も無く身を悪く振る舞い、あるいは、また、「世俗に執着しない」と言って、雨に濡れながら歩いて行く等するのは、内外、共に、無益であるのに、世間の人々は、これらの人々を「高貴な人であるかなぁ。世俗に執着しない」等と思ってしまうのである。

心中で仏による制度を守って、戒律に則(のっと)っていて、自身の修行も、他人の教化も、仏による制度に任せて修行する人を、かえって逆に、「名声や利益を貪っている」と言って、人々は気にもかけないのである。

しかし、そのような人が、かえって逆に、自身のために成るし、仏教に従っている事に成るし、内外の「徳行」、「善行」も成就するのである。

第四十六章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、世間の人々に、智者や、物知りと知られても何の役にも立たないのである。

真実に仏道を探求する人が、一人でもいる時は、自分が知っている仏や祖師達の仏法を説くべきである。

たとえ、自分を殺そうとした人でも、真実の真理を聴こうとして、誠実な心によって質問したら、怨む心を忘れて、その人のために説くべきなのである。

その他、禅宗以外や、密教以外や、密教、及び、仏教内外の経典や書籍などの事を知っている様子をしても、全く何の役にも立たないのである。

ある人が来て、これらのような事を質問しても、「知らない」と答えて、一切、苦しくないのである。

それなのに、「物を知らないのは悪い」と自身も他人も思ってしまい、「愚かな人である」と自ら思ってしまう事を傷(いた)んでしまって、物を知ろうとしてしまって、広く仏教内外の経典を学んでしまって、諸々の世俗の事を好んで学んでしまって、あるいは、他人に自分は知っている様子を見せるのは、極めて誤った事なのである。

仏道を学び修行するためには真実に何の役にも立たないのである。

知っているのを知らない様子をするのも難しく、わざとらしいので、かえって逆に、冷たい様子に成ってしまって、悪いのである。

本(もと)から知らなければ、苦しまないのである。

私、道元は、幼少の時は、仏教外の経典などを好んで学んでしまった。後、宋の時代の中国に入国して、仏法を伝えてもらうまで、仏教内外の書籍を開き、方言にも通じたのは、大切な用事のため、また、世間のためにも、尋常ではない事なのである。

世俗の人々なども「尋常ではない事である」と思ったし、あれこれの用事のためであったが、今、つくづく思うと、仏道を学び修行する事の障害であったのである。

ただ、仏教の経典を見ても、文に見えている所の道理を次第に心得ていけば、その道理を会得できるであろう。

それなのに、まず、文章を見てしまい、対句や韻声なども見てしまい、「善い」とか「悪い」と心に思ってしまった後に、道理を心得ていたのである。

そのため、知らないで、初めから、道理を心得ていけば、善かったのである。

仏法の言葉などを書くにも、文章の規則に則(のっと)って書こうとしてしまったり、韻声を間違えてしまったら(書くのを)妨げられてしまったり等するのは、知っている罪なのである。

言葉や文章は、どうでも良く、思うままの道理を徐々に書けば、後世の人々も「文は悪い」と思っても、道理が聞こえさえする事が、真理のためには大切なのである。

他の学問や知識も、このようなのである。

次のように、伝え聞いた事が有る。

故人である、高野の空阿弥陀仏は、本（もと）は、密教以外や、密教の、知識が有る高徳の僧であった。

世俗から逃れた後、念仏の門に入った後、真言宗の法師がいて、来て、密教の仏法について質問したら、空阿弥陀仏は、「皆、忘れてしまいました。一文字も覚えていません」と話して、答えなかったのである。

これこそ、悟りを求める心の手本と成るべきである。

少々は、覚えていたであろう！

けれども、何の役にも立たない事は言わないのである。

「念仏に専念する日々は、そのようにこそ、有るべきである」と思われるのである。

今の学者も、このような心が有るべきである。

たとえ、本（もと）、禅宗以外の学問や知識などが有っても、皆、忘れてしまうのは、善い事なのである。

まして、今、学んでしまう事は、ゆめゆめ、有るべきではない。

自分の宗派の語録などですらなお、真実の学に参入する仏道修行者は、見るべきではない。

その他は、これにより、知るであろう。

第四十七章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

今、この国の人々は、多分、あるいは、所作について、あるいは、言葉について、善悪や是非を、世俗の人々の見聞している知識を考慮してしまって、「この事を行うと他人は悪く思うであろう」とか「この事は他人は善く思うであろう」と思ってしまって、今後までも執着してしまうのである。

これは、全く、善くないのである。

世間の人々は、必ずしも、善を知る事ができない。

「他人が、どう思っても良い。狂人と言いたければ言えば良い」と思って、自分の心で仏道に則(そく)している事を行い、仏法に則(そく)していなければ行わないで、一生を過ごせば、世間の人々が、どう思っても、苦しくないであろう。

世俗から逃れるとは、世俗の人々の感情を心に気にかけない事なのである。

ただ、仏や祖師達の日常の所作や、菩薩の慈悲を学んで、諸々の天人や護法善神が目に見えなくても明らかに照らす所の言動による罪を懺悔して、仏による制度に任せて修行していけば、一切、苦しくないであろう。

だからと言って、また、「他人が『悪い』と思ったり話したりしても苦しくない」と言って、自由奔放で邪悪に成って悪事を行(おこな)って他人に恥じ入らないのは、善くないのである。

ただ、人目に基づかず、全く仏法に基づいて修行するべきなのである。

仏法の中では、また、そのような自由奔放な邪悪さや無恥を制止しているのである。

第四十八章

道元は、また、次のように、話した。

世俗の礼儀でも、他人から見えない所、あるいは、暗い部屋の中でも、衣服などを着替える時も、また、座ったり、横に成ったりする時にも、自由奔放に邪悪に、陰部などを隠さず無礼であるのを、「天の神に恥じ入っていないし、鬼などの霊的存在に恥じ入っていない」と注意するのである。

ただ、他人が見ている時と同じく、隠すべき場所を隠し、恥じ入るべき事を恥じ入るのである。

仏法の中でも、また、戒律は、そのように成っているのである。

であれば、仏道修行者は、内外を論じず、明暗を選ばず、仏による制度を心に留めて、「他人から見えない、知られない」と言って、悪事を行うべきではない。

第四十九章

未だ学ぶべき物が有る人である、ある僧が、ある日、道元に、次のように、質問した。

私は、なお、仏道を学び修行する事を心にかけて、年月を経て来ましたが、未だに、反省して自身の罪を悟る境地にもいません。

古代の先人は、多くが、「真理の会得は、聡明さや利発さによらず、智慧や明敏さを用いない」と話しています。

であれば、「『自身は、下等な才能、劣悪な器なので』と言って卑下するべきではない」と話しているように聞こえます。

もしかして、前例や、心に留めるべき用心の様子が有るのでしょうか？

どうなのでしょうか？

道元は、示して、次のように、話した。

その通りです。有ります。

智慧や高等な才能を用いず、利発さや聡明さによらないのが、真実の仏道を学び修行する事なのである。

しかし、誤って、「見る目が無い人や、聞く耳を持たない人や、愚かな人のように成れ」と勧めるのは、善くないのである。

仏道を学び修行するには、全く、多聞による博識や高等な才能を用いないので、「下等な才能や、劣悪な器である」と言って嫌うべきではない。

真実の、仏道を学び修行する事は、簡単な事なのである。

けれども、宋の時代の中国の寺院でも、ある師の会の下の数百人や千人の中に、真実の、真理を会得した人、仏法を会得した人は、わずかに、一人か二人なのである。

そのため、前例や用心も有るのである。

今、これについて思案すると、志の有無なのである。

真実の志を起こして、随分に、学に参入する人は、真理を会得する。

「その用心の様子では、何事に専念して、何の修行を急ぐべきである」と言うのは、次のような事なのである。

まず、心から求める志が切であるべきなのである。

例えば、「貴重な宝を盗もう」と思ったり、「強敵を討伐しよう」と思ったり、「高い色形のものに出会おう」と思ったりする心が有る人は、歩いたり立ち止まったり座ったり横に成ったりする時に、折りに触れて、種々の出来事が代わる代わる来ても、それに従いながら、隙を探し求め、心に気にかけるのである。

このような心が、とても切である者は、思いを遂げる。

このように、真理を探求する志が切であれば、あるいは、坐禅に打ち込むのに専念している時、あるいは、古代の先人の「公案」、「修行者の手がかりとしての仏や祖師達の言動」に立ち向かっている時、もしくは、善知識を持つ人々に逢っている時、真実の志によって修行している時、高くても的を射るであろうし、深くても釣り上げるであろう。

これほどの心が起きていないのに、仏道による一つの思いで生死の輪廻転生を切る一大事をどうして成就できるであろうか？　いいえ！

もし、このような心が有る人は、下等な智慧や劣悪な才能を問わず、愚者や悪人を論じず、必ず、悟りを得る事ができるであろう。

また、このような志を起こすには、切に、世間の、この世のものの常の変化を思うべきなのである。

このような事は、仮初（かりそめ）の、全てのものの観察などで、するべき事ではない。

また、有り得ない事を捏造（ねつぞう）して、思うべき事ではない。

真実に、眼前の道理なのである。

他人からの教え、仏教の経典の文、真理を証する道理を待つべきではない。

朝に生まれても夕方には死に、昨日、見た人が今日は亡くなっている事は、眼前を遮っているし、耳に近く聞く。

これは、他者の上で、見聞きする事なのである。

自身に引き当てて道理を思うと、たとえ、七十歳や八十歳まで寿命を期待できても、終には、死んでしまう道理によって死んでしまう。

その間の、心配、楽しみ、恩愛、怨敵などを思って解けば、「どうにでも過ぎてしまえ」と思うであろう。

ただ、仏道を信じて、涅槃の真の快楽を求めるべきである。

まして、年長の人や、大人の人や、人生を半ばまで過ぎている人は、余命が、いくばくも無ければ、仏道を学び修行する事を緩めるべきであろうか？

いいえ！

この道理も、なお、述べた事が有る事なのである。

真実には、今日、今の時こそ、このように、世間の事も、仏道の事も、思いなさい。

今夜や、明日から、どのような重病を負ってしまって、東西をわきまえない重い苦しみを受ける身と成ってしまったり、また、どのような鬼神の怨み

による害を受けて急死してしまったり、どのような賊による災難に遭ってしまったり、怨敵が出て来て殺害されて命を奪われてしまったりする事が有るかもしれないのである。

実に、不確かなのである。

そのため、これほどに、無駄な世俗で、極めて不確かな死期を「いついつまで命を永らえよう」として、種々の生活の手段を思案して、あまつさえ、他人に対して悪事を企んだり思ったりして、いたずらに無駄に、時間を過ごしてしまう事は、極めて愚かな事なのである。

このような道理が真実であるので、仏も、これを生者達のために説き、祖師達による大衆への説法や仏法の言葉でも、この道理のみを説いたのである。

今の、堂に上っての説法や、さらなる利益を請い願われた時の説法などでも、「この世のものの常の変化は迅速である。生死は一大事なのである」と話すのである。

かえすがえすも、この道理を心に忘れず、ただ、「今日、今の時だけ」と思って、時間を失くさず、仏道を学び修行する事に心を入れるべきなのである。

そうした後は、真実に、簡単なのである。

性質の上等や下等や、才能の利発や愚鈍は、全く、論じないのである。

第五十章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

人々の多くが世俗から逃れない事は、自身を貪るのに似ているし、自身の事を思っていないのである。

遠い未来までの考慮が無いのである。

また、善知識を持つ人々に出会っていないせいなのである。

たとえ、利益を貪る事を思っても、永遠の快楽の利益を得て天人や竜からの捧げものを得る事を願い、名声を思っても、仏や祖師という名声を得て古代の先人の高徳の僧という名声を得れば、後世の賢者も、それを聞いて、慕うであろう。

第五十一章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

「朝に真理を聞けたら、夕方に死んでも、善いのである」

今、仏道を学び修行する人も、この心が有るべきなのである。

極めて長い年月、多数の生の間、何回か、いたずらに無駄に、生まれ、いたずらに無駄に、死んで、稀（まれ）に、人の身を受けて、たまたま、仏法に出会った時、この身を仏土へ渡さなければ、いずれの生で、この身を仏土へ渡すのか？

たとえ、身を惜しんで保持しても、叶わない。

終には捨てて行く命を、一日でも一時でも仏法のために捨てれば、永劫の快楽の原因と成る。

後の事や、明日の生活の手段を思って、捨てるべき世俗を捨てず、修行するべき仏道を修行しないで、いたずらに無駄に、日夜、過ごすのは、くやむ事なのである。

ただ、思い切って、「明日の生活の手段が無ければ、飢え死んでしまえ。凍え死んでしまえ。今日、一日でも仏道を聞いて仏の心に従って死のう」と思う心を、まず、起こすべきなのである。

そうする時に、仏道を修行する事ができ得るのは、確かなのである。

このような心が無ければ、世俗に背（そむ）き仏道を学ぶ様でもなお、後退してしまって、夏や冬の衣服などの事を下心に気にかけてしまって、明日もなお来

年の命を活かす事を思ってしまって、仏法を学んでしまっては、幾万の劫、幾千の生、学んでも、叶えられると思えない。

また、そういう人も、いるであろう。

しかし、知られている、そのような心は、仏や祖師達の教えには無い、と思われる。

第五十二章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

未だ学ぶべき物が有る人である僧は、必ず、(肉体が)死んでしまう事を思うべきである道理は、もちろんなのである。

たとえ、その事を思わなくても、しばらく、まず、「時間をいたずらに無駄に過ごさない」と思って、何の役にも立たない事をして、いたずらに無駄に時間を過ごさず、意味が有る事をして時間を過ごすべきなのである。

その行うべき事の中でも、「一切の事のうち、どれが大切であるのか?」と言うと、「仏や祖師達の日常の所作以外は皆、何の役にも立たない」と知るべきである。

第五十三章

懐奘が、ある時、次のように、質問した。

僧の日常の所作で、古い破損した僧衣などを縫って補修して捨てなければ、物を貪って惜しむのに似てしまいます。

また、古い物を捨てて、新しい物を用いてしまえば、新しい物を貪って求めてしまう心が有る事に成ってしまいます。

両方共に、罪が有ります。

結局、どのように、用心するべきでしょうか？

道元は、次のように、答えた。

貪って古い物を惜しんだり、新しい物を求めたりする二つの心を離れれば、両方共に、過失は無いであろう。

ただし、破損した古い物を縫って永らえさせて、新しい物を貪らないのは、より善いであろうかなぁ。

第五十四章

懐奘が、道元による「夜話」のついでに、次のように質問した。

父母の恩に報いるなどの事は、するべきでしょうか？

道元は、示して、次のように、話した。

親孝行は最もするべき事なのである。

けれども、その親孝行には、在家信者と、出家者で別なのである。

在家信者は、「孝経」などの説を守って、親が生きている時も仕え、親が死んだ時も祭って仕えるべきである事は、世俗の人々は皆、知っている。

出家者は、(泣く泣く)恩を捨てて、「無為」、「消滅しない不変の絶対の真理」に入るので、出家者の作法では、恩に報いるのに、一人には限らず、一切の生者達を等しく「父母のように恩が深い」と思って、行っている善行を「法界」、「世界」に巡らせるのである。

別れておきながら、今の生の一生だけの父母だけに限ってしまえば、「無為の道」、「消滅しない不変の絶対の真理」に背(そむ)いてしまう。

日々の仏道修行や、時々の学への参入で、ただ、仏道に従っていけば、それを真実の親孝行の手段とするのである。

忌日の追善、中陰の作善などは皆、在家信者が用いる事なのである。

ただし、僧は、父母の恩が深い事を、真実のように、知るべきである。

また、他の一切の生者達も、また、この父母のように恩が深い事を知るべきである。

別れておきながら、一日を占有させて特別に善行を修行したり、別れておきながら、一人だけを区別して功徳を譲ったりするのは、仏の心ではないかなぁ。

戒の経の父母や兄弟の死亡の日の文は、一時的に、在家信者に受けさせているかなぁ。

宋の時代の中国の寺の僧達には、師匠の忌日には儀式が有ったが、「父母の忌日には修行した」という記述は見られないのである。

第五十五章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

人の利発さや愚鈍さと言うのは、志が到らない時の事なのである。

世間の人が馬から落ちる時、未だ地面につかない間に、種々の思いが起きる。

身を損なったり命を失ったりするほどの一大事が出て来た時は、誰でも、才能や思いを巡らせるのである。

その時は、利発な才能の人も、愚鈍な才能の人も、同じく、物を思い、正義を思案するのである。

であれば、「今夜、死ぬかもしれないし、明日、死ぬかもしれない」と思って、嘆かわしい事に出会ったように思って、切に励まして、志を進めたら、悟りを得られるのである。

処世の智慧が聡明であるよりも、愚鈍な才能でも切なる志を起こす人のほうが、速やかに、悟りを得るのである。

釈迦牟尼仏が存命時の、周梨槃特は、一つの詩を読む事も難しかったが、根性が切であったので、一夏で、証を取った。

ただ、今だけ、自身の命は存在するのである。

「死ぬよりも先に、悟りを得よう」と切に思って仏法を学べば、皆、悟りを得るのである。

第五十六章

道元は、ある夜、僧達に示して、次のように、話した。

宋の時代の中国の禅院で、麦や米などを揃えて、悪い物を避け、善い物を取って飯などにする事が有った。

ある禅師が、「たとえ、私の頭を裂き破る事、七分割にしても、米を揃えるなかれ」という詩を作って、それを戒めた。

この言葉の意味は、僧は、食事などで整えて食べるなかれ、ただ、有るのに従って良ければ美味しく食べ、悪い物を嫌わずに食べるべきなのである、という事なのである。

ただ、在家信者からの布施や、清浄な寺の共有物によって、飢えを除き、命を支えて、仏道修行するだけなのである。

「味によって善悪を選ぶなかれ」と話しているのである。

今、私、道元の会の下の僧達も、この心が有るべきなのである。

第五十七章

ある人が、次のように、質問した。

未だ学ぶべき物が有る人である僧が、もし、「自身が仏法なのである。外に向かって求めるなかれ」と聞いて、深く、この言葉を信じて、従来の修行や参入していた学を捨てて、本性に任せて善業や悪業をして一生を過ごしたとしたら、このような見解は、どうなのでしょうか？

道元は、示して、次のように、話した。

未だ学ぶべき物が有る人である僧が、もし、「自身が仏法なのである。外に向かって求めるなかれ」と言って、修行を捨てて、学を捨てれば、「この捨てる行為によって(外に)求めている部分が有る」と聞こえるし、これは(外に)求めているのである。

ただ、「修行や学は、本(もと)より、仏法なのである」と証して、求める事無く、世俗の事や悪業などは、自分の心がしたくても、せず、仏道修行の怠惰を嫌って、顧みず、この修行によって一つの事だけに専念して修行して、仏道を成就しても結果を得ても自分の心から求める事無くして修行する事こそ、「外に向かって求めるなかれ」と言う道理に適(かな)うであろう。

南嶽の懐譲が瓦(かわら)を磨いて鏡としようとしたのも、馬祖道一が仏に成る事を求めていたのを戒めたのである。

坐禅を制止した訳ではないのである。

坐禅は、仏に成るための修行なのである。

坐禅は、行為ではないのである。

自身の正体なのである。

この他に別に、仏法を求めるべき物は無いのである。

第五十八章

道元は、ある日、さらなる利益を請われたついでに、次のように、話した。

近代の僧侶は、多くが、「世俗に従うべきである」と話してしまう。

今、思うに、その通りではない。

世間の賢者ですらなお、民俗に従うのを「汚れている事」と言うし、屈原のような人は、「世俗の人々は挙(こぞ)って皆、酔っている。私、屈原は独り目覚めている」と言って、民俗に従わず、終には、滄浪で死没した。

(※

屈原が死んだ場所は滄浪ではない。

屈原には滄浪を歌った詩が有り、道元は、それと勘違いしてしまった。

)

まして、仏法は、ことごとく皆、世俗とは違うのである。

俗世の人々は髪を飾るが、僧は髪を剃る。

俗世の人々は多く食べるが、僧は一食だけ食べる。

皆、違うのである。

しかし、後に、(僧は、)かえって逆に、大いなる安楽の人と成るのである。

そのため、僧は、一切、世俗に背(そむ)いているのである。

第五十九章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

治世の法では、上は天子から、下は庶民に到るまで、各々、皆、官位に居る者は、その務めを修行する。

相応しい人ではないのに官位に居るのを「天を乱す事」と言う。

政治の道理が天の神の心に適(かな)う時は、世は清らかに澄み、国民は安楽なのである。

そのため、皇帝は、真夜中の午前零時に起きて、治世の時間とした。

簡単ではない事なのである。

仏法も、ただ、職の違い、業の違いだけなのである。

国王が自ら思いはかって、政治の道理をはかり、先例を考え、道理が有る臣下を求めて、政治が天の神の心に適(かな)う時、これを治世と言うのである。

もし、これを怠れば、天の神に背いてしまうし、世が乱れて国民が苦しむのである。

その国王以下、諸々の役人、庶民には皆、各々の司る所の業が有る。

それに従う者を「人」と言うのである。

それに背(そむ)く者は、天の神の事を乱すので、天の神からの刑罰を受けてしまうのである。

そのため、仏法の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、「世俗を離れ、家を出たから」と言って、いたずらに無駄に「身を安楽にしよう」と思う事は、片時も有るべきではない。

初めは、利益が有るのに似ているけれども、後には、大いに害が有るのである。

出家者の作法に従って、完全に、その務めを治め、その業を修行するべきなのである。

世間の治世では、先例や道理を考えて求めるが、先人の聖人や、先人の達人からの確かに伝えられている例が無ければ、自ら、その時の例に従う事も有るが、仏の子である仏の弟子である僧は、確かな先例や教えの文は明らかなのである。

また、伝えられて来ている善知識は現在も有るのである。

自分には思いはかりが有る。

歩いたり立ち止まったり座ったり横に成ったりする中において、一々、先例を思い、先人の達道者に従って、修行すると、真理を会得できる！

俗世の人は「天の神の心に適(かな)おう」と思い、僧は「仏の心に適(かな)おう」と思う。

修行が同じでも、得られる結果が優れていて、悟りという一つの物を得れば永遠に失わないし悟りの功徳を永遠に得られるのである。

このように大いに安楽であるため、一生、幻のような、この身を苦しめて、仏の心に従うかどうかは、ただ、修行者の心次第なのである。

「集中せずに身を苦しめない事をしなさい」と仏教では勧める事が無いのである。

戒律や所作に従っていけば、自然に、身も安楽に成るし、所作も普通に人目にも安楽に成るので、ただ、今、考え出した、自我に執着した狭い物の見方による身の安楽を捨てて、完全に仏による制度に従うべきなのである。

第六十章

道元は、また、次のように、話した。

私、道元が、宋の時代の中国の天童山の禅院にいた時、第五十祖の如浄は、宵には、午後十時四十八分まで坐禅し、午前一時から午前三時の間に起きて坐禅した。

私、道元は、如浄と共に、寺の僧堂の中で坐禅した。

一夜も怠らなかった。

その間、僧達の多くが眠ってしまった。

如浄は、巡って、眠ってしまっている僧を、あるいは、拳で打ち、あるいは、履物を脱いで打ち、辱め、勧めて、眠りから目覚めさせた。

僧達が、それでもなお眠ってしまう時は、如浄は、寺の照堂に行って鐘を打ち、行者（あんじゃ）を呼んでロウソクを灯すなどして、すぐに、次のように、僧達に説法した。

寺の僧堂の中に集まって居て、いたずらに無駄に、眠ってしまって、何の役に立つのか？

であれば、どうして、出家して寺に入ったのか？

見ないのか？

世間の帝王や役人のうち、誰が、身を安楽にしているのか？

君主は王道を治め、臣下は忠節を尽くし、庶民は田を開き鍬を取るが、誰が、安楽にして世を過ごしているというのか？

これを逃れて寺に入って、空しく時間を過ごして、結局、何の役に立つのか？

「生死は一大事なのである。この世のものの常の変化は迅速なのである」と禅宗以外も、禅宗も、同じく、勧めている。

今日の夕方や、明日の朝、どのような死を受けたり、どのような病を受けたりするのか分からない！

しばらく、存命している間に、仏法を修行せず、眠ってしまって横に成って空しく時間を過ごすのは、最も愚かなのである。

そのようなので、仏法は衰えて行くのである。

諸方で仏法が盛んであった時は、寺では皆、坐禅に専念していたのである。

近代、諸方で坐禅を勧めないので、仏法は衰えて行くのである。

このような道理によって、如浄が、僧達に勧めて坐禅させたのを、私、道元は、まのあたりにして見たのである。

今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、如浄の家風を思うべきである。

また、ある時、そばに仕えている者などが、「寺の僧堂内の僧達は、眠り疲れて、あるいは、病気が起こってしまい後退する心も起こしてしまうでしょう。これは、坐禅が長いためかもしれません。坐禅の時間を縮められたら、どうでしょうか？」と話したら、如浄は、次のように、話した。

そうではない。

悟りを求める心が無い者が、仮初に寺の僧堂に居れば、半時でもなお、片時でもなお、眠ってしまうであろう。

悟りを求める心が有って、修行の志が有る僧は、長ければ長いほど、いよいよ、喜び、修行するのである。

私、如浄が若かりし時、諸方の長老を見てまわっていたら、ある長老は、次のように、話していた。

「以前は、眠ってしまう僧を、拳が欠けてしまうほど打ったが、今は老いてしまって力が弱く成ってしまって、強く打つ事ができ得ないので、善い僧も出来てこないのである」

諸方の長老も坐禅を緩く勧めてしまうので、仏法は衰えているのである。

私、如浄は、いよいよ、打つべきなのである。

第六十一章

道元は、また、次のように、話した。

真理を会得するのは、心によって得るのか？　身によって得るのか？

禅宗以外などでも、「心身は唯一普遍絶対だからである」と言って、身によって得るといえどもなお、「心身は唯一普遍絶対」と言って、身によって得ると言う。

であれば、まさしく、身が会得するかは、確かではない。

今、私、道元の家である仏教では、心身が、共に、会得するのである。

その中で、心だけで仏法をはかっている間は、幾万の劫、幾千の生でも、会得できない。

(従来の)心を捨てて、(従来の)知見や理解を捨てる時、会得できるのである。

霊雲志勤が桃の花という色形を見て心を明らめたのも、香厳の智閑が小石が竹に当たった音声を聞いて仏道を悟ったのも、なお、身が会得したのである。

であれば、真理を会得するのは、まさしく、身で会得するのである。

このため、「坐禅に専念するべきである」と思って、勧めているのである。

正法眼蔵随聞記 第三巻

侍者 懐奘 編

第六十二章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、心身を捨てて、完全に、仏法に入門するべきである。

古代の先人は、「百尺の竿の先頭で、どのように歩みを進めるのか？」と話している。

であれば、「百尺の竿の先頭に上って、足を離せば、死ぬであろう」と思って、強く取りつく心が有るのである。

それを「一歩、進みなさい」と言うのは、「まさか悪い事には成らないであろう」と、思い切って、身の命を捨てるように、世俗から仏土へ渡る業から始めて、一身の生活の手段に到るまで、思い、捨てるべきなのである。

それらを捨てないと、どんなに、頭が燃えているのを払うように仏道を学び修行しても、真理を会得する事は、叶わないのである。

ただ、思い切って、心身、共に、捨てるべきなのである。

第六十三章

ある「比丘尼」、「女性の出家者」が、ある時、次のように、質問した。

世間の婦人などですらも、仏法を勤勉に学びます。

「『比丘尼』、『女性の出家者』の身には、少々の善くない所が有りますが、なぜ、仏法に適(かな)わないのか？」と思ってしまいます。

どうなのでしょうか？

道元は、次のように、話した。

その言葉は、正しくない。

在家信者の女の人は、女の身でありながら、仏法を学んで会得する事が有っても、出家者は、出家の心が無ければ、会得できないのである。

仏法が人を選ぶのではなく、人が仏法に入門しないのである。

出家者の正義と、在家信者の正義や、その心は、異なるのである。

在家信者のうち、出家者の心が有る者は、世俗を出て離れるべきであるし、出家者に、在家信者の心が有るのは、二重に、善くない事なのである。

(出家者と在家信者では、)用心も、大いに異なる事が有るのである。

行う事が難しいのではなく、良く行う事が難しいのである。

世俗を出て離れて、真理を会得する修行は、人ごとに心に気にかけている様子は似ているけれども、良く行う人は稀(まれ)なのである。

「生死は一大事なのである。この世のものの常の変化は迅速なのである」

心を緩めるなかれ。

世俗を捨てるならば、実に世俗を捨てるべきなのである。

「(『出家者』と『在家信者』という)仮の名称は、どうでも良い」と思うのである。

第六十四章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

今の世俗の人々を見ていく中に、報いの結果も善く、家をも興す人は皆、心が正直で、他人のために善き人なのである。

そのため、家をも保持し、子孫までも栄えるのである。

心がねじ曲がっていて、他人のために悪い人は、たとえ、一時は、報いの結果も善く、家を保持できる様子が有っても、終には、悪く成るのである。

たとえ、一生は無事に過ごす様であっても、子孫は必ず衰えてしまうのである。

また、「他人のために善い事をして、その人に『善い』と思われ、喜ばれよう」と思って、するのは、悪いのに比べれば、優れているのに似ていても、これは、自身を思っていて、他人のために真に善い訳ではないのである。

その人には知られなくても、他人のために善い事をし、未来までも、誰のためと思わないで、他人のために善い事をしておく等する人を「真実の善人」と言うのである。

まして、僧は、これを超える心を持つべきなのである。

生者達を思う事、親しいか疎遠であるかを区別せず平等に救済して仏土へ渡す心を持って、世間の利益や、世間を出た利益について全く自身の利益を思わず、他人に知られなくても、喜ばれなくても、ただ、他人のために善い事を心から行い、「私は、このような心を持っている」と他人に知られないのである。

この前例は、まず、世俗を捨て、身を捨てる事なのである。

自身すらも真実に捨てれば、「他人に善く思われよう」と思う心は無いのである。

だからと言って、「他人は、どうにでも思いたければ思え」と言って、悪い事を行い自由奔放で邪悪であるのは、仏の心に背(そむ)いてしまうのである。

ただ、善い事を行い、他人のために善い事をして、「代価を得よう」とか「自分の名声を実現しよう」と思わないで、真実に何物も得ないで、利益を生者達にもたらす事をするのである。

これは、自我への執着を離れる、第一の用心なのである。

「この用心を保持しよう」と思うのであれば、まず、この世のものの常の変化を思うべきである。

一生は、夢のような物なのである。

時間は、早く移り変わってしまう。

露(つゆ)のような命は、消えやすい。

時は人を待ってくれない習いなので、「ただ、短時間、存命中に、些細な事についても、他人のために、良く仏の心に従おう」と思うべきなのである。

第六十五章

道元は、「夜話」で、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、最も、貧しいべきである。

世俗の人々を見ると、財産が有る人は、まず、怒りと恥辱という二つの災難が必ず来るのである。

宝が有れば、他人は、それを「奪い取ろう」と思ってしまう。

自分は、「取られたくない」とする時、怒りが、たちまち、起こる。

あるいは、宝について論争して、問答対決にまで及び、終には、闘争、戦争してしまう。

このような間に、怒りも起こるし、恥辱も来るのである。

貧しい上に貪らない時は、まず、これらの災難を免れて、安楽は自由自在なのである。

証拠は眼前に有るのである。

仏教の文を待つまでもない。

それだけではなく、古代の聖人や先人の賢者は財産を非難し、諸々の天人や仏や祖師達は皆、財産を恥じた。

それなのに、愚かな人が、財宝を蓄え、いくらかの怒りを抱くのは、恥辱の中の恥辱なのである。

貧しくて真理を思う者は、先人の賢者や古代の聖人が見上げる者であるし、諸々の仏や諸々の祖師達が喜ぶ者なのである。

近頃、仏法が衰えていっている事は、眼前の事なのである。

私、道元が、初めて建仁寺に入門した時に見た僧達の様子と、七、八年間が過ぎた時に見た僧達の様子は、次第に変わっていたが、寺の諸々の寮に塗られて飾られた籠（かご）を置いてしまい、各々器や品物を保持してしまい、美しい服を好んでしまい、財宝や品物を蓄えてしまい、自由奔放で邪悪な言葉を好んでしまい、合掌低頭や礼拝などが衰えていってしまった事を思うと、他所の寺の僧達の様子も(同じであると)推察されるのである。

仏法修行者は、僧衣と器以外に、財宝などを一切、持つべきではない。

何を置くために塗られて飾られた籠（かご）を設置するのか？

他人に隠すほどの物を持つなかれ。

盗賊などを恐れるために「隠して置こう」と思ってしまうので、捨てて持たなければ、かえって逆に、安心なのである。

「他人を殺しても他人には殺されたくない」と思ってしまう時こそ、身も苦しいし、用心も必要に成ってしまうので、「他人が自分を殺しても自分は報復を加えない」と思って決心すれば、用心も不要に成り、盗賊も心配する必要が無いのである。

どんな時も、安楽に成るのである。

第六十六章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

宋の時代の中国の、海門 禅師が天童山の長老であった時、会の下に元 首座と言う僧がいた。

この元 首座と言う人は、仏法を会得した、真理を悟った人で、修行の保持が長老を超えていた。

元 首座は、ある時、夜、長老の部屋に参って、焼香して礼拝して、「請い願わくば、私、元 首座に、後堂首座を許してください」と話した。

その時、海門 禅師は、涙を流して、次のように、話した。

私、海門 禅師は、小僧であった時から、未だ、そのような話を聞いた事が無い。

あなた、元 首座は、坐禅僧として、首座、長老を所望するのは、大いなる誤りなのである。

あなた、元 首座は、既に真理を悟って、私、海門 禅師を超えている。

それなのに、首座を望むのは、昇進のためなのか？

許すのであれば、前堂も、長老をも、許すべきである。

しかし、そのような心持ちは、卑しく、劣っているのである。

実に、それによって、他の、未だ悟っていない僧達の様子は推察されるのである。

仏法が衰えているのを、それによって、知る事ができてしまう。

元首座は、この海門 禅師の言葉に恥じ入って辞退したが、終に、首座を請い願ってしまった。

しかし、その後、元首座は、この海門 禅師の言葉を記録して、自身を辱めて、師である海門 禅師の美しい善い言葉を明らかにした。

今、この話を思案すると、昇進を望み、「長老と成ろう」と思う事を、古代の先人も恥じ入ったのである。

ただ、「真理を悟ろう」とだけ思って、他の思いは有るべきではない。

第六十七章

道元は、ある夜、僧達に示して、次のように、話した。

唐の太宗は、即位後、古い宮殿に住んだ。

古い宮殿は、破損していたので、湿気が上がり、風や霧(きり)が冷たくて、皇帝の肉体は病気に侵されてしまった。

臣下などが「新しい宮殿を造るべきです」と提言したら、太宗は、

「時期は、農耕期である。

(新しい宮殿を造るために国民を使役してしまうと、)国民を必ず憂えさせてしまうであろう。

秋を待って、造るべきである。

湿気に侵されてしまったのは地に受け入れられなかったからであるし、風雨に侵されてしまったのは天に適(かな)わなかったからである。

さらに天地に背(そむ)いてしまえば、この身は亡く成ってしまうが、国民を煩わさなければ、自然と、天地に適(かな)うであろう。

天地に適(かな)えば、身は病気に侵されなく成るであろう」と話して、終に、新しい宮殿を造らず、古い宮殿に住んだ。

俗世の人ですらなお、このように、国民への思いやりは、自身に対してよりも超えていたのである。

まして、仏の子である仏の弟子である僧は、釈迦牟尼仏の家風を受け入れて、一切の生者達を唯一の子のように思いやるべきである。

「自分に所属する、そばに仕える者や従者である」と思って、叱って煩わすなかれ。

まして、「同期の仲間や、高徳の長老などを釈迦牟尼仏のように恭しく敬うべきである」と戒の文で明らかなのである。

であれば、今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、他人には顔色に出さずに知られなくても、心の内で、「上等や下等や、親しいか疎遠であるかを区別せず、他人のために、善良であろう」と思うべきなのである。

大事な事でも、些細な事でも、他人を煩わしたり、他人の心を破壊したりするなかれ。

釈迦牟尼仏が存命時、外道は、多くが、釈迦牟尼仏の悪口を言って憎んだ。

釈迦牟尼仏の、ある弟子が、次のように、質問した。

釈迦牟尼仏は、本(もと)より、柔和を根本としているし、慈悲を根本としているので、一切の生者達は等しく(釈迦牟尼仏を)恭しく敬うべきです。

なぜ、あのように、従わない生者どもがいるのでしょうか？

釈迦牟尼仏は、次のように、話した。

私、釈迦牟尼仏は、昔、（前世で、）僧達を統治していた時、多くの叱責や仏教的な所作によって弟子を戒めてしまった。

そのため、今、あのようなのである。

前述の話は、「律」の中に見られる。

そのため、たとえ、住持、長老として僧達を統治していても、弟子の非を正して諫める時に、叱責の言葉を用いるべきではない。

ただ、柔和な言葉によって、戒めて、勧めても、従ってくれる者は従ってくれるのである。

まして、未だ学ぶべき物が有る人である僧や、親族や、兄弟などのために、荒々しい言葉によって他人を悪く叱責するのは、全く、やめるべきなのである。

よくよく、用心するべきである。

第六十八章

道元は、また、僧達に示して、次のように、話した。

僧の用心では、仏や祖師達の日常の所作を守るべきである。

第一には、まず、財宝を貪るなかれ。

釈迦牟尼仏の慈悲が深く重い事は、例えても、量り難い。

釈迦牟尼仏の行為や、日常の所作は皆、生者達のための物なのである。

釈迦牟尼仏は、一微塵ほども、生者達のために利益ではない事を行わなかった。

釈迦牟尼仏は、転輪聖王の王子なので、王に即位して、一天下を思い通りにして、宝によって弟子を思いやり、領地によって弟子を育む事ができたのに、なぜ、位を捨てて、自ら乞食を行ったのか？

それは、決定的に、末法の世の生者達のためにも、弟子の仏道修行のためにも、利益と成る理由が有るので、釈迦牟尼仏は、財宝を蓄えず、乞食を行っておいてくれたのである。

釈迦牟尼仏以降、インドや中国の祖師達や、「善い」と他人にも知られた者達は皆、貧しくて、乞食をしたのである。

まして、禅宗の祖師達は皆、「財宝を蓄えるなかれ」とのみ勧めているのである。

禅宗以外でも、禅宗をほめるには、まず、貧しいのをほめるし、伝えられて来ている書籍や記録でも、貧しかった事を記して、ほめているのである。

「財宝に富み、豊かで、仏法を修行する」とは未だ聞いた事が無い。

善い仏法修行者と言う者は皆、糞掃衣で常に乞食するのである。

禅宗を「善い宗派である」と言い、禅僧を他と異なるとする始まりは、昔、禅宗以外の寺院などに雑居していた時にも、身を捨てて、貧しい人であったからなのである。

禅宗の家風は、まず、このようである事を知るべきである。

仏教の文による道理を待つまでもない。

私、道元も、田園などを所持していた時が有った。

また、財宝を持っていた時も有った。

その時の心身と、今の貧しくて僧衣や器に乏しい時の心身を比べると、「今の心身のほうが優れている」と思われるのが、現の証拠なのである。

第六十九章

道元は、また、次のように、話した。

古代の先人は、「ある人に似ないで、ある人の家風を語るなかれ」と話している。

この言葉の意味は、ある人の「徳」、「善行」を学ばず、知らないのに、その人に過失が有るのを見て、「ある人は善い人であるが、ある行いは悪い。悪い事を善い人もするんだなぁ」と思うなかれ、という事なのである。

ただ、ある人の「徳」、「善行」は取得して、過失は取り上げるなかれ。

「王者は『徳』、『善行』は取得するが、過失は取り上げない」と言う言葉も、こういう意味なのである。

第七十章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

人は、必ず、隠れて善行を修行するべきである。

隠れて善行を修行すれば、必ず、目に見えない加護や、目に見える利益が有るのである。

たとえ、泥の像や、木の像や、粘土や蝋（ロウ）の像で、粗悪であっても、仏像を敬うべきである。

黄巻、赤軸の粗悪品であっても、仏経と仏教に帰依して敬うべきである。

破戒、無恥の僧侶であっても、僧の団体を信仰するべきである。

内心に信心を持って敬礼すれば、必ず、目に見える幸福を受けるのである。

破戒、無恥の僧や、粗悪な外見の仏や、粗悪品の仏経だからと言って、不信心、無礼であれば、必ず、罰を受けるのである。

それが当然である、釈迦牟尼仏が残してくれたもので、人や天人の幸福の分け前と成っている仏像、経典、僧侶なのである。

そのため、帰依して敬礼すれば、必ず、利益が有るのである。

不信心であれば、罰を受けるのである。

どんなに、有り得なくて、浅ましくても、仏や仏法や僧という対象に帰依して敬礼するべきなのである。

「禅僧は、善を修行せず、功徳を用いない」と言ってしまって、悪行を好むのは、極めて誤った事なのである。

先例で、悪行を好む人なんて未だ聞いた事が無い。

丹霞天然禅師は、木の仏像を焼いた。

これは(一見、)悪事に見えるが、一際目立っている説法を施し設けているのである。

丹霞天然禅師の行状の記録を見ると、坐禅に必ず正しい所作が有ったし、坐禅せずに立っていても必ず礼儀が有ったし、常に高貴な賓客を歓迎するようであった。

一時的な坐禅でも、必ず、「結跏趺坐」して、「叉手」した。

自身の眼のように、寺の共有物を守った。

勤勉に修行する者がいれば、必ず、その者を喜んだ。

些細な善行でも、重んじた。

日常の行状が、とても優れていた。

丹霞天然禅師の記録を留めて、今の世までも、寺の鑑としているのである。

それだけではなく、諸々の、悟りを求める心が有る師や、先例や、真理を悟った祖師達について見聞きすると、皆、戒の行いを守り、所作を整え、たとえ些細な善行でも重んじた。

「真理を悟った師が善行をおざなりにした」とは未だ聴いた事が無い。

そのため、未だ学ぶべき物が有る人である僧は、「祖師達の教えに従おう」と思うのであれば、必ず、善行を重んじなさい。

信仰に専念するべきである。

仏や祖師達の仏道修行は、必ず、多数の善行が集まる修行なのである。

「すべてのものは仏法なのである」と通達した上は、「悪は、決定的に悪であるので、仏や祖師達の真理から遠ざかってしまう。善は、決定的に善であるので、仏道との縁と成る」と知るべきである。

もし、このようであるならば、仏や仏法や僧という対象を重んじるべきである！

第七十一章

道元は、また、次のように、話した。

今、「仏や祖師達の仏道を修行しよう」と思うのであれば、期待する事無く、求める事無く、所得を無くして、利益を求める事無く、先人の聖者の仏道を修行し、祖師から祖師への日常の所作を修行するべきなのである。

「求める事を断ち、仏という結果を望むべきではないから」と言って、修行を止めてしまい、本の悪行に留まってしまえば、かえって逆に、本の「求める事」に留まってしまい、本の巣窟に堕ちてしまうのである。

全く少しも期待する事を無くして、ただ、「人や天人の幸福の分け前と成ろう」と思って、僧の所作を守り、救済して仏土へ渡し利益を生者達にもたらす日常の所作を思い、多数の善を好み修行して、本の悪を捨てて、今の善に停滞せず、一生、修行していけば、これを古代の先人は「『漆の桶』、『無知な僧』、『煩悩』を奥底まで打破した」と話しているのである。

仏や祖師達の日常の所作とは、このような物なのである。

第七十二章

ある僧が、ある日、来て、仏道を学び修行する用心について質問した。

道元は、ついでに、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、まず、貧しいべきである。

財産が多ければ、必ず、その志を失ってしまう。

在家信者で仏道を学び修行する者は、なお、財宝にまとわりついてしまい、居所を貪ってしまい、眷属と交わってしまうので、たとえ、その志が有っても、仏道の障害と成ってしまう因縁が多い。

古来から、俗世の人で学に参入する者は多いが、その中で「善い」と言われる者でもなお、僧には及ばないのである。

僧は、三種類の僧衣と一つの器以外は財宝を持たず、居所を思わず、衣服を貪らず、仏道を学び修行するのに専念するので、皆、(真の)利益を得るのである。

なぜなら、貧しいのは、真理に近いのである。

龐公が、俗世の人であったが、僧に劣らず坐禅の道場に名声を留めている理由は、龐公が、禅に参入する最初に、家の財宝を持ち出して海に沈めようとしたからである。

ある人が、それを諫めて、「他人に与える事もできるし、仏教の事に用いる事もできる」と話した。

龐公は、その時、その人に、

「私、龐公は、『(財宝は)敵である』と思って、これを捨てるのです。『(財宝は)敵である』と知っていて、どうして、他人に与える事ができるでしょうか？　いいえ！

宝は、心身を心配させる敵なのです」と話して、終に、海に入れ終わった。

その後、命を活かすためには、笊(ざる)を作って売って過ごしたのである。

俗世の人でも、このように、財宝を捨ててこそ「善人」とも言われるのである。

まして、僧は、全く、捨てるべきなのである。

第七十三章

ある僧が、次のように、話した。

中国の寺院には、必ず、寺の共有物などが有って、置かれているので、僧のための仏道修行の支援と成って、それの心配が無いです。

この国は、その法が無いので、全く捨ててしまっては、仏道修行を違えて乱してしまうかもしれません。

このように衣服や食糧などの支援に見当をつけて、「有ったら、善い」と思われます。

どうでしょうか？

道元は、次のように、話した。

そうではない。

中国よりも、この国の人は、無理に僧に捧げものを捧げ、過分に他人に物を与える事が有るのである。

まず、他人は知らなくても、私、道元は、仏道を修行して道理を会得したのである。

一切、一つも物を持たず、思わず、あてがわず、十年間余り、過ぎ終わっている。

「少しも財産を蓄えない」と思う事こそ大事なのである。

「わずかな命を生きるのは、どうなのか?」と思って蓄えなくても、先天的に有るのである。

人には皆、生きるための分け前が有るのである。

天地が、それを授けているのである。

自分で走り求めなくても、必ず、有るのである。

まして、仏の子である仏の弟子である僧には、釈迦牟尼仏が残して付属してくれた幸福の分け前が有り、求めなくても自然と得る事ができるのである。

ただ、全く捨てて、仏道を修行すれば、先天的に、それが有るのである。

現の証拠が有るのである。

第七十四章

道元は、また、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、多分、「もし、そのような事をすれば、世俗の人々は、それを非難しないか？」と話すであろう。

このような道理は、大いに、善くないのである。

世間の人々が、どんなに非難しても、仏や祖師達の日常の所作や、仏教の道理であれば、教えに従って修行するべきなのである。

たとえ、世俗の人々が挙(こぞ)って、ほめても、仏教の道理ではなく、祖師達も修行していない事であれば、行うなかれ。

「世俗の人々が、親しいか疎遠であるかを問わず、自分をほめるから」とか「自分を非難するから」と言って、世俗の人々の心に従っても、自分の命が終わる時、悪業に引かれて地獄などに堕ちてしまう時、そんな人は、どのようにしても、救う事ができないのである。

たとえ、諸々の人々に非難されて憎まれても、仏や祖師達の教えに従って修行すれば、真実に自身を助けられるとすれば、他人が非難しても、仏道を修行するべきである。

また、そのように非難したり、ほめたりする人々は、必ずしも、仏や祖師達の修行に通達している訳ではないし、証し会得している訳ではない。

仏や祖師達の教えを世俗の善悪によって判断するべきであろうか？　いいえ！

そのため、世俗の人々の感情には、従うなかれ。

ただ、仏道の教えに従って修行するべき道理であれば、完全に、教えに従って修行するべきなのである。

第七十五章

ある僧が、また、次のように、話した。

私には、老いた母がいます。

私は、その唯一の子なのです。

完全に、私の助けによって、処世して生きているのです。

恩愛も、とても深いです。

私の親孝行の志も、深いです。

このため、少々、世俗に従って、他人に従って、他人からの恩や助力によって、母の衣服や食糧にあてています。

私が、もし、世俗を逃れて、寺から出なければ、母は、一日も存命は困難でしょう。

そのため、世間にいて、完全に仏道に入門する事は難事なのです。

もし、なおも、母を捨てて、仏道に入門するべき道理が有るのであれば、その趣旨は、どのような物なのでしょうか？

道元は、次のように、話した。

その事は、難事なのである。

他人が、はからう訳にはいかない。

ただ、自ら、よくよく、思考して、実に、仏道への志が有れば、どのようにかして支度、便宜的な方法を思案して、御母様の安堵と命を活かす手段を支度して、仏道に入れば、両方、共に、善い事なのである。

切に思う事は、必ず、思いを遂げる事ができるのである。

強敵や、深く美しい色形や、貴重な宝でも、切に思う心が深ければ、必ず、便宜的な方法が出て来る様子が有るのである。

これは、天地や、護法善神の目に見えない加護が有って、必ず、成就するのである。

曹溪山の、中国の第六祖、第三十三祖の慧能は、新州の木こりで、薪(まき)を売って母を養っていた。

慧能は、ある日、市場で、客が金剛経を読むのを聴いて、悟りを求める事を思い立って心して、(泣く泣く)母の所を辞して、黄梅山に参った時、十両の金銭を得て、御母様の衣服や食糧にあてた、という記述が見られる。

「これも、切に思っていたので、天の神が与えたのだなぁ」と思われる。

よくよく、思考するべきである。

これには、最もな道理が有るのである。

御母様の一生が終わるのを待って、その後、障害無く、仏道に入門すれば、次第に、本意のようであるし、神妙なのである。

けれども、老いや若さは不確かなので分からず、もし、老いた母は長く「この世」に留まって、自分は先に「この世」を去る事が出て来た時に、支度が出来ていなければ、自分は仏道に入門できない事を後悔してしまい、老いた母は、それを許さなかった罪に沈んでしまって、二人、共に、利益が無くて、相互に罪を得てしまった時は、どうするのか？

もし、今の生を捨てて、仏道に入門すれば、老いた母が、たとえ、餓死しても、唯一の子を許して仏道に入門させた功徳は、真理を会得するための良い縁と成る！

もっとも、極めて長い時間、多数の生でも、捨て難い恩愛だが、今の生で人の身を受けて仏教に出会った時、捨てれば、真実の、恩に報いる者と成る道理が有るのである。

仏の心に適（かな）う！

「唯一の子が出家すれば、七代の父母も真理を会得できる」という記述が見られる。

「なぜ、一生だけの儚い命の身を思って、永劫に安楽の原因を空（むな）しく通過してしまうであろうか？　いいえ！」と言う道理も有るのである。

これらをよくよく、自ら、はからうべきである。

正法眼蔵随聞記 第四巻

侍者 懐奘 編

第七十六章

道元は、ある日、学への参入のついでに、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、自分の理解に執着するなかれ。

たとえ、会得している所が有っても、「もしかしたら、決定的に善くない事もあるかもしれない。また、これよりも善い道理が有るかもしれない」と思って、広く、善知識を持つ人々を訪ね、先人の言葉を尋ねるべきである。

また、先人の言葉であっても、固く執着するなかれ。

「もしかしたら、これも信じると悪いかもしれない」と思って、次第に、優れている言葉が有れば、それに付くべきなのである。

第七十七章

道元は、また、次のように、話した。

南陽の慧忠 国師は、紫璘 供奉に、「どこから来ましたか？」と質問した。

紫璘「城南から来ました」

慧忠「城南の草は何色でしたか？」

紫璘「黄色でした」

南陽の慧忠 国師は、童子に、「城南の草は何色ですか？」と質問した。

童子「黄色です」

慧忠「ただ、この童子も、また、(皇帝の)簾(すだれ)の前で、(最高位の)紫(の衣服)を賜って、皇帝に答えて、奥深い話を話す事ができるのである」

そのため、この童子も、皇帝の師として真の色を答える事ができるのである。

「あなた、紫璘の見解は、普通を超えていない」という意味なのである。

後世の、ある人は、

「紫璘 供奉が普通を超えていない過失は、どこに有るのか？

童子も、同じく、真の色を説いた。

これこそ、真の善知識であろう」

と話してしまって、南陽の慧忠 国師の言葉の真意を用いなかった。

そのため、「必ずしも古代の先人の言葉を用いず、ただ、真実の道理を知るべきなのである」と知る事ができる。

疑心は悪い事であるが、また、信じるべきではない事に固く執着して、尋ねるべき意味を問わないのも悪いのである。

第七十八章

道元は、また、僧達に示して、次のように、話した。

未だ学ぶべき物が有る人である僧の第一の用心は、まず、自身に執着した狭い物の見方を離れるべきである。

「自身に執着した狭い物の見方を離れる」と言うのは、「自身に執着するべきではない」という事なのである。

たとえ、古代の先人の言葉を研究し、鉄や石のように常に坐禅しても、自身に執着して離れなければ、幾万の劫でも、幾千の生でも、仏や祖師達の教えを会得できないのである。

まして、「仮の便宜的な方法である仏教と真実の仏教と、密教以外の正しい仏教と密教の正しい仏教を悟る事ができ得た」と言っても、自身に執着する心を離れなければ、いたずらに無駄に、他者の宝を数えてしまって、自らには一銭の半分の分け前も無いのである。

ただ、請い願わくば、未だ学ぶべき物が有る人である僧は、静かに坐禅して、道理によって、自身の最初から最後までを尋ねるべきなのである。

身体髪膚は、父母の二滴に過ぎず、一息でも止まれば、山や野に離散して、終には泥土と成ってしまうのである。

どうして、自身に執着できるであろうか？　いいえ！

まして、仏法によって見れば、「十八界」、「五感や意識や理解」が集散した物に過ぎず、どの物を「自身である」と決定できるのか？　いいえ！

仏教と仏教外は別であるが、自身の最初から最後まで「得る事ができない物である」のを修行の用心とするのは、同じなのである。

まず、このような道理に通達すれば、真実の仏道は明らかに成る物なのである。

第七十九章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、「善い者達に親しみ近づくのは、霧や露の中を歩いて行くような物なのである。湿っていない衣服といえども、時々、潤う事が有るのである」と話している。

この言葉の意味とは、善人達に慣れ親しめば、自分では気づかないうちに、善人と成る、という事なのである。

昔、倶胝和尚に仕えていた一人の童子は、いつ学び、いつ修行したとも見えず、自分では気づかなくても、長い間、学に参入していた倶胝に近づいたので、真理を悟った。

坐禅も、自然に、長い間していれば、突然、一大事を明らかにできるので、「坐禅は正門である」事を知るべきなのである。

第八十章

道元は、千二百三十六年の十二月の除夜に、初めて、懐奘に、興聖寺の首座を要請した。

道元は、短時間の説法のついでに、初めて、説法を首座である懐奘に要請したのである。

懐奘は、興聖寺の最初の首座なのである。

さて、道元の短時間の説法の趣旨は、禅宗の、仏法が伝来した時の事を取りあげた物であった。

中国の初祖、第二十八祖の達磨が、西のインドから来て、少林寺に居て、機会を待ち、時機を期待して、壁に向かって坐禅していたら、その年の年末に、(後の第二十九祖である)神光とも呼ばれる慧可が来た。

達磨は、「慧可が最上の段階の器である」と知って、慧可を直接に親しく指導して悟らせて、僧衣と仏法を共に伝承させたので、達磨と慧可の法の子孫は天下に流布し、正しい仏法が現在に至るまで広く流通したのである。

今、初めて、懐奘に首座を要請し、今日、初めて、説法を行わせる。

僧達が少ないのを憂うなかれ。

自身が初心者であるのを顧みるなかれ。

汾陽では、(僧の数が、)わずかに、六、七人であった。

薬山では、(僧の数が、)十人未満であった。

けれども、皆、仏や祖師達の仏道を修行したのである。

これらを「寺が盛んである」と言うのである。

見た事が無いか？

香厳の智閑は小石が竹に当たった音声を聞いて仏道を悟り、霊雲志勤は桃の花という色形を見て心を明らめたのである。

竹には、利発や愚鈍や、迷いや悟りは無い！

桃の花には、浅はかさや深みや、賢者や愚者は無い！

桃の花は、毎年、花開くが、人々が皆、悟りを会得する訳ではない。

竹の音声は時々響くが、聞いた者たちが、ことごとく真理を証する訳ではない。

ただ、長い間、学に参入して修行を保持していた功徳によって、真理をわきまえようと勤労していた事によって縁を得て、真理を悟り、心を明らめたのである。

竹の音声が、単独で鋭利である訳ではないのである。

また、桃の花の色形が、特別に深い訳ではないのである。

竹の音声の響きは絶妙でも、自身だけでは鳴らず、瓦（かわら）などが当たる縁を待って音声が起きるのである。

桃の花の色形は美しいが、単独で花開く訳ではなく、春風を得て花開くのである。

仏道を学び修行している中での縁も、このようなのである。

真理を人々は十分に備えているが、真理を会得するのは多数の縁による物なのである。

人々は利発であるが、仏道を修行できるのは、多数の力による物なのである。

そのため、今、心を一つにして、志に専念して、学に参入して究めて、尋ね求めるべきである。

宝玉は、切磋琢磨によって、宝の器と成る。

人は、切磋琢磨によって、思いやり深い知者と成る。

宝玉には、最初から、光の輝きが有る訳ではない！

人は、初心者の時から、利発な訳ではない！

必ず、切磋琢磨するべきなのである。

自ら卑下して、仏道を学び修行するのを緩めるなかれ。

古代の先人は、「時間を空（むな）しく過ごすなかれ」と話している。

今、次のように、問おう。

「時間は、惜しむ事によって、留まってくれるか？　いいえ！

惜しんでも、留まってくれないか？　はい！」

次のように、知るべきである。

時間が空（むな）しく過ぎる訳ではなく、人が時間を空（むな）しく過ごしてしまうのである。

「人も、時間と同じく、いたずらに無駄に、過ごす事無く、切に仏道を学び修行しなさい」と言われているのである。

このように、心を同じくして学に参入して究めるべきである。

私、道元だけが独り取りあげても簡単な事ではないが、仏や祖師達の仏道修行の所作は、大概、皆、このようなのである。

釈迦牟尼仏による仏の知見の開示に従って真理を会得する者達は多かったが、阿難によって真理を悟る人達もいたのである。

新しい首座である懐奘は、「器ではない」と卑下するなかれ。

懐奘よ、「洞山の麻、三斤」という話を取りあげて、僧達に示して、話しなさい。

道元が前述のように話して座を下りた後、首座である懐奘は、再び太鼓を鳴らして、説法した。

懐奘にとって、興聖寺での最初の説法なのである。

懐奘は、その時、三十九歳であった。

第八十一章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

俗世の人は、次のように、話している。

誰もが、良い衣服を望む！

誰もが、貴重な味を貪る！

けれども、「真理を知りたい」と思う人は、山に入り、雲の中で眠り、寒さを忍耐し、飢えをも忍耐する。

これらを忍耐して真理を守ったので、先人には苦しみが有ったのである。

後世の人達は、これを聴いて、真理を慕い、「徳」、「善行」を仰ぐのである。

俗世の人ですら、賢明な人はなお、このようなのである。

仏道とは、このような物なのである！

古代の先人も皆、肉体が健康で強くはなかった。

釈迦牟尼仏が存命時の人達も、皆が上等な器の人ではなかった。

大小の律蔵によって、諸々の「比丘」、「出家者」について考えると、不可思議な不当な心を起こす者もいたのである。

けれども、後には、皆、「真理を会得して、阿羅漢と成った」という記述が見られる。

そのため、私達も、「卑賤で稚拙である」といえども、「悟りを求める事を思い立って心して、修行すれば、必ず、真理を会得できるのである」と知って、悟りを求める事を思い立って心するのである。

古代でも、皆、苦しみを忍耐し、寒さを忍耐して、憂いながら、修行したのである。

今の、仏道を学んでいる者達も、苦しくても、憂いても、ただ、強(し)いて、仏道を学び修行するべきなのである。

第八十二章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人が悟りを得られない理由は、ただ、古い見解に執着するからなのである。

本(もと)より、「誰々から教えられた」とも分からないが、「心とは思考や知覚なのである」と思ってしまい、「心とは草木なのである」と言っても信じないのである。

「仏とは、三十二相 八十種好と光明が有るはずである」と思ってしまって、「仏とは瓦礫である」と説いても驚くだけなのである。

このような古い見解への執着は、父が伝えた訳でもなく、母が教授した訳でもなく、ただ、道理が無いのに、自然と、長い間、他人の言葉によって信じて来てしまっている事なのである。

そのため、今でも、仏や祖師達の決定的な説なので、改めて、「心は草木なのである」と言われれば、「草木は心なのである」と知り、「仏は瓦礫なのである」と言われれば、「瓦礫は仏なのである」と信じて、本(もと)からの執着を改めて離れ去れば、真理を得られるのである。

古代の先人は、「太陽や、月は明らかであるが、浮雲が、これらを覆う。草むらで蘭が茂ろうとしても、秋風が、これを破る」と話している。

「貞観政要」では、この言葉を引用して、賢王と悪臣に例えている。

今であれば、次のように、話せるであろう。

「浮雲が覆っても長くはない。

秋風が破っても、また、花開くであろう。

臣下が悪くても、王の賢明さが強ければ、転じる事ができる」

今、仏道修行を保持するのも、このようにするべきである。

どんなに悪い心が起こっても、(仏道修行を)堅く守って長い間、保持すれば、浮雲も消えるし、秋風も止まるのは道理なのである。

第八十三章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

未だ学ぶべき物が有る人である僧は、初心者の時は、悟りを求める心が有っても無くても、経論と、仏経などをよくよく見て学ぶべきである。

私、道元は、この世のものの常の変化によって、初めて少々悟りを求める心を起こして、終に、ある寺を辞して、遍く諸方を訪ねて、仏道を修行した時に、建仁寺にいた際、正しい師に出会えず、善知識を持つ人がいなかったので、迷って邪悪な雑念を起こしてしまった。

教えてくれて導いてくれた師にも、「まず、学問の知識を先人の達人に等しくして、優れた人と成り、国家にも知られて、天下で名声を得なさい」と教えられてしまったので、仏経などを学ぶにも、「まず、この国の太古の賢者に等しく成ろう」と思ってしまい、「『大師』などにも等しく成ろう」と思ってしまった。

ある時、「高僧伝」、「続 高僧伝」などを見て、中国の高徳な僧や仏法修行者の様子を見てみると、当時の師の教えとは違っていた。

また、私、道元が起こしてしまったような心は、「皆、経論、伝記などで嫌い憎んでいる」と思ったので、ようやく道理を考えれば、名声について考えても、現在の下劣な人に「善い」と思われるよりも、ただ、太古の賢者や後世の善人に恥じ入るべきなのである。

「等しく成ろう」と思っても、この国の人よりも、インドや中国の先人の達道者や高徳の僧に恥じ入って「等しく成ろう」と思うべきなのである。

また、「諸々の天人や、(霊的な存在である)目に見えない者達や、諸々の仏や菩薩などに等しく成ろう」と思うべきなのである。

このような道理を会得して、後には、「この国の大師などは土や瓦(かわら)のような者どもなのである」と思えて、従来の心身を皆、改めたのである。

釈迦牟尼仏の一生の所作を見れば、「王位を捨てて、山や林に入り、仏道を成就した後も、一生、乞食した」という記述が見られる。

「律」には、「『家は(真の)家ではない』と知って、家を捨てて、出家するのである」等、記されている。

古代の先人は、「傲慢に成って、『上等な賢者に等しく成ろう』と思うなかれ。下賤に成って、『下賤な者どもに等しく成ろう』と思うなかれ」と話している。

この言葉の意味は、共に、傲慢な心を戒めているのである。

高位に成っても、へりくだる事を忘れるなかれ。

安楽に成っても、危うい事を忘れるなかれ。

今日、存命していても、「明日も存命できる」と思うなかれ。

死は、いたって近いし、危険は足下に有るのである。

第八十四章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

愚かな人は、無意味な事を思い、無意味な事を言うのである。

この寺に仕えている、ある老いた「尼」、「女性の出家者」がいるが、今、立場が卑しいのを恥じていて、ともすれば、他人に向かって「昔は高位の婦人であった」と語る。

たとえ、今の人々に、「そうであろう」と思われても、「何の役にも立たない」と思われる。

「全く、何の役にも立たない」と思われるのである。

人々には皆、「このような心が有るのではないか?」と思われるのである。

悟りを求める心の無さが、知られる。

このような心を改めて、少しは、人並みの人に似るべきなのである。

また、極めて、悟りを求める心が無い、ある入道がいる。

離れ去り難い知人であるので、「悟りを求める心が起こるように、仏、護法善神に祈って誓いなさい」と言いたく成る。

(しかし、言ってしまえば、)きっと、彼は立腹して、仲違いするであろう。

けれども、悟りを求める心を起こしていない人は、親しい友人でも、相互に、何の役にも立たないのである。

第八十五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、「三回、考えた後で、言いなさい」と話している。

この言葉の意味は、物を言おうとする時も、何事かを行おうとする時も、必ず、三度、考えた後に、言ったり行ったりするべきである、という事なのである。

昔の儒学者の考えでは、「三度、考えて、三度、共に、善いのであれば、言ったり行ったりしなさい」という事なのである。

中国の賢人などの言葉の意味では、「三度、考えなさい」とは、「何度も、考えなさい」という意味なのである。

言う前に考え、行う前に考え、考えるたびに必ず善いのであれば、言ったり行ったりするべきなのである。

僧も、必ず、このようであるべきなのである。

自分の思う事でも、言う事でも、悪い事が有るかもしれないので、まず、「仏道に適うか？　否か？」と顧み、「自身や他者のために利益が有るか？　否か？」と、よくよく考えて顧みた後で、善いのであれば、言ったり行ったりするべきなのである。

仏道修行者が、もし、このように心を守れば、一生、仏の心に背かないであろう。

私、道元が、昔、初めて建仁寺に入門した時は、僧達は、随分、身口意という三業を守って、「仏道のために、利益を他者にもたらすために、悪い事は言ったり行ったりしない」と各々、志していたのである。

栄西僧正の「徳」、「善行」の余韻の残存は、このようであったのである。

しかし、今は、そのような所作は無い。

今の、仏教を学んでいる者達は、次のように、知るべきである。

必ず、自身や他者のために、仏道のために、意味が有る事であれば、身を忘れても、言ったり行ったりするべきなのである。

無意味な事は、言ったり行ったりするなかれ。

高徳の長老が言ったり行ったりする時は、後進の人は、口を挟むなかれ。

これは、仏による制度なのである。

よくよく、これを思うべきである。

身を忘れて、真理を思う心は、俗世の人ですらなお、有るのである。

第八十六章

（道元は、次のように、話した。）

昔、趙の藺相如と言う者は、生まれた身分が低い人であったが、賢者であったので、趙王に仕えて、政治を行った。

藺相如は、ある時、趙王の使者として、「趙璧」と言う宝玉を持って、秦という国へ派遣された。

「『趙璧』を十五の城と交換しよう」と秦王が言ったので、趙王は、「趙璧」を藺相如に持たせて派遣したが、他の臣下が、

「これほどの宝玉を、藺相如のような下賤な人に持たせて派遣するのは、『趙という国に人材がいないような物なのである』と思われてしまう。他の臣下にとっての恥なのである。

後世の人々も、私達を非難するであろう。

途中で、この藺相如を殺して、『趙璧』を奪い取ろう」

と相談していたのを、その相談の時に参加していた人が密かに藺相如に教えて、

「今回の使者を辞退して、命を保護するべきである」

と話したら、藺相如は、

「私、藺相如は、あえて、辞退するべきではない。

『私、藺相如が、趙王の使者として、趙璧を持って、秦へ向かう途中、悪臣に殺された』と後世に伝えられて聞かれるのは、私、藺相如にとって喜びに成るのである。

私、藺相如の、身は死んでも、賢者という名声は残るであろう」

と話して、終に、向かった。

他の臣下も、この藺相如の言葉を聴いて、「私達は、この人を討伐するべきではない」と言って思いとどまった。

藺相如が、遂に、秦王にまみえて「趙璧」を秦王に与えたら、秦王は、十五の城を与えない様子を見せてしまった。

藺相如は、その時、計画をもって、秦王に、

「その『趙璧』には傷が有ります。

私、藺相如が、その傷を示しましょう」

と話して、「趙璧」を請い取った後、

「秦王の様子を見ると、十五の城を惜しむ様子が有りますね。

そのため、私、藺相如は、頭で、この『趙璧』を銅の柱に当てて、打ち割ってしまいましょう」

と話して、怒った眼で秦王を見て、銅の柱の下に近寄る様子を見せると、実に、秦王は呑まれてしまった。

秦王は、そのため、

「あなた、藺相如よ、『趙璧』を割るなかれ。

十五の城は与えます。

そのように、はからう間、あなた、藺相如が『趙璧』を持っていてください」

と話したので、藺相如は、密(ひそ)かに、他の人の手によって「趙璧」を本国へ返した。

その後、澠池と言う場所で、趙王と秦王が遊んだ時が有ったが、趙王は琵琶が上手であった。

秦王は、趙王に命令して、琵琶を弾かせた。

趙王は、藺相如にも相談せず、琵琶を弾いてしまった。

その時、藺相如は、趙王が秦王の命令に従ったのを怒って、「私、藺相如は、行って、秦王に簫という笛を吹かせましょう」と話して、秦王に、

「秦王は簫という笛が上手です。

趙王が『聞きたい』と願っています。

秦王よ、吹いてください」

と話したら、秦王は、それを辞退してしまった。

藺相如は、「秦王が、もし、辞退するのであれば、秦王を討伐します」と話した。

その時、秦の将軍が、剣を持って近寄った。

藺相如は、この秦の将軍をにらんだが、両目がほころび裂けた。

その秦の将軍が恐れて剣を抜かないで戻ったので、秦王は、遂に、簫という笛を吹いた、

と言われている。

また、後に、藺相如が大臣と成って政治を行(おこな)った時に、同僚の大臣が自身に任せてくれない事を嫉妬して「藺相如を討伐しよう」という様子を見せた

時に、藺相如は、あちこちに逃げ隠れて、わざと、朝廷に参った時も、会わず、恐れる様子を見せた。

その時、藺相如の家の人が、「あの大臣を討伐するのは簡単です。なぜ、恐れて隠れているのですか?」と話した。

藺相如は、次のように、話した。

「私、藺相如は、彼を恐れている訳ではないのです。

私、藺相如は、眼でにらんで秦の将軍をも後退させたし、秦から『趙璧』をも奪いました。

あの大臣を討伐するのは、言うまでも無く、簡単なのです。

ただし、戦争を起こして強者を集めるのは、敵国から防ぐためなのです。

今、同僚の大臣として国を守っている者達、二人が、もし、仲違いして、内戦を起こして、一人が死ねば、片方を欠いてしまいます。

そうすれば、隣国は、(隙と見て、)喜んで戦争を起こすでしょう。

そのため、『二人、共に、職務を全うして自国を守ろう』と思うので、彼と戦争を起こさないのです」

その大臣は、この藺相如の言葉を聞いて、恥じ入って、藺相如の所に来て礼拝して、二人、共に、和合して、自国を統治したのである。

藺相如が、身を忘れて、真理を知っていた様子とは、このような物なのである。

今、その藺相如の心のように、仏道を知るべきなのである。

むしろ逆に、道理が有って死ぬ事は有っても、道理が無いのに生きる事はなかれ。

第八十七章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

善悪は、定め難いのである。

世間の人々は、美しい良い衣服を着るのを「善い」と言ってしまう。

粗悪な衣服、糞掃衣を「悪い」と言ってしまう。

仏法では、粗悪な衣服、糞掃衣を「善い」とするし「清らかである」とするし、金銀や美しい良い衣服を「悪い」とするし「汚れている」とする。

一切の事に渡って、皆、このようなのである。

私、道元が少々韻声を整えたり文字を書くのに優れているのを、俗世の人々などは、「尋常ではない」と言う事が有る。

また、ある人々は、「出家して仏道を学び修行している身として、このような事を知ってしまっている」と悪口を言う人々もいる。

どちらを、善と定めて取得し、悪と定めて捨てるべきなのか？

ある文書には、「ほめて、善い物の範疇に有る物を善と言う。非難して、悪い物の範疇に置く物を悪と言う」と記されている。

また、「苦しみを受けるべきものを悪と言う。快楽をもたらすべきものを善と言う」と記されている。

このように、細かく区別して、真実の善を見て行い、真実の悪を見て捨てるべきなのである。

僧は、清浄の範疇より来ている者なので、他人の欲望を起こさないものを「善い」とし「清らかである」とするのである。

第八十八章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

世間の人々は、多分、次のように、話すであろう。

仏道を学び修行する志は有るが、末法の世なのである。

人々は、下劣なのである。

仏法の通りに修行するのは、忍耐できないであろう。

ただ、分相応に、安楽に付いて、「(仏教と)縁を結べたら」と思い、他の生で悟りを開けるのを期待するべきである。

今、前述の、この言葉は、全く、正しくないのである。

仏教で、正法と、像法と、末法を立てているのは、一時的な、一つの便宜的な方法なのである。

釈迦牟尼仏が存命時の「比丘」、「出家者」は必ずしも皆、優れていた訳ではない。

不可思議に、希有に、浅ましく、下等な才能である者もいたのである。

そのため、釈迦牟尼仏が、種々の戒の法などをもうけたのは、皆、悪い生者達や、下等な才能の者達のためなのである。

人々は皆、仏法の器なのである。

決して「器ではない」と思うなかれ。

仏教に従って修行すれば、必ず、証を得られるのである。
既に心が有るのであれば、善悪を区別するべきである。
手が有るし、足が有るので、合掌や歩行を欠く事は無いはずである。
そのため、仏法を修行するのに、器を選ぶべきではない。
人の生者達は皆、器量が有るのである。
他の動物などの生では、叶わないであろう。
仏道を学び修行する人は、ただ、明日を期待するなかれ。
今日、今だけでも、仏法に従って修行していくべきなのである。

第八十九章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

俗世の人は、「城が傾いてしまうのは、城内で、ささやく言葉が出て来る事による物なのである」と話している。

また、「家で意見の対立が有る時は針をも買う事ができない。家で意見の対立が無い時は黄金を買う金銭も有るのである」と話している。

俗世の人ですらなお、「家を保ち、城を守るのには、心を同じくしなければ、終には、滅びてしまう」と話しているのである。

まして、出家者は、一人の師に学んで、水と乳が和合するかのようにするべきである。

また、六和敬という法が有る。

各々の寮を構えてしまって、身を隔ててしまって、各々の心で仏道を学び修行する用心をするなかれ。

一つの船に乗って海を渡るような物なのである。

心を同じくして所作を同じくし、相互のために非を改める事によって、同じく仏道を学び修行するべきなのである。

これが、釈迦牟尼仏が存命時から行(おこな)って来ている所作なのである。

第九十章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

楊岐山の方会禅師が、初めて住持であった時、寺院が古くて破損して、僧達に煩いが有った際、「知事」を務めている僧が「修理しましょう」と話した。

方会は、次のように、話した。

寺の堂閣が破損していても、露地や樹の下よりは、優れているであろう。

一方が破損して水漏れしたら、他方の水漏れが無い場所に居て坐禅するべきである。

寺の建物の造りによって僧達が悟りを得られるのであれば、黄金や宝玉によってでも造るべきである。

悟りは、居所の良し悪しにはよらず、ただ、坐禅の功徳の多少に有るのである。

方会は、翌日、堂に上がって、次のように、話した。

初めて楊岐山(の寺)に住んだが、屋根や壁に隙間が有り、床は全て雪が散らばっている。

(寒さに、)うなじを縮めて、密かに嘆くが、しばらくして、翻って(考え直して、)古代人(の聖者の多く)は、(屋根や壁が無くて寒い)樹の下に居た事を思い出す。

仏道だけではない。

政治の道理も、また、このようなのである。

唐の太宗は、(新しい)宮殿を造らなかった。

龍牙は、次のように、話している。

仏道を学び修行するには、まず、清貧も学ぶべきである。

清貧を学んで、清貧に成った後で、まさに、真理に親しみ近づけるのである。

昔の釈迦牟尼仏から今に至るまで、真実に仏道を学び修行する人が「財宝に豊かである」とは見聞きした事が無いのである。

第九十一章

ある客の僧が、ある日、次のように、質問した。

近頃、世俗から逃れる方法では、各々、食費などの事を心構えして用意して、後の煩いが無いように支度します。

これは、些細な事ですが、仏道を学び修行する支援と成ります。

欠かしてしまえば、事を違えて乱してしまう事が出て来てしまいます。

今、道元様の御様子を見た所、一切、そのような支度が無く、ただ、天の神による運命に任せています。

もし、実に、そのようにしたら、後に事を違えて乱してしまう事が有りませんか？

どうでしょうか？

道元は、次のように、答えた。

仏教の物事には皆、先例の証拠が有るのである。

あえて、私的に、ねじ曲げている訳ではないのである。

西のインドから東の中国までの仏や祖師達は皆、このようにしているのである。

白毫を持つ釈迦牟尼仏による一つの分け前の幸福が尽きてしまう時期は無いのである。

私的に、生活の手段を講じるなかれ！

また、明日の事は「何々のように、するべきである」とも定め図り難いのである。

このようにするのは、仏や祖師達が皆、行(おこな)って来ている事であって、私的な歪曲は無いのである。

もし、食費などを欠いてしまって食べ物が尽きてしまったら、その時に臨んで、便宜的な方法をも巡らせるのである。

かねてから事前に、食費などを思うべきではないのである。

第九十二章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

次のように、伝え聞いた事が有る。

真実か否かは分からないが。

故人である持明院の中納言 入道が、ある時、秘蔵の太刀を盗まれた際、武士の中に犯人がいたので、他の武士が対処して返却させたら、持明院の中納言 入道は、

「これは、私の太刀ではない。

間違えてしまったのである」

と話して、太刀を盗んだ武士に返した。

「きっと、自分の太刀であるが、盗んだ武士の恥辱を思って、返したのである」と人々は皆、分かっていたが、その時は、何もせずに見過ごした。

このため、持明院の中納言 入道の子孫も栄えたのである。

俗世の人ですらなお、心が有る人は、このようにするのである。

まして、出家者は、必ず、このような心が有るべきである。

出家者は、本(もと)より、身に財宝が無いので、智慧と「功徳」、「善行」を宝とするのである。

他人が、悟りを求める心が無くて、間違っていたりする等の事を、直接に、顔に出して、「正しくない」と非難される状況に陥れるべきではなく、便宜的な方法によって、その人が立腹しないように言うべきなのである。

「乱暴で悪いものは、長くはない」と言われている。

たとえ、仏法によって非難するにしても、荒々しい言葉であるものは、長くはないのである。

矮小な人や、下等な器の人は、少しでも、他人の荒々しい言葉には、必ず、立腹して、「辱められた」と思ってしまうのである。

大いなる人や、上等な器の人には、似ていないのである。

大いなる人は、そうではないのである。

たとえ、打たれても、報復を考えない。

今、我が国には、矮小な人が多い。

慎むべきなのである。

正法眼蔵随聞記 第五巻

侍者 懐奘 編

第九十三章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

仏法のためなら、身の命を惜しむなかれ。

俗世の人ですらなお、道理のためなら、身の命を捨て、親族を顧みず、忠誠を尽くして、節操を守る。

このような人を「忠臣」とも言うし、「賢者」とも言うのである。

昔、漢の高祖が隣国と戦争する時、ある臣下の母が敵国にいた。

軍も「裏切る心が有るのではないか？」と疑った。

高祖も「彼は、もしかしたら、母を思って、敵国へ行ってしまう事も有るかもしれない。もし、そうされたら、軍は破れてしまうであろう」と危険視した。

ここで、彼の母も「我が子は、もしかしたら、私のせいで、我が国へ来てしまう事も、あるかもしれないのでは？」と思い、戒めて、

「私のせいで、戦時の忠誠を緩めるなかれ。

私が、もし、生きていたら、あなたには裏切る心が起きるかもしれない」

と話して、剣に身を投げて、死んでしまった。

その子は、本（もと）より、裏切る心が無かったが、その戦争で忠節を致す志が深かった、と言われている。

まして、僧が仏道を学ぶ時も、必ず、背く心が無い際に、実に、仏道に適うのである。

仏道では、慈悲や智慧が、本より、備わっている人達もいる。

たとえ、慈悲や智慧が無い人でも、学べば、得るのである。

ただ、心身を共に捨てて、仏法という大海へ心を向けて、仏法の教えに任せて、私的な歪曲をするなかれ。

第九十四章

（道元は、次のように、話した。）

また、漢の高祖の時代、ある賢臣は、

「政治の道理の乱れを直すのは、結ばれた縄をほどくような物なのである。急ぐべきではない。

よくよく、結び目を見て、ほどくべきである」

と話した。

仏道も、そのようなのである。

よくよく、道理を心得て、修行するべきなのである。

仏法を良く心得る人とは、必ず、強く悟りを求める心が有る人なのである。どんなに智慧が利発で聡明な人でも、悟りを求める心が無くて、自我への執着を離れる事ができ得ず、名声や利益をも捨てる事ができ得ない人は、悟りを求める心が有る者にも成らず、正しい道理も心得ないのである。

第九十五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、自身のために仏法を学ぶなかれ。

ただ、仏法のために仏法を学ぶべきなのである。

その先例とは、自身の心身を一つも残さず捨てて、仏法という大海に心を向けるのである。

その後、一切の善悪に関わる事無く、自分の心を存在させる事無く、行い難い忍耐し難い事でも、仏法のために、仕えて、強いて、それを行うべきなのである。

自分の心で、強いて行いたい事でも、仏法の道理ではない事は捨てるべきなのである。

決して、「仏道修行の功徳によって、代わりに善い結果を得よう」と思うなかれ。

ただ、一度、仏道に心を向けた以上は、再び自己を顧みず、仏法の掟に任せて修行していって、私的な歪曲をするなかれ。

先例の証拠は皆、このようなのである。

心で願い求めるものが無ければ、大いに安楽に成るのである。

世間の人でも、他人と交流せず、自分の家だけで成長した人は、心のままに振る舞ってしまい、自分の心を優先してしまい、人目を気にせず、他人の

心を兼ね合わせて考える事ができない人は、必ず、悪く成ってしまうのである。

仏道を学び修行する用心も、このようなのである。

僧達と交流し、師に従って、自我に執着した狭い物の見方を立てず、心を改めていけば、簡単に、悟りを求める心が有る者と成るのである。

仏道を学び修行するには、まず、清貧を学ぶべきなのである。

名声を捨て、利益を捨て、一切へつらう事無く、万事を投げ捨てれば、必ず、善い、悟りを求める心が有る人と成るのである。

宋の時代の中国で「善い僧である」と他人にも知られている人達は皆、貧しい人なのである。

衣服も破損していて、諸々の伝手も乏しいのである。

昔、天童山の書記であった道如 上座と言う人は、宰相の息子である。

けれども、親族からも遠く離れて、世俗の利益を貪らなかったので、衣服がやつれ破壊して目もあてられないほどであったが、「道徳」、「善行」が他人に知られて、名巒大寺の書記にも成ったのである。

私、道元は、ある時、道如 上座に、次のように、質問した。

「和尚様、道如 上座は、役人の子息で、富裕で高貴な一族の者です。どうして、身につけている物が皆、下等な品質の物で、貧しいのですか?」

道如 上座は、「僧に成ったからである」と答えた。

第九十六章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

俗世の人は、「宝は、よく、身を害する敵なのである。昔も、そういう事が有った。今も、そういう事が有る」と話している。

この言葉の意味とは、次のような話である。

昔、一人の俗世の人がいた。

その人は、一人の美女を妻としていた。

権勢が有る人が、ある時、この美女を欲した。

その美女の夫は、その美女を惜しんだ。

権勢が有る人は、終に、兵を出して、その美女の家を包囲した。

美女が奪い取られようとする時、その美女の夫は、「私は、あなたのせいで、命を失ってしまう」と話した。

その美女は、「それなら、私も、夫のために、命を失いましょう」と話して、高い建物から落ちて死んでしまった。

その後、その美女の夫は、討漏(うちも)らされて(生き延びて)、後に、物語にしたのである。

(前述の言葉は、その美女の夫の言葉なのである。)

第九十七章

道元は、また、次のように、話した。

昔、一人の賢人が、州吏として国政を行っていた。
その時、息子がいた。
息子は、役所の仕事で、父の所を辞して、父を礼拝してから去った。
その時、父は、一つの絹を与えた。

息子は、次のように、話した。
「あなた、父は、気高く誠実です。
この絹は、どこから、得たのでしょうか?」

父は、「余った給料からである」と話した。

息子は、去ると、皇帝に絹を献上して、その絹の由来を報告した。
皇帝は、とても、賢人が賢明である事に感心した。

息子は、次のように、話した。
「父は、名声を隠しています。
私は、父の名声を明らかに表しました。
実に、父の賢明さは優れているのです」

この話の意味は、「一つの絹を、わずかであっても、賢人は、利用しない(。私腹を肥やさない)」という事なのである、と聞こえる。

また、真実の賢人は、名声を隠す。

「(余った)給料からである(。自身の賢明さからではない)」と、(絹の支払いに)使用できた理由を言うのである。

俗世の人ですらなお、このようなのである。

まして、仏道を学び修行する僧は、自身への執着が有るなかれ。

また、真実の真理を好むのであれば、「悟りを求める心が有る者」という名声を隠すべきなのである。

第九十八章

道元は、また、次のように、話した。

ある仙人がいた。

有る人が、「どのようにして、仙人に成る事ができ得たのですか？」と質問した。

その仙人は、「『仙人に成ろう』と思うのであれば、仙人への道を好むべきである」と話した。

そのため、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、「仏や祖師への道によって仏や祖師に成ろう」と思うのであれば、仏や祖師への道を好むべきである。

第九十九章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

昔、ある国王がいた。

その国王は、国を統治した後に、諸々の臣下に「私は良く国を統治している。私は賢王であろうか？」と質問した。

諸々の臣下は皆、「王は、とても良く統治しています。偉大な賢王です」と話した。

その時、ある臣下がいて、「王は、賢王ではない」と話した。

国王は、「どのような理由からか？」と話した。

その臣下は、「国を統治後、弟に与えず、息子に与えてしまった」と話した。

(その臣下の言葉は)国王の心に適(かな)わなかったので、追い立て(て、その臣下を追放し)た後、また別の、ある臣下に「私は、思いやり深い知者であろうか？」と質問した。

その別の臣下は、「大いに思いやり深い知者です」と話した。

国王は、「どのような理由からか？」と話した。

その別の臣下は、次のように、話した。

「思いやり深い賢王には、必ず、忠臣がいます。

忠臣は正直に話します。

前の(追放された)臣下は大いに正直に話しました。

(その追放された臣下は)忠臣です。

思いやり深い賢王でなければ、獲得できていなかったでしょう」

国王は、この言葉に感じる所が有って、すぐに、前の(追放した)臣下を呼び寄せて戻したのである。

第百章

道元は、また、次のように、話した。

秦の始皇帝の時、（始皇帝は、）「皇太子の花園を広げよう」と話した。

臣下は、次のように、話した。

「最も良い考えですね。

花園を広くして、鳥や獣が多く集まれば、鳥や獣によって隣国の軍を防ぐ事ができますね」

この言葉によって、その件は止まった。

また、（始皇帝は、）「宮殿を造り、柱に漆を塗ろう」と話した。

臣下は、次のように、話した。

「最もですね。

柱を塗れば、（柱を鑑賞して、）敵は立ち止まってくれるでしょう」

この言葉によって、その件も止まった。

儒教の心づかいでは、このように、巧みな言葉によって、悪事を制止し、善行を勧めるのである。

僧が、他人を教化する心づかいの巧みさも、そのような心づかいが有るべきなのである。

第百一章

ある僧が、ある日、次のように、質問した。

知者であるが、悟りを求める心が無い人と、
無知であるが、悟りを求める心が有る人の、
最初から最後までの様子は、どのようなのでしょうか？

道元は、次のように、答えた。

無知であるが、悟りを求める心が有る人は、終には、後退してしまう事が多い。

智慧が有る人は、悟りを求める心が無くても、終には、悟りを求める心を起こすのである。

現在でも、現の証拠が多い。

そのため、まず、悟りを求める心の有無を問わず、仏道を学び修行する事につとめるべきなのである。

仏道を学ぶのであれば、ただ、清貧であるべきである。

仏教内外の書籍を見ると、貧しくて居所も無く、あるいは、滄浪の水に浮かび(漁をしたり)、あるいは、首陽の山に隠れ、あるいは、樹の下や露地で端正に坐禅し、あるいは、墓場や深い山に庵(いおり)を造って住む人もいる。

また、富んでいるし高貴で、財産が多く、朱色の漆を塗って黄金や宝玉を磨いて宮殿などを造る人もいる。

両方、共に、経典や書籍に載っている。

けれども、後世の人達が勧めるのは、皆、清貧で財産が無いのを根本としている。

非難して罪業を戒める時には、富んで財産が多い者を「傲慢な者」と言って非難するのである。

第百二章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

出家者は、必ず、他人から布施を受けたら、喜ぶなかれ。
また、受け取らない事なかれ。

故人である僧正は、次のように、話した。

他人からの捧げものを得て、喜ぶのは、仏による制度に違反してしまう。
喜ばないのは、布施をした人の心に違反してしまう。

この先例、用心は、「私に捧げている訳ではなく、仏や仏法や僧に捧げているのである」という事なのである。

このため、布施への返事では、「この捧げものは、仏や仏法や僧が、必ず、受け取るでしょう」と話すべきなのである。

第百三章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、「王者の力は牛よりも優れている。けれども、牛と競争しない」と話している。

今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、「自分の智慧や才能や知識は他人よりも優れている」と思っていても、他人と論争するのを好むなかれ。

また、悪口によって他人を叱ったり、怒った目で他人を見るなかれ。

今の人々は、多くが、財産を与えて恩を施しても、怒りを現し、悪口によって叱るので、必ず、反逆の心を(他人の心に)引き起こしてしまうのである。

昔、真浄文和尚は、僧達に示して、次のように、話した。

私、真浄文和尚は、昔、雲峰と縁を結んで、仏道を学び修行していた時、雲峰が同期の僧と仏法について論じてしまい、衆寮で互いに大きな声で論じてしまい、終には、互いに悪口にまで及んでしまって喧嘩してしまった。

論争をやめると、雲峰は、私、真浄文和尚に、次のように、話した。

私、雲峰と、あなた、真浄文和尚は、心を同じくする同期なのである。

縁も深い。

なぜ、私、雲峰が他人と論争している時に、口を挟んで味方してくれなかったのか？

私、真浄文和尚は、その時、会釈して、恐縮しただけであったのである。

その後、彼、雲峰も一人の善知識を持つ人に成り、私、真浄文和尚も今、住持に成っている。

昔の事を考えると、雲峰の議論は、結局、何の役にも立たないのである。

まして、論争は、必ず、正しくない事なのである。

「論争して、何の役に立つのか？　いいえ！」と思ったので、私、真浄文和尚は、無言で止めたのである。

今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、最も、このように思うべきである。

仏道を学び修行する勤労の志が有れば、時間を惜しんで仏道を学び修行するべきなのである。

どうして、暇（ひま）が有って、他人と論争するべきである、というのか？　いいえ！

（論争は、）結局、自身と他者にとって、共に、無益なのである。

仏法ですら、そうなのである。

まして、世間の事でも、無益の論争をするなかれ！

王者の力は牛よりも優れているが、牛と競争しない。

「私は、法を知っていて、ある人よりも優れている」と思っても、議論して、他人の時間を盗んで非難するなかれ。

もし、真実の、仏道を学び修行する人がいて、仏法について質問して来たら、仏法を惜しむなかれ。

その人のために、開示するべきである。

けれども、三度、質問されたら、一度だけ答えるべきである。

口数が多かったり、無駄話をしたりするなかれ。

私、道元も、この真浄文 和尚の話を見た後は、「このような罪は自身にも有る。この話は私、道元をも諫めているのである」と思ったので、以後、終に、他人と仏法について論争しなかったのである。

第百四章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、多くが、「時間を空(むな)しく過ごすなかれ」と話している。

また、「時間をいたずらに無駄に過ごすなかれ」と話している。

今、仏道を学び修行する人は、時間を惜しむべきである。

露(つゆ)のような命は消えやすいし、時間は速やかに移り変わるので、短時間、存命中の間に、他の事に関わるなかれ。

ただ、仏道を学ぶべきである。

今の人々は、

あるいは、「父母の恩は捨て難い」と話すし、

あるいは、「君主の命令には背(そむ)き難い」と話すし、

あるいは、「妻子や眷属から離れ難い」と話すし、

あるいは、「眷属などの命を活かせるか、分かり難い」と話すし、

あるいは、「世俗の人々は非難するであろう」と話すし、

あるいは、「貧しくて道具を整え難い」と話すし、

あるいは、「器ではないので、仏道を学び修行するのに耐えられない」と話す。

このように、理解や感情を巡らせて、君主や父母から離れる事ができ得ず、妻子や眷属を捨てる事ができ得ず、世俗の人々の感情に従って、財宝を貪っ

ている間に、一生を空(むな)しく過ごしてしまい、まさしく、命が終わる時に当たって、後悔するであろう。

静かに坐禅して道理を思案して、速やかに、「悟りを求める心を起こそう」と決意するべきである。

君主も父母も、自分に悟りを与える事はできない。

妻子も眷属も、自分の苦しみを救う事はできない。

財宝も、自分の輪廻転生を断ち切る事はできない。

世俗の人々も、自分を助ける事はできない。

「器ではない」と言って、修行しなければ、いずれの劫でも、真理を会得できない！

ただ、万事を捨てて、専念して、仏道を学び修行するべきである。

「後の時間が有る」と思うなかれ。

第百五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行するには、自我を離れるべきである。

たとえ、幾千の仏経や、幾万の経論を学んで会得しても、自身への執着を離れなければ、終に、「魔」、「仏敵」の穴に落ちてしまうであろう。

古代の先人は、「もし、仏法の心身が無ければ、仏や祖師に成れない！」と話している。

「自我を離れる」とは、自身の心身を仏法という大海に投げ捨てて、苦しくても、心配でも、仏法に従って修行する事なのである。

「もし、乞食をしたら、他人は、それを『悪い』とか『醜い』と思うであろう」と思ってしまう間は、どのようにしても、仏法に入門でき得ないのである。

世俗の人々の感情や見解を全て忘れて、ただ、道理に任せて、仏道を学び修行するべきである。

自身の器量を顧みて、「仏法に適(かな)わない」等と思ってしまうのも、自身への執着を持っているからなのである。

人目を顧みて、人々の感情を恐れてしまう事は、自身への執着の本(もと)と成ってしまうのである。

ただ、仏法を学ぶべきである。

世俗の人々の感情に従うなかれ。

第百六章

懐奘が、ある日、次のように、質問した。

寺で、勤勉に学ぶ日常の所作とは、どのような物なのでしょうか？

道元は、示して、次のように、話した。

坐禅に打ち込むのに専念する事なのである。

あるいは、高い建物の上部で、あるいは、建物の下で、「定」を営み、他人と交流して雑談せず、耳が聞こえない者であるかのように、話せない者であるかのようにして、常に、独りで坐禅するのを好むべきなのである。

第百七章

道元は、ある日、説法のついでに、僧達に示して、次のように、話した。

泉大道は、「風に向かって坐禅し、太陽に向かって眠る。時の人が錦を着ているよりも優れている」と話している。

この言葉は、古代の先人の言葉であるが、少し疑問が有る。

「時の人」とは、世間の利益を貪る人の事を言っているのか？

もし、そうであるならば、比較してしまうのは、最も下らない。

言うまでもない！

もしくは、仏道を学び修行する人の事を言っているのか？

そうならば、なぜ、「錦を着ているよりも優れている」と言ってしまっているのか？

この言葉の真意を察すると、なお、錦を重んじてしまう心が有るように聞こえてしまう。

聖人は、そうではない。

黄金も宝玉も、瓦礫も、等しく、執着する事が無い。

そのため、釈迦牟尼仏は、「牧牛女」、「牛飼いの娘スジャータ」から乳粥を得て食べたし、馬麦を得て食べたのである。

いずれも、等しくしたのである。

ものに軽重は無い。

人には、浅い深いが有るのである。

今、黄金や宝玉を他人に与えようとすれば、(僧は)「重い」として受け取らない。

また、木や石などは「軽い」として受け取って愛着する。

黄金や宝玉は、本(もと)より、土の中から得たのである。

木や石も、大地より生じたのである。

どうして、一方を「重い」として受け取らず、他方を「軽い」として愛着するのか？

その心を思案すると、貴重な物を得てしまっては、執着してしまう心が有るからではないか？

貴重ではない物を得ても、愛着してしまう心が有れば、罪は同じなのである。

これは、未だ学ぶべき物が有る人である僧が用心するべき事なのである。

第百八章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

道元の亡き師である明全和尚が宋の時代の中国に入国しようとした時、明全の師である比叡山の明融阿闍梨が重病に成ってしまい、床に伏せって死にそうに成った。

明融は、その時、次のように、話した。

私、明融は、老いて病気に成ってしまい、死が近くに有る。

今回は、一時、中国への入国を思いとどまって、私、明融の病気を看護して、死を弔って、そうして死後、その本意を遂げるべきである。

明全は、その時、弟子達や、縁が有る僧達などを集めて相談して、次のように、話した。

私、明全は、幼少の時、両親の家を出て以降、明融による養育を受けて、今まで成長できたのである。

その養育の恩は、最も重いのである。

また、世俗を出ている仏法や、大小の、仮の便宜的な方法や真実の仏教の経文や、因果をわきまえ、善悪を知って、同期を超越して、名声を得た事や、

仏法の道理を知って、今、中国へ入国して仏法を探求する志を起こした事までも、全て、明融の恩による物なのである。

明融は、今年、老いが極まってしまい、重病に成ってしまい、床に伏せている。

余命は、あまり無いであろう。

(中国へ行ってしまったら、生きて)再会するのは期待できないであろう。

そのため、明融は、無理に、引き留めたのであろう。

師である明融の命令にも背(そむ)くのは難しい。

今、身の命を顧みず、中国に入国して、仏法を探求するのも、菩薩の大いなる慈悲で利益を生者達にもたらすためなのである。

師である明融の命令に背(そむ)いて中国へ行く道理は有るのか？　否か？

各々、思う所を述べて欲しい。

諸々の弟子や、諸々の人々は皆、次のように、話した。

今年の中国への入国は、思いとどまるべきです。

師である明融の老病死は、極まってしまっています。

死は決定しているでしょう。

今年だけ思いとどまって、来年、中国に入国すれば、師である明融の命令にも背(そむ)かないし、重い恩も忘れずに済みます。

今、一年や半年、中国への入国が遅れても、何の支障が有るでしょうか？

明融と明全、師弟の本意は矛盾しません。

中国に入国する本意も思い通りに成るでしょう。

私、道元は、その時、後進の者であったが、次のように、話した。

仏法の悟りは、今は、「これで良いであろう」と思うのであれば、思いとどまるべきです。

明全は、次のように、話した。

その通りである。

仏法の修行は、「これで良いであろう」と思う。

終始、今のままであれば、「世俗を出て離れて、真理を会得できるであろう」と思う。

私、道元は、次のように、話した。

そうならば、思いとどまるべきです。

このように各々が意見を述べ終わると、明全は、

「各々の意見は、どれも、皆、思いとどまるべきである道理ばかりであった。

私、明全の考えは、そうではない。

今回、思いとどまっても、死ぬのが決定している人であれば、思いとどまる事によって命を保持できる訳でもない。

また、私、明全が思いとどまって看病、介護したとて、苦痛も止められないであろう。

また、最期に、私、明全が、明融に接して勧めても、明融が生死(、輪廻転生)を離れる事ができる道理が有る訳でもない。

ただ、一時、命令に従って、明融の心を慰める事ができるだけなのである。

世俗を出て離れて真理を会得するためには、一切、何の役にも立たないのである。

誤って、私、明全の仏法を探求する志を妨げてしまえば、罪業の原因とも成ってしまうであろう。

もし、中国に入国して仏法を探求する志を遂げて、少しでも悟りを開けば、一人の煩悩が有る迷っている感情が有る人に背(そむ)いてしまっても、多数の人が真理を会得する原因と成る事ができるであろう。

その功徳が、もし、優れていれば、明融の恩にも報いる事ができるであろう。

たとえ、航海の途中で死んでしまって、本意を遂げられなくても、仏法を探求する志によって死ねば、生から生へ願いは消え尽きない(で記憶している)であろう。

玄懐柅三蔵の行跡を思うべきである。

一人のために、失いやすい時間を空(むな)しく過ごしてしまうのは、仏の心に適(かな)わないであろう。

そのため、今回の中国への入国は、完全に、思い切って、決心し終わっている」

と話して、終に、中国へ入国した。

明全には真実の、悟りを求める心が有るのは、このような道理なのである。

そのため、今の、未だ学ぶべき物が有る人である僧も、あるいは、「父母のため」とか、あるいは、「師匠のため」と言って、無意味な事を行(おこな)ってしまって、いたずらに無駄に、時間を失ってしまって、諸々の道よりも優れている仏道をさしおいてしまって、空(むな)しく時間を過ごすなかれ。

懐奘は、その時、次のように、質問した。

真実の、仏法の探求のためには、人為的な父母や師匠や恩愛による障害と成ってしまう縁を完全に(泣く泣く)捨てるべきである道理は、「実に、その通りである」と思います。

ただ、父母や師匠の恩愛などのほうは完全に(泣く泣く)捨ててしまうのに、菩薩の修行をしている時は、自身の利益をさしおいて、利益を他者にもたらすのを優先とするのでしょうか？

老いた師が重病で他人による助けも無く、幸い、私、一人だけが介護にあたっているのに、自身の修行だけを思って、老いた師を助けなければ、菩薩の修行に背(そむ)いてしまうのに似ていませんか？

「大士」、「菩薩」の善行を嫌っている訳ではありません。

縁に従い、折りに触れて、仏法を学ぶべきではないでしょうか？

もし、このような道理であれば、修行を止めて、助けるべきではないでしょうか？

どうして、独りでの仏法の探求だけを思って、老いた病気の師を助けないのでしょうか？

どうでしょうか？

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

利益を他者にもたらす修行も、自身に利益をもたらす修行も、ただ、劣っているほうを捨てて、優れているほうを取れば、「大士」、「菩薩」の善行と成るであろう。

「老いや病気を助けよう」と言って、「水菽の孝をする」、「貧しくても親孝行をする」のは、ただ、今の生だけの、一時の妄りな愛着や、迷っている感情が有る者の喜びでしかないのである。

迷っている感情が有る者達の人為的な物に背(そむ)いて、「無為」、「消滅しない不変の絶対の真理」の仏道を学ぶのは、たとえ、遺恨は残っても、世俗を出る優れた縁と成るであろう。

これを思いなさい。

これを思いなさい。

第百九章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

世間の人々は、多くが、「私は、師の言葉を聞いても、自分の心に適わないのです(。心に響きません)」と話している。

この言葉は、正しくないのである。

師の言葉の意味が、どういう事なのか、分からないのか？

もしくは、仏教などの道理が、自分の心に反していて、「正しくない」と思ってしまうのか？

このような人は、全くの凡庸な愚者なのである。

または、師が話している言葉が、自分の心に適わないのか？（心に響かないのか？）

もし、そうであるならば、どうして、本より、師に質問したのか？

また、日頃の感情や見解によって、そう話してしまうのか？

もし、そうであるならば、それは、「最初」からの妄りな思いなのである。

仏道を学び修行する用心とは、自分の心に反しても、師の言葉が仏教の言葉や道理であるならば、完全に、その言葉に従って、本からの自身に執着した狭い物の見方を捨てて、改めていく事なのである。

このような心が、仏道を学び修行する第一の先例なのである。

私、道元の昔の同期の僧の中に、自身と自身の見解に執着して、善知識を持つ人々を訪ねている者がいた。

その僧は、自分の心に反する言葉を「心から納得でき得ない」と言ってしまって、自身と自身の見解に適う言葉に執着してしまって、一生を空しく過ごしてしまって、仏法を会得できなかった。

私、道元は、その僧を見て、智慧を発揮して、「仏道を学び修行するには、その僧のようにしてはいけない」と知った。

このように思い知って、師の言葉に従って、完全に道理を会得した後、経を読んでいると、ある経に「『仏法を学ぼう』と思うならば、過去や現在や未来の心を持ち続けるなかれ」と記されているのを見た。

実に、「以前の諸々の思いや古い見解を記憶して保持せず、次第に、改めていくべきなのである」という事を知った。

ある書物には、「忠告や助言は、耳に逆らってしまって、聞く耳を持って聞き入れ難い」と記されている。

この言葉の意味は、自分のための真心が有る言葉は、必ず、耳に反してしまって、聞く耳を持って聞き入れ難いのである。

耳に反してしまって、聞く耳を持って聞き入れ難くても、強いて従って修行すれば、結果、(真の)利益が有るのである。

第百十章

道元は、ある日、雑談のついでに、僧達に示して、次のように、話した。

人の心は、本(もと)より、善だけや悪だけではない。

善悪は、繋がりに従って、起こるのである。

例えば、人が、悟りを求める事を思い立って心して、山や林に入る時は、林の下は「善い」が、人々の間は「悪い」と思える。

また、心が退屈して、山や林を出てしまう時は、山や林は「悪い」と思ってしまう。

このため、決定的に、心には決まった形が無いのである。

繋がりによって、どうにでも成ってしまうのである。

そのため、善い縁に出会えば、心は善く成るし、悪い縁に近づいてしまえば、心は悪く成ってしまうのである。

「自分の心は、本(もと)より、悪だけである」と思うなかれ。

ただ、善い縁だけに従うべきなのである。

第百十一章

道元は、また、次のように、話した。

「人の心は、決定的に、他人の言葉に従ってしまいやすい」と思われる。

「大論」、「大智度論」には、次のように、記されている。

例えば、愚かな人が手に「摩尼珠」、「宝玉」を持っているような物なのである。

他人が、それを見て「あなたは下劣である。(従者に持たせるのではなく、)自ら手に物を持っている」と話しているのを聞いて、「宝玉は惜しいが、評判は影響が深刻である。自分は下劣に成りたくない」と思ってしまう。

思い悩んで、名声に心惹かれて、他人の言葉によって、宝玉を置いてしまい、「他人に持たせよう」と思っている間に、終に、宝玉を失ってしまった。

人の心は、このような物なのである。

ある程度、「ある言葉は自分にとって善い」と思えても、評判に妨げられて、その言葉に従わない人もいるのである。

また、ある程度、「自分にとって悪い事である」と思いながらも、名声のために、まず、従ってしまう人もいるのである。

善にも、悪にも、従ってしまう時は、心は、善悪の間で揺れ動いてしまうのである。

そのため、どんなに、本(もと)から、悪い心であっても、善知識を持つ人々に従い、善良な人に慣れ親しめば、自然に、心も善く成るのである。

悪人に近づいてしまえば、自分でも心で最初は「悪い」と思っていても、終に、悪人の心に従ってしまって慣れ親しんでしまうのに応じて、知らずに、やがて、実に、心は悪く成ってしまうのである。

また、人の心は、「絶対に他人に物を与えない」と思っていても、他人が強(し)いて要請すれば、「嫌だなぁ」と思っても、嫌々ながら、与えてしまうのである。

また、「絶対に与えよう」と思っていても、機会が無くて、時間が過ぎてしまえば、その気持ちが無くなってしまう事も有るのである。

そのため、未だ学ぶべき物が有る人である僧は、たとえ、悟りを求める心が無くても、善良な人達に近づき、善い縁に出会ったら同じ事でも善い物事を何度も見聞きするべきなのである。

「この言葉は一度、聞いた事が有るので、重複して聞くべきではない」と思うなかれ。

悟りを求める心を一度、起こした人は、同じ事でも、聞くたびに、心が磨かれて、ますます、精進するのである。

また、悟りを求める心が無い人も、一度目や二度目は心惹かれなくても、度々聞けば、霧(きり)や露(つゆ)の中を歩いて行った時に、いつ濡れたか分からなくても、

自然に、衣服が潤(うるお)うように、善良な人の言葉を何度も聞けば、自然と、恥じ入る心も起こるし、真実の、悟りを求める心も起こるのである。

そのため、知っていても更に、仏教を何度も見聞きするべきなのである。

師の言葉も、聞いた事が有っても更に、重複して聞くべきなのである。

(そうすれば、)ますます、心が奥深く成っていくのである。

仏道を学び修行する障害と成るかもしれない物事に、複数回、近づくなかれ。

善知識を持つ人々には、苦しくても、心細くても、近づいて、仏道修行するべきなのである。

第百十二章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

大慧 禅師は、ある時、尻に腫れ物が出来て、医師が、それを見て「一大事な物である」と話した。

大慧 禅師は、次のように、話した。

「一大事な物であるならば、死んでしまうのか？　否か？」

医師は、次のように、話した。

「ほぼ死んでしまう危険性が有ります」

大慧 禅師は、

「もし、死んでしまうのであれば、(逆に、)ますます、坐禅するべきである」

と話して、強(し)いて坐禅していたら、その腫れ物が膿(う)んで潰(つぶ)れて、命に別状は無かった。

古代の先人の心は、このような物であったのである。

病気に成ったら、(逆に、)ますます、坐禅したのである。

今の人達は、病気が無いのに、坐禅を緩めるなかれ。

「病気は、心に従って、好転したりするかなぁ」と思われる。

世間でも、しゃっくりをしている人に、嘘で辛い事を話したら、その人が「辛い事である」と思い、心に響いて、意見を陳述しようとしている時には、しゃっくりを忘れていて、しゃっくりが止まった、という話が有る。

私、道元も、昔、宋の時代の中国に入国する時、船の中で、お腹を壊した際、都合の悪い風が吹いて船中の人々が騒いだ所、病んでいるのを忘れて、治った。

このため、「仏道を学び修行するのに勤労して、他の事を忘れれば、病気も起こり難い」と思われる。

第百十三章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

俗世の民間のことわざでは、「話す事ができないかのようにし、耳が聞こえないかのようにしなければ、一家の主人には成れない」と言われている。

この言葉の意味は、(家族や)他人の悪い所を言わず、(家族や)他人の悪口を聞かなければ、自分の仕事に成功する、という事なのである。

このような人を、家族は、一家の偉大な人とするのである。

これは民間のことわざではあるが、これを取り入れて、僧の日常の所作に利用するべきである。

他人からの悪口に取り合わず、他人からの恨みに取り合わず、他人の善悪を言わなければ、仏道修行できるのである！

骨身に染みるまで徹底している者は、このように、でき得るのである。

第百十四章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

大慧禅師は、次のように、話している。

仏道を学び修行するには、ある人が幾千、幾万の金銭の負債を負っているが一銭も持っていないのに返済を求められて責められている時の心のように、修行するべきである。

もし、このような心が有れば、真理を会得するのは、簡単なのである。

「信心銘」には、次のように、記されている。

至高の仏道は、難しくはない(。簡単なのである)。

ただ、(仏道は、)選り好みを嫌うのである。

選り好みする心さえ捨てれば、直に、悟りを会得できるのである。

「選り好みする心を捨てる」とは、自我を離れる事なのである。

「仏道を修行する代わりに利益を得るために、仏法を学ぼう」と思うなかれ。

ただ、仏法のために、仏法を修行するべきなのである。

たとえ、幾千の仏経や、幾万の経論を学ぶ事ができ得て、坐禅で床を破るほどでも、このような心が無ければ、仏や祖師達の真理を会得できないのである。

ただ、心身を捨てて仏法の中に置いて、他者である善知識を持つ者達に従って、古い見解を無くせば、直に、悟りを会得できるのである。

第百十五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、「所有している、『庫司』を務めている僧が管理している財産や穀物を、因果を知っている『知事』を務めている僧に分担させて付属し、更に司る僧達に分担させ、更に部局を連ねて用意して司らせる」と話している。

この言葉の意味は、寺院の主人は、寺院の大小の事に全く関わらず、専念して工夫して坐禅に打ち込んで、僧達を(悟りに)勧誘するべきである、という事なのである。

また、(古代の先人は、)次のように、話している。

「良い田畑が広大であるよりも、中途半端でも芸を身につけている事には及ばないのである。
恩を施しても、報いてもらえる事を望まない。
他人に与えて、後悔するなかれ。
鼻を守るように、口を守れば、幾万の災難も訪れない」

「善行が気高く多ければ、他人は自然と、その人を重んじる。

才能が多ければ、他人は自然と、帰依して降伏するのである。
深く耕して、浅く植えても、なお、天災は有るのである(。仕方がない)。
自身に利益をもたらす代わりに他人に損害を与えると、悪い果報が有る！」

仏道を学び修行する人は、「話頭」、「公案」、「修行者の手がかりとしての仏や祖師達の言動」を見る時は、(見る)目を近づけて、力を尽くして、よくよく見るべきである。

第百十六章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、「百尺の竿の先頭で、更に一歩、歩みを進めるべきである」と話している。

この言葉の意味は、十丈の竿の先に上って、手足を離して、心身を捨てるようにするべきである、という事なのである。

これに関して、重々承知して欲しい事が有る。

今の僧は、世俗を逃れて出家した僧に似ているが、その日常の所作を考えると、実に、(真の)出家者が世俗を逃れた日常の所作ではないのである。

いわゆる、出家とは、第一に、まず、自我や名声や利益から離れるべきなのである。

これらから離れなければ、頭が燃えているのを払うように仏道修行しても、爪先で立つほど望んで精進しても、ただ、道理が無い勤労にしか過ぎず、俗世を出て離れている事には成らないのである。

宋の時代の中国でも、離れ難い恩愛を(泣く泣く)離れ、捨て難い世俗の財産を捨てて、寺に交ざり、祖師達の道場に居場所を得ている人もいるが、詳細に、このような先例を知らないで修行してしまうので、真理を悟れず、心

を明らめる事ができず、いたずらに無駄に、一生を空(むな)しく過ごしてしまう者もいるのである。

なぜなら、人の心も、初めは、悟りを求める心を起こして、僧に成り、善知識を持つ人々に従っても、「仏と成ったり、祖師と成ったりしよう」と思わないで、「身分の高貴さや、自分の寺の高貴さを、在家信者にも知られ、親類や眷属にも言い聞かせ、他人に敬礼されて捧げものを捧げてもらおう」と思ってしまい、あまつさえ、「僧達は皆、善くないが、私、独りだけ、悟りを求める心が有り、善人である事を便宜的な方法によって言い聞かせ、思い知らせよう」とする様子を見せてしまう場合も有るのである。

これらのような人は、取りあげて話すまでも無い矮小な者ども、五人の一闡提などのような悪い「比丘」、「出家者」のような者どもなのである。

必ず地獄に堕ちてしまう心ばえなのである。

このような者どもを、物も知らない完全に無知な在家信者は、「悟りを求める心が有る者、高貴な人である」と思ってしまうのである。

このような者どもよりも少しはましで、在家信者の財産を貪らず、父母や妻子を(泣く泣く)捨て尽くして、寺に交ざって仏道修行する者もいるが、本性が怠惰な者は、ありのままに怠けるのは恥ずかしいので、長老、首座などが見ている時は身構えて仏道修行するふりをするが、見ていない時は、折りに触れて、怠けて、いたずらに無駄に日々を送る者もいる。

このような者どもは、在家信者で、このように善くない者よりはましだが、なお、自我や名声や利益を捨てる事ができ得ていないのである。

また、総じて、師の心も兼ね合わせて考えず、首座や、兄弟が見ていても見ていなくても顧みず、常に「仏道は他人のためではなく自身のための物なのである」と思ってしまって、「自分のような心身を持つ者こそ、仏と成っ

たり、祖師と成ったりするであろう」と思ってしまって、実に、勤めて営んでしまう人もいる。

このような者どもは、前述の人々よりは、「真実の、悟りを求める心が有る者ではないか？」と思えてしまうが、このような者どもも、なお、「自身を善くしよう」と思ってしまって修行しているので、なお、未だ自我を離れていないのである。

また、「諸々の仏や菩薩に自分の善行を喜んでもらおう」と思ってしまい、「仏という結果、覚を成就しよう」と思ってしまう人も、「自分だけが利益を得よう」という欲望や、名声や利益への欲望の心を、なお、捨てる事ができ得ていないのである。

前述の者どもは、未だ、百尺の竿の先頭から離れず、取りついているような物なのである。

ただ、心身を仏法に投げ捨てて、更に、真理を悟ったり、仏法を会得したりする事までをも望む事無く、修行する人を「汚染されていない仏道修行者」と言うのである。

「仏がいる所でも留まらず、仏がいない所でも急いで走り過ぎる」と言う言葉の意味は、このような心を持つ事なのである。

第百十七章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

衣服や食糧の事を、かねてから事前に、思うなかれ。

もし、食べ物が無くて料理する火の煙が絶えてしまったら、その時に臨んで、乞食するのである。

「あの人の所に乞食しよう」等と思っておいてしまうのも、物を蓄えてしまう「邪命食」なのである。

僧のうち、雲のように決まった住所も無く、水のように流れ歩いて行って、頼る所も無い僧こそ、「真の僧」と言うのである。

たとえ、僧衣や器以外に一つも物を持たなくても、一人でも在家信者を頼ってしまったり、一人でも親族を頼ってしまったりするのは、自身も他者も共に縛られてしまい、「不浄食」なのである。

このような「不浄食」などによって、養い保持している心身では、「諸仏の清浄な大いなる仏法を悟ろう」と思っても、とても叶わないのである。

例えば、藍で染めた物は青く成るように、蘗（きはだ）で染めた物は黄色く成るように、「邪命食」による心身で仏法に臨んでしまうのは、沙（すな）を圧縮して油を求めるように、不可能なのである。

ただ、その時に臨んでから、兎にも角にも、道理に適（かな）うように、はからうべきなのである。

かねてから事前に、あれこれ思ってしまったり、蓄えてしまったりするのは、皆、違反なのである。

よくよく思いはかるべきなのである。

第百十八章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

未だ学ぶべき物が有る人である僧は、各々、知るべきである。

人々には、大いに善くない所が有り、傲慢は第一の善くない所なのである。

仏教内外の経典や書籍は等しく、傲慢を戒めている。

仏教外の経典では、「貧しくても、へつらわない事は有っても、富んで傲慢に成らない事は無い」と話していて、「富を制止して、傲慢に成らないようにしよう」と思うのである。

最も、これが、大事なのである。

よくよく、これを思うべきなのである。

自身は下賤なのに、「高貴な人に劣らない」と思ってしまったり、「他人よりも優れている」と思ってしまったりするのは、ひどく傲慢なのである。

けれども、これは、戒めやすいのである。

また、世間で、自身が財宝に豊かで幸福も有る人は、眷属が囲んで敬礼するし、他人も許してくれる。

それを「善い」として傲慢に成るので、そばの下賤な人は、それを見て嫉妬し、心が傷つくのである。

他人の心を傷つけてしまうのを、自身が富んで高貴な人は、どのように慎むべきであるのか？

このように自身が富んで高貴な人は、戒め難いし、自身も慎む事ができない物なのである。

また、傲慢な心が無くても、ありのままに振る舞ってしまえば、そばの下賤な人は、嫉妬し、心が傷つくのである。

そう成らないように、よく慎む事を「傲慢を慎む」と言うのである。

自身の富は果報に任せて、貧しい下賤な人が見て嫉妬するのを考慮しない事を「傲慢な心」と言うのである。

仏教外の経典には、「貧しい人の家の前を車に乗って通り過ぎるなかれ」と記されている。

そのため、自身は朱色の豪華な車に乗る事ができても、貧しい人の前を通るのを遠慮するべきなのである。

仏教内の経典にも、同様の事が記されている。

けれども、今の僧は、「智慧や仏法によって他人に勝つべきである」と思ってしまうのである。

決して、智慧や仏法によって傲慢に成るなかれ。

自分よりも劣っている人の善くない所を話したり、あるいは、先人や同期などの善くない所を知って話したり非難したりするのは、ひどく傲慢なのである。

古代の先人は、「知者の近くでは負けても善いが、愚者の近くでは勝つなかれ」と話している。

自分が良く知っている事について、他人の心得方が悪くても、他人の善くない所を話すのは、自身が善くないのである。

仏法について話すにしても、先人や先輩を非難せず、また、無知蒙昧な愚かな人が嫉妬しやすい事なので、よくよく考慮するべきなのである。

私、道元が建仁寺にいた時も、人から仏法などについて質問される事が多かった。

それらの質問の中には、善くない質問も有ったが、傲慢について深く考慮して、ただ、ありのままに仏法の功徳を語って、他者の善くない所は、話さず、何もせずに、やめた。

愚者による見解への執着は深いので、私達の先人の高徳の僧の善くない所を話したとしても、必ず、(愚者は)怒りの心を起こすのである。

真実に智慧が有る人は、仏法の道理を心得たら、他人に言われなくても、自分の善くない所と、先人の高徳の僧の善くない所を思い知って、改めるのである。

前述などの事をよくよく思い知るべきである。

第百十九章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する上で、最も重要なのは、坐禅で、第一なのである。

中国の人達の多くが、真理を会得できたのは、皆、坐禅の力による物なのである。

一文字にも通じていない無学な非才な愚かな人も、坐禅に専念すれば、その禅定の功徳によって、多年の長い間、学んでいる聡明な人よりも優れる事ができるのである。

そのため、未だ学ぶべき物が有る人である僧は、坐禅に打ち込むのに専念して、他の事に関わるなかれ。

仏や祖師達の仏道とは、坐禅なのである。

他の事に従うべきではない。

第百二十章

懐奘が、ある時、次のように、質問した。

坐禅に打ち込むのと、読むのを並行して学んでいると、語録や「公案」、「修行者の手がかりとしての仏や祖師達の言動」などを見ると、百や千に一つでも、少々、心得る事も出来ます。

坐禅には、それほどの霊験や効果は無いです。

けれども、なお、坐禅を好むべきなのですか？

道元は、次のように、答えた。

「公案」、「修行者の手がかりとしての仏や祖師達の言動」を見て、少々、知覚が有る様でも、仏や祖師達の仏道から遠ざかってしまう因縁に成ってしまうのである。

得ようとする事が無く、悟ろうとする事が無く、端正に坐禅して、時を過ごせば、祖師達による教えに従っているのである。

古代の先人も、読む事と、坐禅に専念する事を共に勧めているが、なお、坐禅を優先して勧めているのである。

また、「話頭」、「公案」、「修行者の手がかりとしての仏や祖師達の言動」によって悟りを開いた人もいるが、それも、坐禅の功徳が悟りを開く原因と成ったのである。

正しい功徳は、坐禅による物なのである。

正法眼蔵随聞記 第六巻

侍者 懐奘 編

第百二十一章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

他人に恥じ入るのであれば、明らかに見る目が有る人に恥じ入るべきである。

私、道元が宋の時代の中国にいた時、天童山の如浄 和尚は、（私、道元を）そばに仕える侍者に要請して、次のように、話した。

「あなた、道元は、外国人であるが、器量が有る人である」

私、道元は、堅く、それを辞退した。

なぜなら、「日本に善行を聞かせるためにも、仏道を学び修行する稽古のためにも、大切であるが、僧達の中には見る目を備えている人がいて、外国人なのに大いなる寺の侍者に成ってしまったら、『大国である中国に善い人がいないと思われてしまう』と非難されてしまう事も有るかもしれないので、最も申し訳ない」と思ったからで、書状で、この旨を述べたら、如浄 和尚も、読んで、「中国といった国家を重んじているし、他人に恥じ入っている」と感心して、許してくれて、更に要請して来なかったのである。

第百二十二章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

ある人が、次のように、話した。

私は、病人です。
器ではありません。
仏道を学び修行するのに耐える事ができません。
「仏法で最重要な事を聞いて、独りで俗世から隠れて住んで、身を養い病気を自助して、一生を終えよう」と思います。

この言葉は、とても善くないのである。
先人の聖人は、必ずしも、健康で強くはなかったのである。
古代の先人は、ことごとく皆が、上等な器ではなかった！
釈迦牟尼仏の(肉体の)死後からを考えると、たいして長い時間が経っていない。
釈迦牟尼仏の存命時を考えると、人々は皆、俊才ではなかった。
善人もいたし、悪人もいた。
「比丘衆」、「僧達」の中に、不可思議な悪行をする僧もいたし、最も下品な器量の僧もいた。

けれども、卑下して「やめよう」と話してしまったり、悟りを求める心を起こさないで「器ではない」と話してしまったりして、仏道修行しなかった僧はいなかった。

今の生で、もし、仏道を学び修行しなければ、いつの生で、器量の人と成り、病気しない者と成って、仏道を学び修行する、というのか?!

ただ、身の命を顧みず、悟りを求める事を思い立って心して、修行する事こそ、仏道を学び修行する上で最も重要なのである。

第百二十三章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、衣服や食糧を貪るなかれ。

人々には皆、(神による運命による)食糧の分け前が有るし、(神による運命による)寿命の分け前が有る。

過分な食糧や寿命を求めても、得る事はできない。

まして、仏道を学んでいる人には、自然と、信者による捧げものが有るのである。

常に乞食する慣習も絶えていない。

また、寺の共有物も有り、私的に歪曲した営みではないのである。

果実と乞食と信心による布施という三種類の食糧は皆、「清浄食」なのである。

その他の、農業や商業や公務や工業による四種類の食糧は皆、清浄ではない「邪命食」なのである。

出家者の食糧の分け前ではない。

昔、一人の僧がいて、死んで、冥界へ行った。

閻魔大王は、次のように、話した。

「この人の寿命の分け前は未だ尽きていない。(この世へ)帰すべきである」

冥界の役人は、次のように、話した。

「寿命の分け前は尽きていませんが、食糧の分け前が既に尽きています」

閻魔大王は、次のように、話した。

「蓮(ハス)の葉を食べさせよう」

そのため、その僧は、蘇った後、通常の人の食べ物を食べる事ができ得ず、ただ、蓮(ハス)の葉だけを食べて、余生を過ごした。

出家者は、仏教を学んでいる力によって食糧の分け前も尽きないのである。白毫という一つの相を持っていた釈迦牟尼仏による、二十年間分の、残してくれている原因によって、(僧は、)多数の劫を経ながら受け入れて使用しても、尽きないのである。

ただ、仏道修行に専念して、衣服や食糧を求めるなかれ。

「身体、血肉さえ良く保持すれば、心も従って良く成る」という記述が医術などの書物にも見られる。

まして、仏道を学び修行する人が、戒を守って清浄に修行して、仏や祖師達の日常の所作に任せて身を統治していれば、心も従って整うのである。

仏道を学び修行する人は、「言葉を発しよう」とする時は、三度、顧みて、自身の利益や他者の利益のために(真の)利益が有れば、その言葉を話すべきなのである。

(真の)利益が無い言葉は、やめるべきなのである。

このような事も、一度では会得し難い。

心に気にかけて、徐々に、習うべきなのである。

第百二十四章

道元は、雑談のついでに、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、衣服や食糧について悩むなかれ。

この国は、辺境の小国であるが、昔も、今も、密教以外と、密教という二つの宗派が名声を得ていて、後世で人々に知られている人達も多い。

また、詩歌や、管弦楽器や、学問や武術や学芸の道を嗜む人々も多い。

このような人々のうち、一人も、「衣服や食糧に豊かであった」と言われているのを未だ聞いた事が無い。

皆、貧しさを忍耐して、他の事を忘れて、専念して、自分の道を好んだのである。

そのため、その名声を得ているのである。

まして、祖師達の仏門、仏道を学び修行する人は、処世術を捨てて、一切、名声や利益に走らない。

どうして、財産に豊かに成れるであろうか？　いいえ！

宋の時代の中国の寺では、末法の時代でも、仏道を学び修行する人が何千、何万人もいる中に、あるいは、遠方から来ている人や、あるいは、故郷を出ている人もいるのである。

どちらも、多分、貧しいのである。

けれども、未だ、貧しさを憂いとしない。

ただ、真理を未だ悟れない事だけを憂えて、あるいは、建物の上部や、あるいは、建物の下で坐禅して、死亡した父母のために喪に服すかのようにして、専念して、仏道を修行するのである。

私、道元が、まのあたりにして見た物事では、

西川からの僧は、遠方より来ているので、所持している物が無かった。

わずかに、墨を二、三丁、持っているだけであった。

その価値は二、三百文で、この国の二、三十文に相当するのを持って、中国の紙のうち下等な品質で極めて弱い紙を買い取って、(紙を)上半身や下半身の衣服などに作って着ていたので、立ったり座ったりする時に破れる音がして浅ましいのをも顧みず、憂えなかったのである。

ある人が、次のように、話した。

「あなたは、故郷に帰って、道具や衣装を整えなさい」

西川からの、その僧は、

「故郷は遠方なのです。

帰る途中、時間を空(むな)しく過ごしてしまって、仏道を学び修行する時間を失ってしまう事を憂えているのです」

と答えて、更に寒さも憂えず、仏道を学び修行したのである。

このため、宋の時代の中国という大国には、善い人も出て来るのである。

第百二十五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

次のように、伝え聞いている。

昔、雪峰山の寺が開山した時は、寺が貧困で、あるいは、料理する火の煙が絶えたり、あるいは、緑豆飯を蒸して食べたりして日々を送って、仏道を学び修行していたが、後には、千五百人の僧がいて、常に絶えなかった。

昔の人達は、このようであったのである。

今も、このようであるべきである。

僧への損害は、多くが、富んだり高貴に成ったりする事によって起こるのである。

釈迦牟尼仏が存命時、調達（デーヴァダッタ）が嫉妬を起こしてしまったのも、一日あたり車、五百台分の捧げものによって起こったのである。

ただ、自身に損害を与えるだけではなく、他者に悪行をさせる原因と成ってしまうのである。

真実の、仏道を学び修行する人は、どうして、富んだり、高貴に成ったりできるであろうか？　いいえ！

たとえ、清浄な信心による捧げものが多量に積み重なっても、恩を思って、恩に報いる事を思うべきなのである。

この国の人々は、自身のための利益を思って、布施をしてしまう。笑って歓迎する者どもに、よく与えてしまうのは、お決まりの、世俗の道理なのである。

ただ、他者の心に従おうとして、笑って歓迎してしまえば、仏道を学び修行する障害と成ってしまう。

ただ、飢えを忍耐し、寒さを忍耐して、専念して、仏道を学び修行するべきなのである。

第百二十六章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

古代の先人は、次のように、話している。

「聞きなさい。
見なさい。
得なさい」

また、(古代の先人は、)次のように、話している。

「得る事ができなければ、見なさい。
見る事ができなければ、聞きなさい」

これらの言葉の意味は、

「聞くよりも、見るべきである。
見るよりも、得るべきである」、

「未だ得る事ができなければ、見なさい。
未だ見る事ができなければ、聞きなさい」

という事なのである。

第百二十七章

道元は、また、次のように、話した。

仏道を学び修行する上での用心は、ただ、本(もと)からの執着を捨てる事なのである。

まず、身の所作を優先して改めれば、心も従って改まるのである。

まず、戒律を守れば、心も従って改まるのである。

中国では、俗世の人々などの日常の習慣で、(死んだ)父母への親孝行のために、宗廟で各々集会して泣くまねをするが、そのうちに、終には、本当に泣くのである。

初心者の、仏道を学び修行する人は、ただ、僧達に従って仏道修行するべきなのである。

「早く、用心や先例などを学び知ろう」と思うなかれ。

用心や先例などは、ただ、独り、山に入ったり、市場から隠れて修行する時に、誤り無く知る事ができていたら、善い、という事だけなのである。

僧達に従って修行すれば、真理を会得できるのである。

例えば、船に乗って行く時には、自分は船を漕ぐ様子を知らなくても、良い船長に任せていけば、知っている者も、知らない者も、彼岸に至るような物なのである。

善知識を持つ人々に従って、僧達と共に修行して、私的な歪曲が無ければ、自然と、悟りを求める心が有る人と成るのである。

仏道を学び修行する人は、たとえ、悟りを会得しても、「今が究極なのである」と思ってしまって、仏道修行をやめるなかれ。

仏への道は、果てしないのである。

悟っても、なお、仏道修行するべきである。

昔、良遂座主が、麻谷の所へ参った逸話を思うべきである。

第百二十八章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、「後日を待って仏道修行しよう」と思うなかれ。ただ、今日、今を空(むな)しく過ごさず、日々、刻々と勤めるべきなのである。

ある在家信者が、長く病気に成っていたが、去年の春頃、私、道元に会って、誓って、次のように、話した。

「今の病気が治療できたら、必ず、妻子を(泣く泣く)捨てて、寺の近くに庵(いおり)を結んで構えて、一月に二度有る『布薩』という儀式に参加し、日々、仏道修行し、仏法談義を見聞きして、分相応に、戒を守って、生涯を送ります」

その後、種々に治療した事によって、少し快方に向かった。

けれども、また、病気の再発が有って、月日を空(むな)しく過ごした。

今年の正月から、突然、病状が重く成ってしまって、次第に苦痛に責められる間、日頃、支度する予定であった庵(いおり)のための道具を運んで庵(いおり)を作る暇も無かったので、他人の庵(いおり)を借りて住んだが、わずか、一両日中に死去した。

死ぬ前夜に、菩薩戒を受け入れて、仏と仏法と僧に帰依して、臨終を善くして命を終えたので、家にいて妻子への恩愛を惜しんで狂乱して死ぬよりは善かったが、「去年、思い立った時に、家を離れて、寺に近づき、僧に成って仏道修行して、命を終えたら、優れていたのに」と思うにつけても、「仏道修行は、後日を待ってはいけない」と思うのである。

「身が病人なので、病気を治した後で、修行しよう」と思ってしまうのは、悟りを求める心の無さの仕業なのである。

四大元素が和合している身なので、誰もが病気が有る！

古代の先人は、必ずしも、健康で強くは無かった。

ただ、志さえ有れば、他の事を忘れて、修行するのである。

一大事が、身の上に出て来たら、必ず、些細な事は忘れてしまう習いなのである。

「仏道は一大事なので、一生のうちに極めよう」と思い、「日々、刻々と時間を空(むな)しく過ごさない」と思うべきなのである。

古代の先人は、「時間を空(むな)しく過ごすなかれ」と話している。

「病気を治そう」と営んでも、治らず、重病化して、ますます苦痛に責められたら、「少しでも苦痛の軽い時に、仏道修行しよう」と思うべきなのである。

強い苦痛を感じたら、「まだ、なお、重く成るよりも前に、仏道修行しよう」と思うべきなのである。

重病化したら、「死ぬよりも前に、仏道修行しよう」と思うべきなのである。

病気の治療では、快方に向かう場合も有るし、重病化する場合も有る。

また、治療しなくても快方に向かう場合も有るし、治療しても重病化する場合も有る。

これらをよくよく思考して、知るべきなのである。

仏道を学び修行する人は、「居所などを支度して、僧衣や器を整えた後に、仏道修行しよう」と思うなかれ。

貧困の人は、僧衣や器や道具に乏(とぼ)しくて、整うのを待っている間、次第に死が近寄るのを、どうするのか？

そのため、「居所の用意を待ち、僧衣や器を整えた後に、仏道修行しよう」と欲したら、一生を空(むな)しく過ごしてしまうであろう。

ただ、僧衣や器などが無くても、「在家信者も仏道は修行しているのである」と思って、修行するべきなのである。

また、僧衣や器などは、ただ、有るべき僧の姿の飾りに過ぎないのである。

真実の、仏道修行者は、それらに依存せず、(入手の)機会が来たら所有するように(運命に)任せるべきなのである。

強(し)いて求めるなかれ。

無いのを「持っていない」とも思うなかれ。

病気は治すべきであるのに、「わざと死のう」と思ってしまって、治さないのは、外道の見解なのである。

仏道のためならば、命を惜しむなかれ。

また、(仏道以外のために、)命を惜しまない事なかれ。

(治療の)機会が来たら、一箇所の灸や、一種類の煎薬などを用いるのは、仏道修行の障害とは成らない。

「仏道修行をさしおいて、病気の治療を優先して、その後、修行しよう」と思ってしまうのは、善くないのである。

第百二十九章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

海中に、「竜の門」と言う場所が有って、頻繁に大波が立つのである。
諸々の魚達は、その場所を通過したら、必ず、竜と成れるのである。
そのため、「竜の門」と言うのである。

今、考えてみると、その場所は、大波も、他の場所と同じなのである。
水も、同じく塩辛い水なのである。
けれども、神が定めた不思議で、魚達は、その場所を渡れば、必ず、竜と成るのである。
魚は、鱗も改変されず、身も同じ身のまま、突然に、竜と成るのである。

僧の所作も、このような物なのである。
場所も、他の場所と変わらないが、寺に入門すれば、必ず、仏と成り、祖師と成るのである。
食べ物も、他の人々と同じく食べるし、
衣服も、同じく着るし、
飢えを除くのも、寒さを防ぐ事も、同じであるが、
ただ、髪を剃り、僧衣を来て、食べ物を僧の食べ物にすれば、突然に、僧と成るのである。

仏や祖師に成る事を、遠くに求めるなかれ(。近くの日常の所作に有るのである)。

ただ、寺に入門するか、入門しないかは、その「竜の門」を通過するか、通過しないかが違うような物なのである。

また、俗世の人は、「私は、黄金を売っているが、他人が買ってくれない、ような物なのである」と話している。

仏や祖師達の真理も、このような物なのである。

真理を惜しんではいない。

常に与えているが、人が会得してくれないのである。

真理の会得は、才能が利発か、愚鈍かには左右されない。

人々は皆、仏法を悟る事ができるのである。

精進するか、怠惰であるかによって、真理の会得の遅い、速いが有るのである。

精進するか、怠惰であるかの違いは、志の有無による物なのである。

志が無いのは、この世のものの常の変化を思わないからなのである。

思考のたびに死が近づいている。

結局、一時も、時間を留められない。

短時間、存命の間に、時間を空(むな)しく過ごすなかれ。

古代の言葉で、「倉に住むネズミは食べ物に飢えてしまい、田を耕す牛は草が十分ではない」と言われている。

この言葉の意味は、「食べ物の中にいながら食べ物に飢えてしまい、草の中にいながら草に乏しい」という事なのである。

人も、このような者なのである。

仏道の中にいながら、仏道に適(かな)わない物なのである。

名声や利益を希望し求める心が止まれば、一生、安楽に成れるのである。

第百三十章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

達道者の行いは、善行にも、悪行に見える行いにも、皆、意図が有るのである。

凡人には量る事ができない。

昔、慧心僧都が、ある日、庭の前で草を食べている鹿を、他人に打たせて、追い払った。

ある人が、その時、次のように、質問した。

「師には、慈悲が無いかのように見えます。草を惜しんで、動物を悩ますのですか？」

慧心僧都は、次のように、話した。

「そうではない。

私、慧心僧都が、もし、鹿を打って追い払わなかったら、あの鹿は、終には、人に慣れてしまって、悪人が近づいた時は必ず殺されてしまうであろう。

このため、打って、追い払ったのである」

鹿を打って、追い払うのは、慈悲が無いかのように見えるが、内心では慈悲が深い道理とは、このような物なのである。

第百三十一章

道元は、ある日、僧達に示して、次のように、話した。

ある人がいて、仏法を質問して来たり、あるいは、修行での仏法の重要な事を質問して来たりしたら、僧は、必ず、真実を答えるべきなのである。

あるいは、他人が「器ではない」と顧みてしまって、あるいは、「初心者や、後進者の人なので、心得る事ができないであろう」と思ってしまって、便宜的な方法によって、真実ではない事を答えるなかれ。

菩薩戒の意味とは、たとえ、小乗の矮小な段階の器で、小乗の矮小な段階の真理を質問して来ても、ただ、大乗の大いなる段階の真理を答えるべきなのである、という事なのである。

釈迦牟尼仏の一生による教化も、同じなのである。

便宜的な方法による仮の教えは、実に、無益なのである。

ただ、(法華経という)最後の真実の教えだけが、実に、利益が有るのである。

そのため、他者が会得できるか、できないかを論じず、ただ、真実を答えるべきなのである。

もし、渦中の、仏法を質問して来た人を見て判断するのであれば、真実の「徳」、「善行」によって人を見て判断するべきである。

外見の仮初の「徳」、「善行」によって人を見て判断するなかれ。

昔、孔子の所に、一人の人が来て、帰属した。

孔子は、次のように、質問した。

「あなたは、何によって、来て、私、孔子に帰属したのか？」

その人は、次のように、話した。

「王者である、あなたが朝廷に参った時、それを見たら、顕々とした威厳が有ったし、威勢が有った。

そのため、帰属しました」

孔子は、その時、弟子に命じて、乗り物、衣装、金銀、財宝などを取り出して、これらを与えて、「あなたは、私、孔子に帰属した訳ではない（。車や衣服や宝や金銭に帰属しただけである）」と話して、帰させた。

第百三十二章

道元は、また、次のように、話した。

宇治の関白が、ある時、鼎殿に到って、火を焚く所を見ていたら、鼎殿の役人が、それを見て、「案内が無いのに、御所の鼎殿へ入るのは、何者ですか？！」と言って追い出されたので、その後、宇治の関白は、粗悪な衣服などを脱いで着替えて、顕々とした威厳の有る衣装で出て来たら、先ほどの鼎殿の役人は、遠くから見て、恐れ入って、逃げた。

その時、宇治の関白は、衣装を竿の先端にかけて、礼拝した。

ある人が、その事について質問すると、宇治の関白は、次のように、答えた。

「私が他人に敬われる理由は、私の『徳』、『善行』ではない。ただ、この衣装のためなのである」

愚かな者が他人を敬う理由は、このような物なのである。

仏経の文字などが敬礼される理由も、このような物なのである。

古代の先人は、次のように、話している。

「言葉が、天下に満ちても、失言は無い。

行いが、天下に遍く満ちても、怨まれて危害を加えられる事は無い」

この言葉の意味は、「言うべき言葉を言っているし、行うべき事を行っているからである」という事なのである。

これは、至高の「徳」、「善行」であり最重要の道理である言行なのである。

世間の人々の言行でも、私的な歪曲によって、はからって行うと、恐らくは、過失だけであろう。

僧の言行は、先例の証拠によって、定められている。

私的な歪曲が有るなかれ。

仏や祖師達が行って来ている道なのである。

仏道を学び修行する人は、各々、自ら、自身を顧みるべきである。

「自身を顧みる」とは、「私の、この心身を、どのように保持するべきなのか？」と顧みる事なのである。

僧は、既に、釈迦牟尼仏の子、釈迦牟尼仏の弟子なのである。

釈迦牟尼仏の家風や所作を習うべきなのである。

身口意の所作は、過去の仏が行って来ている所作が有るのである。

各々、その所作に従うべきである。

俗世の人ですらなお、「衣服は法に従うし、言葉は行動に従うのである」と話している。

まして、僧は、一切、私的な歪曲を用いるなかれ。

第百三十三章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

今の、仏道を学び修行する人は、多分、法を聞いている時、まず、「理解できている様子を他人に知られよう」と思ってしまい、善い解答の言葉を考えている間に、聞いている言葉が耳を通過して聞き逃してしまうのである。

総じて、その原因は、悟りを求める心が無く、自身への執着が有るからなのである。

ただ、まず、自身を忘れて、他人の言おうとしている真意をよく聞いて、後に、静かに思案して、理解し難い所が有ったり疑問点が有ったりすれば、追ってでも問いただし、心得たら、何度でも、師に提示するべきなのである。

「即座に理解している様子を他人に見せよう」とする者は、仏法をよく聞く事ができ得ないのである。

第百三十四章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

唐の太宗の時、外国から「千里の馬」を献上された。

太宗は、それを得ても喜ばず、自ら、次のように、思った。

「たとえ、私、太宗、独りが『千里の馬』に乗って千里を走れても、従う臣下がいなければ、意味が無い」

太宗は、そのため、魏徴を呼び寄せて、このように質問したら、魏徴も、次のように、話した。

「皇帝と心は同じで、同じ意見です」

そのため、その「千里の馬」に黄金と絹を負わせて返却した。

世間の皇帝ですら、役に立たないものを蓄えず、返却したのである。

まして、僧には、僧衣と器以外は、絶対に、役に立たないのである。

役に立たない物を蓄えて、どうするのか？

俗世の者ですらなお、唯一の道に専念して嗜む者は、田園や荘園などの財産を保持する事を重要としない。

(僧は、)ただ、一切の国土の人を国民や眷属とするのである。

地相法橋は、息子に遺言して、次のように、話した。

「ただ、この道に専念して、励むべきである」

まして、仏の子である仏の弟子である僧は、万事を捨てて、唯一の一大事に専念して嗜むべきなのである。

これは、第一の用心なのである。

第百三十五章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏道を学び修行する人は、師の所へ参って仏法を聞く時に、よくよく、極めて、重ねて聞いて、確定するべきである。

問うべきを問わず、言うべきを言わずして、過ごしてしまったら、必ず、自身にとって損と成るのである。

師は、必ず、弟子からの質問を待って、言葉を発するのである。

心得ている事でも、何度も質問して、確定するべきなのである。

師も、弟子に「良く心得たか？」と質問して、言い聞かせるべきなのである。

第百三十六章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

達道者の用心は、通常の人と異なる事が有る。

故人である建仁寺の栄西 僧正が存命の時に、寺中から食べ物が絶えて無くなってしまった事が有った。

その時、一人の在家信者が、栄西 僧正を呼んで、絹を一疋、布施した。

栄西 僧正は、喜んで、他人に持たせず、自ら受け取って、懐の中に入れて、寺に帰って、「知事」を務めている僧に与えて、次のように、話した。

「明朝の粥などにしなさい」

すると、ある俗世の人の所から、所望が有って、次のように、話していた。

「面目に関わる事が有って、絹が二、三疋、必要なのです。

少しでも有れば、欲しいです」

栄西 僧正は、先ほどの絹を取り返すと、この俗世の人に与えた。

「知事」を務めている僧も、僧達も、その時、意外だったので、疑問に思った。

栄西 僧正は、後に、次のように、話した。

「僧達は、各々、『間違っている』と思っているであろう。

けれども、私、栄西が思うに、

僧達は、各々、仏道への志が有って集まっている。

ある日、食べ物が絶えて無くなってしまって餓死しても、苦しくないであろう。

世俗に交ざっている人が、さしあたって、物事に欠いている苦悩を助ければ、僧達、各々のためにも、利益は優れているであろう」

真実の、達道者の思案とは、このような物なのである。

第百三十七章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

仏から仏まで、祖師から祖師まで、皆、本（もと）は、凡人なのである。

凡人である時は、きっと、悪業も有るし、悪い心も有るし、愚鈍さも有る。

けれども、ことごとく、これらを改めて、善知識を持つ人々に従って修行したので、皆、仏や祖師と成ったのである。

今の人も、このようであるべきである。

「自身は、愚鈍なので」と思ってしまって、卑下するなかれ。

今の生で、悟りを求める事を思い立って心しなければ、どんな時機を待って仏道修行するのか？！

今、強（し）いて、修行すれば、必ず、真理を会得できるのである。

第百三十八章

道元は、僧達に示して、次のように、話した。

政治の道の先例のことわざでは、「謙虚でなければ、忠告や助言を聞き入れる事ができない」と話している。

この言葉の意味は、「自分の見解を保持せず、忠臣の言葉に従って、道理に任せて、政治を行う」という事なのである。

僧が仏道を学び修行する時の用心や先例も、このような物なのである。わずかでも、自分の見解を保持していたら、師の言葉が耳に入らないのである。

師の言葉が耳に入らなければ、師の仏法を会得できないのである。ただ、仏法上の異なる見解を忘れるだけではなく、世俗の事や、飢えや寒さ等を忘れて、専念して心身を清めて聞く時、親しく聞き入れる事ができ得るのである。

このようにして聞く時は、道理も、疑問も、明らめる事ができるのである。真実の、真理の会得とは、従来の心身を捨てて、ただ、直に、他の僧達に従っていけば、真実の達道者と成れる、という事なのである。

これは、第一の先例なのである。